

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II

鳥取県東伯郡泊村

小 浜 ワ ラ 畑 遺 跡

小 浜 小 谷 遺 跡

池 ノ 谷 第 2 遺 跡

1998

財団法人 鳥取県教育文化財団

建設省 倉吉工事事務所

正誤表

頁 行	誤	正
P.62 SI07 Po56 備考	□縁端部黒斑	□縁端部黒斑あり。
P.63 SI07 Po67 手法上の特徴	…。胴部なで。…	…。胴部ナデ。…
P.63 SI09 Po73 手法上の特徴	…。一条の凸帯。	…。1条の凸帯。

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II

鳥取県東伯郡泊村

小 浜 ワ ラ 畑 遺 跡

小 浜 小 谷 遺 跡

池 ノ 谷 第 2 遺 跡

1 9 9 8

財団法人 鳥取県教育文化財団

建設省 倉吉工事事務所

# 序

泊村は、自然環境にも恵まれ、また、丘陵地には多くの埋蔵文化財が存在しています。なかでも、小浜地内にある池ノ谷第2遺跡では、昭和初期に古式の銅鐸が、国内では数例しか確認されていない銅製舌を伴って出土しています。また、石脇地内にある石脇2号墳（尾尻古墳）からは、仿製斜縁獣帯鏡1面が出土しているなど、泊村内には当時の歴史を考える上でも大変貴重な資料があります。

当財団では、建設省の委託を受け、「一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う発掘調査」として、平成8及び9年度の二か年にわたり、石脇第3遺跡森末地区をはじめ計8遺跡を調査しました。

その結果、古代交通関係の遺構が出土した石脇第3遺跡森末地区、壺形埴輪が多数出土した石脇8号墳、朝鮮半島との交流が考えられる石脇第1遺跡など、大変貴重な遺跡を調査することができました。

今回、これらの調査成果を報告書にまとめることができましたが、本報告書が教育および学術研究のため広く活用され、郷土の歴史を解き明かしていく一助になればと期待するとともに、文化財に対する理解や認識がより深まり、その成果が長く後世に伝えられれば幸いです。

最後に、建設省倉吉工事事務所ならびに交通の不便な所にもかかわらず調査に参加して下さった地元の方々をはじめ、ご協力いただいた方々に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団  
理事長 田 淵 康 允

# 序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山を經由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）まで76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。その中の一つに東伯郡羽合町及び泊村地内において、将来の国土開発幹線道路として、当面活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である青谷・羽合道路の整備を進めています。

羽合工区は、泊村原地内でインターチェンジにより現国道9号及び（主）倉吉青谷線とアクセスし、羽合町長瀬でインターチェンジによって北条道路一般部と一部アクセスしますが、途中東郷池が見渡せる位置にサービスエリアが予定されており延長6kmの県中部地方で初めての高規格道路で、昭和61年度に国道9号バイパス事業として事業に着手しましたが、63年度に高規格な機能を持たすように構造変更を行い、同年用地買収に着手しました。平成2年度からは、羽合高架橋下部工事に着手し、平成4年度に下部工を完了し、上部工に着手しました。平成9年度は、泊高架橋下部工事に着手し、羽合町宇野地区から、泊村宇谷地区までの改良工事を促進します。

このルートには、全部で10か所の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い、記録保存を行うこととなりました。このうち泊村地内では、石脇第3遺跡森末地区、同操り地区、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、石脇第1遺跡、小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、池ノ谷第2遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持っていることに御理解いただければ幸いに存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまで、ご協力いただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成10年3月

建設省 倉吉工事事務所長  
西 田 和 昭

# 例 言

1. 本書は、一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う、鳥取県東伯郡泊村小浜字ワラ畑654に所在する小浜ワラ畑遺跡、字小谷466に所在する小浜小谷遺跡、字千速東平431、431-1、字池ノ谷231-2、232-8他8筆に所在する池ノ谷第2遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本調査は、建設省中国地方建設局の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所が平成9年度に行った。

3. 本報告書で示す標高は、基準点BM2のH=57.823m、道路センター杭（A）No.8+40のH=57.445m、KBMのH=76.615mを起点とする標高値を使用し、方位は磁北を示す。

X：、Y：の数值は国土座標第V系の座標値である。

5. 本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/50000地形図「青谷・倉吉」、泊村1/5000地形図「地区再編農業構造改善事業樹立現況平面図1」を使用した。

6. 報告書の作成は、調査員の討議に基づくものである。報告書本文については、調査員が協議のうえ分担して執筆し、執筆担当者名を目次・文末に記載した。

遺構図の浄写は、中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行った。

遺構・遺物写真は発掘担当調査員が撮影した。

本書の編集は牧本・八峠が行った。

7. 遺構実測は基本的に調査員が行ったが、調査前および最終の地形測量については、一部を測量コンサルタント会社に委託して行った。

8. 小浜ワラ畑遺跡竪穴住居内で出土した炭化材の樹種鑑定を、鳥取大学農学部古川郁夫教授にお願いし、多忙にも関わらず玉稿をいただいた。

9. 遺跡内出土石器の石材鑑定を鳥取大学赤木三郎名誉教授、山名巖氏にお願いした。

10. 出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されているが、出土遺物は、将来、泊村教育委員会に移管する予定である。

11. 現地調査および報告書の作成に当たって、下記の方々に御指導、御協力していただいた。

岸田哲夫 田中義昭 根鈴輝雄

（敬称略）

# 凡 例

1. 発掘調査時における遺構番号と報告書記載の遺構番号は、基本的に一致するが、以下のものは調査時から変更したものである。

小浜小谷遺跡		池ノ谷第2遺跡			
調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書
S B01	S I 01	S K06	未記載	S K10	S K06

2. 本報告書における遺構記号は次のように表す。

S I：竪穴住居跡 S K：土坑・土壇 S D：溝状遺構 S S：段状遺構 S X：埋葬施設  
P：柱穴・ピット





3. 本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。

(1)遺構図－竪穴住居跡：1/80、掘立柱建物跡：1/80、土坑・土壇：1/40・1/60、  
溝状遺構：1/60・1/80・1/100・1/200、段状遺構：1/80、ピット群：1/40、  
床面・ピット遺物出土状況：1/10・1/20、埋葬施設：1/10

(2)遺物実測図－土器：1/4・1/8、金属製品：1/2・1/4、石器：1/4

4. 遺構の測定値のうち、ピットの規模は（長軸×短軸－深さ）cmで表した。竪穴住居跡の規模は、壁溝を除いた床面の規模である。

5. 遺構図における表示は以下のとおりである。

：焼土面、：貼床、：焼土、：炭化物  
●：土製品、□：石製品、△：金属製品




6. 本報告書における遺物記号は次のように表す。

Po：土器・土製品、S：石器、F：鉄製品、B：銅製品

7. 土器実測図のうち、縄文土器・弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器・陶磁器は断面黒塗り、瓦質土器は網かけで表現した。

遺物実測図中における記号は以下のとおりとする。

→：ケズリの方向（砂粒の動きで判断した）、……：擦り範囲、—：敲打範囲、

：赤色塗彩、：敲打面、：擦り面・砥面

床面・ピット内出土遺物には遺物番号の前に●印をつけた。

8. 遺跡名には略号を用い、小浜ワラ畑遺跡=KW、小浜小谷遺跡=KK、池ノ谷第2遺跡=IT2とした。

遺物には、遺跡名略号、地区名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に明記した。実測した遺物については、実測者番号（野崎1等）をシールに記し、それを個体ごとに貼り付け、実測原図にもその番号を記した。

9. 遺物観察表については以下のとおりとする。

(1)法量は、土器については基本的に口径、器高、胴部最大径、底部径を記載した。石器、鉄器、玉製品については基本的に最大長、最大幅、最大厚、重さを記載した。その他の計測値については、その都度計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には数値の前に※印、残存値は同様に△印を付した。

(2)手法の欄に記載されている成形、調整及び施文の方向は、実測図で表された方向である。

10. 文章中で触れる土器形式名、年代（年代観）は、縄文時代については『縄文土器大観』<sup>(1)</sup>、弥生時代後期から古墳時代中期の弥生土器及び土師器については南谷大山編年、古墳時代中期から奈良及び平安時代の須恵器については陶邑田辺編年<sup>(2)</sup>を参考にした。<sup>(3)</sup>

# 目 次

序  
序 文  
例 言  
凡 例  
目 次

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	牧本	1
第2節 調査の経過と方法	牧本	1
第3節 調査体制	牧本	3

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	八峠	4
第2節 歴史的環境	岩崎	5

## 第3章 小浜ワラ畑遺跡の調査

第1節 調査の概要	八峠	8
第2節 竪穴住居跡	井上 岩崎 牧本 八峠	13
第3節 土 坑	牧本 八峠	25
第4節 段状遺構	牧本	28
第5節 自然流路	八峠	28
第6節 遺構外遺物	八峠	30

## 第4章 小浜小谷遺跡の調査

第1節 調査の概要	八峠	31
第2節 段状遺構・竪穴住居跡	八峠	33
第3節 土坑・土壇・埋葬施設	八峠	35
第4節 溝状遺構	八峠	38
第5節 ピット群	八峠	39

## 第5章 池ノ谷第2遺跡の調査

第1節 調査の概要	牧本	40
第2節 土坑・土壇	井上 岩崎 牧本	45
第3節 溝状遺構	岩崎 牧本	49
第4節 ピット群	牧本	51
第5節 銅鐸出土地の調査	牧本	52
第6節 遺構外遺物	牧本	55

## 第6章 遺構・遺物の検討

第1節 出土遺物の検討	牧本	56
第2節 小浜ワラ畑遺跡の集落変遷	牧本	58

註・参考文献		60
--------	--	----

遺物観察表		61
-------	--	----

特 論 1	株式会社 古環境研究所	65
-------	-------------	----

特 論 2	鳥取大学農学部 古川郁夫	66
-------	--------------	----

図 版



# 挿図目次

挿図1	調査区位置図	2	挿図39	小浜小谷遺跡SK01遺構図	35
挿図2	泊村の位置図	4	挿図40	小浜小谷遺跡SK02遺構図	35
挿図3	周辺遺跡分布図	6	挿図41	小浜小谷遺跡SK03遺構図	36
挿図4	小浜ワラ畑遺跡調査前地形測量図	9・10	挿図42	小浜小谷遺跡SK04出土遺物実測図	36
挿図5	小浜ワラ畑遺跡遺構全体図	11・12	挿図43	小浜小谷遺跡SK04遺構図	36
挿図6	小浜ワラ畑遺跡S101遺構図	13	挿図44	小浜小谷遺跡SX01遺構図	37
挿図7	小浜ワラ畑遺跡S102出土遺物実測図	14	挿図45	小浜小谷遺跡SX01墓壇掘り方実測図	38
挿図8	小浜ワラ畑遺跡S102遺構図	14	挿図46	小浜小谷遺跡SD01遺構図	38
挿図9	小浜ワラ畑遺跡S103・04遺構図	15	挿図47	小浜小谷遺跡ピット群01遺構図	39
挿図10	小浜ワラ畑遺跡S103出土遺物実測図	16	挿図48	小浜小谷遺跡ピット群02遺構図	39
挿図11	小浜ワラ畑遺跡S105P19内遺物出土状況 図	16	挿図49	池ノ谷第2遺跡SK01遺構図	40
挿図12	小浜ワラ畑遺跡S105遺構図	17	挿図50	池ノ谷第2遺跡調査前地形測量図	41・42
挿図13	小浜ワラ畑遺跡S105出土遺物実測図	18	挿図51	池ノ谷第2遺跡遺構全体図	43・44
挿図14	小浜ワラ畑遺跡S106遺構図	19	挿図52	池ノ谷第2遺跡SK02遺構図	45
挿図15	小浜ワラ畑遺跡S106出土遺物実測図	19	挿図53	池ノ谷第2遺跡SK02出土遺物実測図	46
挿図16	小浜ワラ畑遺跡S107出土遺物実測図(1)	20	挿図54	池ノ谷第2遺跡SK03遺構図	46
挿図17	小浜ワラ畑遺跡S107遺構図	21	挿図55	池ノ谷第2遺跡SK04出土遺物実測図	46
挿図18	小浜ワラ畑遺跡S107出土遺物実測図(2)	22	挿図56	池ノ谷第2遺跡SK04遺構図	47
挿図19	小浜ワラ畑遺跡S108遺構図	23	挿図57	池ノ谷第2遺跡SK05遺構図	47
挿図20	小浜ワラ畑遺跡S108出土遺物実測図	23	挿図58	池ノ谷第2遺跡SK06遺構図	48
挿図21	小浜ワラ畑遺跡S109内SK1遺構図	23	挿図59	池ノ谷第2遺跡SK07出土遺物実測図	48
挿図22	小浜ワラ畑遺跡S109遺構図	24	挿図60	池ノ谷第2遺跡SK07遺構図	48
挿図23	小浜ワラ畑遺跡S109出土遺物実測図	25	挿図61	池ノ谷第2遺跡SK08遺構図	49
挿図24	小浜ワラ畑遺跡SK01遺構図	25	挿図62	池ノ谷第2遺跡SK09遺構図	49
挿図25	小浜ワラ畑遺跡SK02遺構図	26	挿図63	池ノ谷第2遺跡SD01遺構図	50
挿図26	小浜ワラ畑遺跡SK03遺構図	26	挿図64	池ノ谷第2遺跡SD02遺構図	51
挿図27	小浜ワラ畑遺跡SK04遺構図	27	挿図65	池ノ谷第2遺跡ピット群01遺構図	51
挿図28	小浜ワラ畑遺跡SK05遺構図	27	挿図66	池ノ谷第2遺跡銅鐸出土地周辺出土遺物実 測図	52
挿図29	小浜ワラ畑遺跡SK05出土遺物実測図	27	挿図67	池ノ谷第2遺跡銅鐸出土地周辺グリッド設 定図・土層断面図	53・54
挿図30	小浜ワラ畑遺跡SS01出土遺物実測図	28	挿図68	池ノ谷第2遺跡遺構外出土遺物実測図	55
挿図31	小浜ワラ畑遺跡SS01遺構図	28	挿図69	小浜ワラ畑遺跡土器編年案	57
挿図32	小浜ワラ畑遺跡SD01遺構図	29	挿図70	小浜ワラ畑遺跡集落変遷図	59
挿図33	小浜ワラ畑遺跡SD01出土遺物実測図	30			
挿図34	小浜ワラ畑遺跡遺構外出土遺物実測図	30			
挿図35	小浜小谷遺跡調査前地形測量図	32			
挿図36	小浜小谷遺跡遺構全体図	32			
挿図37	小浜小谷遺跡SS01・S101出土遺物実測 図	33			
挿図38	小浜小谷遺跡SS01・S101遺構図	34			

# 挿表目次

挿表 1	小浜小谷遺跡ピット群一覧表	39	挿表 8	小浜ワラ畑遺跡出土土器観察表(3)	63
挿表 2	池ノ谷第 2 遺跡ピット群01一覧表	51	挿表 9	小浜ワラ畑遺跡出土石器観察表	63
挿表 3	小浜ワラ畑遺跡編年案対照表	57	挿表 10	小浜小谷遺跡出土土器観察表	64
挿表 4	小浜ワラ畑遺跡竪穴住居跡一覧表	59	挿表 11	池ノ谷第 2 遺跡出土土器観察表	64
挿表 5	小浜小谷遺跡竪穴住居跡一覧表	59	挿表 12	池ノ谷第 2 遺跡出土石器観察表	64
挿表 6	小浜ワラ畑遺跡出土土器観察表(1)	61	挿表 13	池ノ谷第 2 遺跡出土金属器観察表	64
挿表 7	小浜ワラ畑遺跡出土土器観察表(2)	62			

# 図版目次

図版 1	小浜ワラ畑遺跡調査前状況 (北東上空から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 07 完掘状況 (南東から)	
	小浜ワラ畑遺跡調査前状況 (上空から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 07 検出状況 (南東から)	
	小浜ワラ畑遺跡調査前状況 (西から)		図版 5	小浜ワラ畑遺跡 S I 07 土層断面 (南西から)	
	小浜ワラ畑遺跡完掘状況 (上空から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 07 炭化材・遺物出土状況 (南東から)	
	小浜ワラ畑遺跡完掘状況 (西上空から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 07 炭化材・遺物出土状況 (北から)	
	小浜ワラ畑遺跡完掘状況 (南上空から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 07 P 6 内炭化材出土状況 (南から)	
図版 2	小浜ワラ畑遺跡 S I 01・S K 02 完掘状況 (北西から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 07 甕 Po38 出土状況 (東から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 02 完掘状況 (南東から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 07 甕 Po39、高坏 Po53・54、 甕 Po67 出土状況 (南東から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 02 西側土層断面 (東から)		図版 6	小浜ワラ畑遺跡 S I 07 高坏 Po50 出土状況 (南から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 02 炭化物出土状況 (北から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 07 甕 Po68 出土状況 (東から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 03・04 完掘状況 (北から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 08 完掘状況 (南から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 03・04 土層断面 (南西から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 09 完掘状況 (南から)	
図版 3	小浜ワラ畑遺跡 S I 03 遺物出土状況 (南東から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 09 甕 Po71 出土状況 (北東から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 05 完掘状況 (北から)			小浜ワラ畑遺跡 S I 09 内 S K 1 検出状況 (北東から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 05 貼床除去後状況 (南東から)		図版 7	小浜ワラ畑遺跡 S K 01 完掘状況 (北から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 05 土層断面 (南から)			小浜ワラ畑遺跡 S K 02 検出状況 (北西から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 05 特殊ピット完掘状況 (南から)			小浜ワラ畑遺跡 S K 03 完掘状況 (北西から)	
	小浜ワラ畑遺跡 S I 05 焼土検出状況 (北から)			小浜ワラ畑遺跡 S K 04 完掘状況 (北東から)	
図版 4	小浜ワラ畑遺跡 S I 05 高坏 Po18 出土状況 (北から)				
	小浜ワラ畑遺跡 S I 05 高坏 Po19 出土状況 (北から)				
	小浜ワラ畑遺跡 S I 06 完掘状況 (北西から)				
	小浜ワラ畑遺跡 S I 06 椀 Po34 出土状況 (西から)				

- 小浜ワラ畑遺跡 S K05 検出状況 (北から)  
 小浜ワラ畑遺跡 S K05 完掘状況 (北から)
- 図版 8 小浜ワラ畑遺跡 S S01 完掘状況 (南東から)  
 小浜ワラ畑遺跡 S S01 土層断面 (南から)  
 小浜ワラ畑遺跡 S D01 完掘状況 (北東から)  
 小浜ワラ畑遺跡 S D01 検出状況 (東から)  
 小浜ワラ畑遺跡 S D01 土層断面 (北から)  
 小浜ワラ畑遺跡作業風景
- 図版 9 S I02Po1・2・3、S I03Po4・5、  
 S I05Po6・11・12・13・14・18・19・21・  
 22・23・24
- 図版 10 S I05Po26・27、S I06Po28・29・30・31・  
 32・33・34・35・36・37、S I07Po38・39・  
 40・41・42・43・44・45・46・48
- 図版 11 S I07Po49・50・51・52・53・54・55・56・  
 57・58・61・66・67・68・S2・S3
- 図版 12 S I09Po70・71・74・75、S K05Po76・77・  
 79、S S01Po80、S D01Po81・84・85・86・  
 87、遺構外Po88・89・90・91・92・93
- 図版 13 小浜小谷遺跡調査前状況 (上空から)  
 小浜小谷遺跡完掘状況 (上空から)  
 小浜小谷遺跡 S I01・S S01 完掘状況 (北から)  
 小浜小谷遺跡 S K01 完掘状況 (北から)  
 小浜小谷遺跡 S K02 完掘状況 (南から)  
 小浜小谷遺跡 S K03 完掘状況 (南から)
- 図版 14 小浜小谷遺跡 S K04 完掘状況 (東から)  
 小浜小谷遺跡 S K04 須恵器類出土状況 (東から)  
 小浜小谷遺跡 S K04 炭化物出土状況 (東から)  
 小浜小谷遺跡 S X01 検出状況 (北から)  
 小浜小谷遺跡 S X01 完掘状況 (北から)  
 小浜小谷遺跡 S X01 掘り方完掘状況 (北から)
- 図版 15 小浜小谷遺跡 S D01 完掘状況 (北東から)  
 小浜小谷遺跡 S D01 検出状況 (北から)  
 小浜小谷遺跡ピット群01完掘状況 (北から)  
 小浜小谷遺跡ピット群02完掘状況 (東から)  
 小浜小谷遺跡 D4 グリッドピット完掘状況  
 (北西から)  
 小浜小谷遺跡作業風景
- 図版 16 S S01Po1・2・4・5・6・7、S K04  
 Po8・9・10・10 (外面)・11・11 (外面)
- 図版 17 池ノ谷第2遺跡調査前状況 (西上空から)  
 池ノ谷第2遺跡調査前状況 (上空から)  
 池ノ谷第2遺跡完掘状況 (東上空から)

- 池ノ谷第2遺跡完掘状況 (北上空から)  
 池ノ谷第2遺跡完掘状況 (上空から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K01 完掘状況 (北東から)
- 図版 18 池ノ谷第2遺跡 S K01 土層断面 (東から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K02 完掘状況 (北から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K02 土層断面 A-A' ベルト  
 (北から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K03 完掘状況 (北西から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K04 完掘状況 (南から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K05 完掘状況 (北から)
- 図版 19 池ノ谷第2遺跡 S K06 完掘状況 (東から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K07 完掘状況 (西から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K07 土層断面 A-A' 南側  
 (東から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K07 土層断面 B-B' 西側  
 (北から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K08 完掘状況 (南から)  
 池ノ谷第2遺跡 S K08 掘り下げ状況 (南から)
- 図版 20 池ノ谷第2遺跡 S K09 完掘状況 (東から)  
 池ノ谷第2遺跡 S D01-1 検出状況  
 (北東から)  
 池ノ谷第2遺跡 S D01-1 完掘状況  
 (北東から)  
 池ノ谷第2遺跡 S D01-2 完掘状況 (北から)  
 池ノ谷第2遺跡 S D01A ベルト土層断面  
 (北東から)  
 池ノ谷第2遺跡 S D01E ベルト土層断面  
 (東から)
- 図版 21 池ノ谷第2遺跡東斜面銅鐸出土地周辺グリ  
 ッド掘り下げ状況 (西から)  
 池ノ谷第2遺跡東斜面銅鐸出土地周辺グリ  
 ッド掘り下げ状況 (東から)  
 池ノ谷第2遺跡東斜面銅鐸出土地周辺第6グ  
 リッド南側土層断面 (北から)  
 池ノ谷第2遺跡東斜面完掘状況 (東から)  
 池ノ谷第2遺跡東斜面完掘状況 (上空より)  
 池ノ谷第2遺跡銅鐸出土地周辺磁気探査状況
- 図版 22 S K02Po1・S1、S K04Po2・3、S K07  
 F1、遺構外Po4・5・7・9・10・S2・  
 S3・B1

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が行われている。このうち、鳥取県中部地域の青谷・羽合道路は、泊村原のインターチェンジから青谷町青谷のインターチェンジ間15.6kmの自動車専用の高規格道路である。

計画地区とその周辺は、石脇地区においては周知の石脇第1遺跡、石脇第3遺跡、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡が、小浜地区には周知の小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、小浜千速遺跡、池ノ谷第2遺跡などがあり、遺跡が密集する地域であるため、建設に先立ち、計画地内の遺跡・遺構の広がりを確認する必要性が生じた。そして、平成6から平成8年度に亘って泊村教育委員会によって、国庫補助事業として各丘陵上を中心に試掘調査が行われ、各遺跡で遺構及び遺物が検出された。<sup>(4)</sup>

この結果を受け、建設省中国地方建設局（倉吉工事事務所）は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、文化財保護法第57条の3に基づく通知を行った上、文化庁長官の指示により、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、文化庁長官から発掘調査実施の指示を受けたので、中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所が、発掘調査を担当することとなった。

平成8年度は、石脇第3遺跡森末地区4762.4㎡、寺戸第1遺跡1806㎡、寺戸第2遺跡5450.6㎡、石脇第1遺跡4127.6㎡を調査する予定であった。このうち、石脇第1遺跡は用地買収の進捗状況を勘案し、石脇第3遺跡操り地区の一部4215㎡に振替えとなり、発掘調査面積も、石脇第3遺跡森末地区が5244㎡、寺戸第1遺跡が1590㎡、寺戸第2遺跡が4540㎡、石脇第3遺跡操り地区の一部が4590㎡に変更となった。

平成9年度は、石脇第1遺跡4128㎡、石脇第3遺跡操り地区の残りの部分4143㎡、小浜千速遺跡3900㎡、池ノ谷第2遺跡4193㎡を調査する予定であった。このうち、小浜千速遺跡の調査の年度内の実施が困難となったために、急遽小浜ワラ畑遺跡2509㎡、小浜小谷遺跡512㎡に振替えになり、発掘調査面積も、石脇第1遺跡3929㎡、石脇第3遺跡操り地区4489㎡、小浜ワラ畑遺跡2699㎡、小浜小谷遺跡602㎡、池ノ谷第2遺跡4473㎡に変更となった。

なお、平成8年度調査および平成9年度調査区のうち、石脇第1遺跡・石脇第3遺跡操り地区の調査については、鳥取県教育文化財団調査報告書54を参照していただきたい。（牧本）

## 第2節 調査の経過と方法

各調査区は、丘陵上及び丘陵斜面に立地し、また、周辺は耕作地等となっているため、排土等が流失しないようにこころがけた。排土は、ベルトコンベヤー・重機によって調査区外へ搬出し、一部の排土を、ダンプで場外搬出した。

平成9年度は、用地買収の関係上石脇第1遺跡、石脇第3遺跡操り地区の一部、小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、池ノ谷第2遺跡が調査対象となった。

小浜ワラ畑遺跡では、調査区全体を国土座標に載るように10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は1～6、東西軸はA～Gとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北東側の杭名をとって呼称した。座標は、A2杭（X：-54.090km、Y：-33.540km）、G4杭（X：-54.030km、Y：-33.520km）となった。

調査は、調査前地形測量・ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影終了後、重機による表土剥ぎ作業を6月13日から6月19日にかけて行い、検出作業を6月19日から8月29日にかけて行った。

その結果、古墳時代中期後半の竪穴住居跡9基、縄文時代後期の土坑1基、時期不明の土坑4基、自然流路1条を検出した。その後調査区完掘状況空中写真撮影、最終地形測量を業者委託し、9月11日にすべての作業を終了した。

小浜小谷遺跡では、調査区全体を国土座標に載るように10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は1～6、東西軸はA～Gとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北東側の杭名をとって呼称した。座標は、A 2 杭 (X: -53.840km、Y: -33.140km)、C 4 杭 (X: -53.820km、Y: -33.120km) となった。

調査は、調査前地形測量・ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影終了後、重機による表土剥ぎ作業を9月8日に行い、検出作業を9月8日から10月7日にかけて行った。

その結果、奈良時代の竪穴住居跡1基、段状遺構1基、奈良時代後半の土坑1基、時期不明の土坑3基、石櫃状埋葬施設1基、溝状遺構1条、ピット群2か所を検出した。

その後、調査区完掘状況空中写真撮影を業者委託し、11月11日にすべての作業を終了した。

池ノ谷第2遺跡では、調査区全体を国土座標に載るように10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は1～11、東西軸はA～Iとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北東側の杭名をとって呼称した。座標はA 6 杭 (X: -53.810km、Y: -32.780km)、I 3 杭 (X: -53.730km、Y: -32.810km) となった。

調査は、調査前地形測量・写真撮影終了後、重機による表土剥ぎ作業を9月8日から10月1日にかけて行い、検出作業を9月8日から11月11日にかけて行った。この遺跡は、昭和初期に外縁付鈕I式の流水文銅鐸1口と共に銅舌2本が出土した重要な遺跡であったために、現地に遺存するであろう銅鐸埋納坑、および銅鐸破片を検出することを主眼とした。このため、出土地と推定される調査区南側の東斜面部を地形に沿って南北方向16m、東西方向21mの範囲を2mグリッドに設定して磁気探査を行い、また、三角点の東側斜面部についても磁気探査した後掘り下げを開始した。磁気探査ではわずかな反応が認められたが、反応のほとんどが後世の耕作に伴う攪乱に反応したものであることがわかった。

検出作業の結果、溝状遺構2条、土坑及び土壙9基を検出したが、銅鐸埋納坑は検出することはできなかった。その後、調査区完掘状況写真撮影を業者委託し、11月14日にすべての作業を終了した。(牧本)



挿図1 調査区位置図

### 第3節 調査体制

調査は、下記の体制で実施された。

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 田淵 康允（鳥取県教育委員会教育長）  
 常務理事 森田 哲彦（鳥取県教育委員会次長）  
 事務局長 岩本 武夫

財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

所長 古井 喜紀（県埋蔵文化財センター所長）  
 次長 八木谷 昇

調整係

係長 松田 潔  
 調査員 亀井 照人、小谷 修一

庶務係

主任事務職員 矢部 美恵、橋崎 康春

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所

所長 更田 怜治  
 主任調査員 牧本 哲雄、八峠 興  
 調査員 岩崎 康子、井上 達也  
 整理員 小椋 美佳

○調査指導 鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、田中義昭（鳥根大学）

○調査協力 泊村、泊村教育委員会、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所

○発掘調査・整理事業従事者

秋久勝義 新 泰信 新 豊 生田敏江 井坂幸枝 市橋貴志子 伊藤恵美子 大嶋昌子  
 大場 茂 尾川澄津子 尾川美佐子 尾坂 忠 尾坂富美子 表明美 加嶋福枝 加嶋三枝子  
 加嶋義則 勝田美登里 河口智津子 河口優子 河原義雄 蔵常 正 蔵常芳子 桑田範子  
 坂本俊和 桜井敏夫 佐々木瑞恵 嶋崎アツ子 嶋崎久子 清水房子 進木和美 陶山勝利  
 陶山富恵 谷本 登 谷本美智恵 津島時三 角田磨智子 津村重男 戸崎 文 戸崎 巖  
 中田 都 中原千恵 中村まきゑ 南條孝子 西村 巖 西本てる子 西山 裕 野崎悦子  
 羽田政夫 福永一明 藤田広子 藤田恭人 古谷京子 真壁 均 牧田理恵 松井久雄 松下清敏  
 松田アイ子 松田澄子 松田正己 松田八重子 松本敬子 光井芳子 村口いつ子 森 信季  
 山崎 巖 山下清範 山下節子 山田美幸 山本清子 山本久美恵 安田成行 山田暉美

（五十音順、敬称略）

#### 調査日誌抄

6月16日	小浜ワラ畑遺跡重機表土剥ぎ開始	9月24日	小浜小谷遺跡S I 01検出・掘り下げ
6月23日	小浜ワラ畑遺跡調査開始	9月25日	小浜小谷遺跡S K 04須恵器出土
7月4日	小浜ワラ畑遺跡S I 01完掘、S I 02炭化物出土	9月30日	池ノ谷第2遺跡銅鐸出土地周辺グリッド掘り下げ終了（10日～）、S D 01検出
7月7日	悪天候が続き作業中止が続く（～11日）	10月7日	小浜小谷遺跡S X 01完掘、調査終了
8月7日	小浜ワラ畑遺跡S I 07遺物実測	10月16日	池ノ谷第2遺跡S K 02完掘
8月25日	小浜ワラ畑遺跡S I 09・S D 01掘り下げ 厳しい残暑が続く（～9月11日）	10月24日	池ノ谷第2遺跡S D 02・S K 07掘り下げ
8月29日	小浜ワラ畑遺跡ラジコンヘリコプター空撮、調査終了	10月29日	池ノ谷第2遺跡銅鐸出土地掘り下げ終了 S K 06、S K 07完掘
9月8日	小浜小谷遺跡・池ノ谷第2遺跡調査開始	11月11日	小浜小谷遺跡・池ノ谷第2遺跡ラジコンヘリコプターによる空撮
9月9日	池ノ谷第2遺跡銅鐸出土地周辺磁気探査 鳥根大学田中義昭先生現場指導	11月12日	池ノ谷第2遺跡最終地形測量（～14日） 本年度調査すべて終了（14日）
9月9日	小浜ワラ畑遺跡最終地形測量終了		

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

今回調査の行なわれた東伯郡泊村は、鳥取県中央部にある東伯郡の東端に位置している。東は気高郡青谷町、西は東伯郡羽合町、南は東郷町に接し、北は日本海に面している。

泊村の地形は、平野部は総面積のわずか30%程で、海岸付近まで、標高100~300mの比較的低い山地がのびている。水田はわずかで、産業は漁業や畑作、果樹栽培が中心である。

泊の地名は、戦国時代に泊城の名がみえ、毛利方の拠点であったとされる。明治22年(1889)の町村制施行により、河村郡久津賀村、泊村、三橋村が成立、明治29年に郡の合併により東伯郡に所属、大正7年(1918)に三村が合併し、現村域となる。泊とは船の停泊する場所、港のことである。

泊付近の地質は、平地の大半は、沖積層と砂丘である。丘陵地帯は火山灰層におおわれ、溶岩台地地形を残している。その間を小浜川・石脇川・園川・原川・宇谷川の各小河川が流れ、尾根を分岐し、平地を造り出している。海岸は甲亀山が海に突出しており、その西側には泊砂丘が発達している。この砂丘は北からの強い季節風により形成されたもので、古砂丘と新砂丘がみられる。

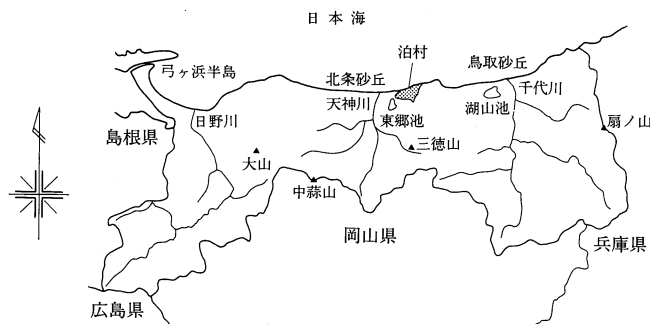
主な産業は、平地が少ないため、梨の栽培と漁業に負うところが大きい。江戸時代には、農業の他に山林を利用したとうはげ・こうぞ・みつまたなどの栽培や、浜を利用した製塩業が行われていた。明治年間には養蚕が盛んに行なわれた。二十世紀梨は、大正のはじめごろに植え付けられ、現在も斜面を中心に広く栽培されている。泊港は、江戸時代から藩直轄の舟番所が置かれ、海産物資の水揚港として重視されてきた<sup>(5)</sup>。

調査地は、青谷町との境、海に突き出した尾後鼻の南東側にある。いずれも南北方向にのびる山地の尾根付近にある。現在は国道9号線が東西にのびるものの、海岸付近まで山が突き出しており、小浜付近では崖が形成されている。調査地周辺は、平地が少ないため、古くから村の共有地として畑や梨の植え付けにより開墾されてきており、現在も利用されている。

小浜ワラ畑遺跡は、石脇第3遺跡操り地区の東側、西向きの斜面部にあり、谷間には湧水がある。北には東西方向にのびる砂丘列があり、遺跡の北東側は砂地となる。小浜小谷遺跡は、小浜ワラ畑遺跡の東側にあり、北側は標高70m程の丘陵となり、この南向きの斜面のやや張り出した部分にある。池ノ谷第2遺跡はさらに東側の標高約78mの丘陵上にある。北西と北東方向に張り出し、昭和初期に北東側の斜面から、2本の舌とともに外縁付鈕I式の銅鐸が1口出土している。北および西側は急斜面となり、頂部からは眼下に日本海を見下ろすことができる。

付近は青谷町長和瀬のすぐ西隣で、古くは因幡国と伯耆国の国境付近にあたり、江戸時代には付近に伯耆街道(米子往来)が通っていたとされる<sup>(6)</sup>。

(八峠)



挿図2 泊村の位置図

## 第2節 歴史的環境

現在までのところ、鳥取県内では遺構を伴う旧石器時代の遺跡は確認されていないが、大山山麓では旧石器がいくつか見つかっている。県中部では、関金町野津三第1遺跡、倉吉市中尾遺跡・長谷遺跡でナイフ型石器がローム層中より出土している。その他に、倉吉市和田の石刃、倉吉市上神51号墳下層・鋤の細石刃石核、倉吉市国府の搔器などがある。また、長谷遺跡では槍先型尖頭器も出土している。

鳥取県内で縄文時代草創期の土器の出土例はないが、大山山麓では、この時期の石器類がいくつか確認されている。このうち県中部では、関金町笹ヶ平、伝大栄町穂波、東伯町槻下などで有舌尖頭器が見つかっている。縄文時代早期の遺跡も、引き続き丘陵・台地上で確認されている。倉吉市取木遺跡では押型文土器とともに竪穴住居跡、屋外炉跡が見つかっている。また、東郷池周辺の南谷19号墳の調査中にスクレイパーが出土している。その他、倉吉市中田遺跡・野口遺跡、大栄町築山遺跡、東伯町大法3号墳下層などで土器や石器が出土している。

縄文時代前期は気候が温暖であったため海進が進み、入り江が形成されていった。遺跡もこの周辺で確認されるようになる。当時のラグーンに面した湖岸に立地する北条町島遺跡では、前期から晩期の土器、石器、丸木舟、動物骨、人骨、貝塚などが見つかっている。縄文時代中期は遺跡の密度が少なく、倉吉市平ル林遺跡、北条町船渡遺跡、などが知られるにすぎない。後期になるとラグーン周辺や河川流域で遺跡数は増加する。丘陵部では倉吉市津田峰遺跡、東伯町森藤第2遺跡、関金町横峯遺跡などで、中央に石組の炉をもつ住居跡が見つかっている。また、倉吉市天神川下流遺跡、東郷町北福第3遺跡で、この時期の土器が採集されている。晩期の遺跡では、弥生時代前期の遺跡との連続性が見られる。倉吉市松ヶ坪遺跡、羽合町長瀬高浜遺跡、北条町北尾遺跡、大栄町後口谷遺跡などで縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が共伴して出土している。

泊村内では、宮の山遺跡で縄文時代晩期の土器とともに石錘などの石器類が出土している。また、時期ははっきりしないが、村内数カ所で石皿、石錘などが見つかっている。

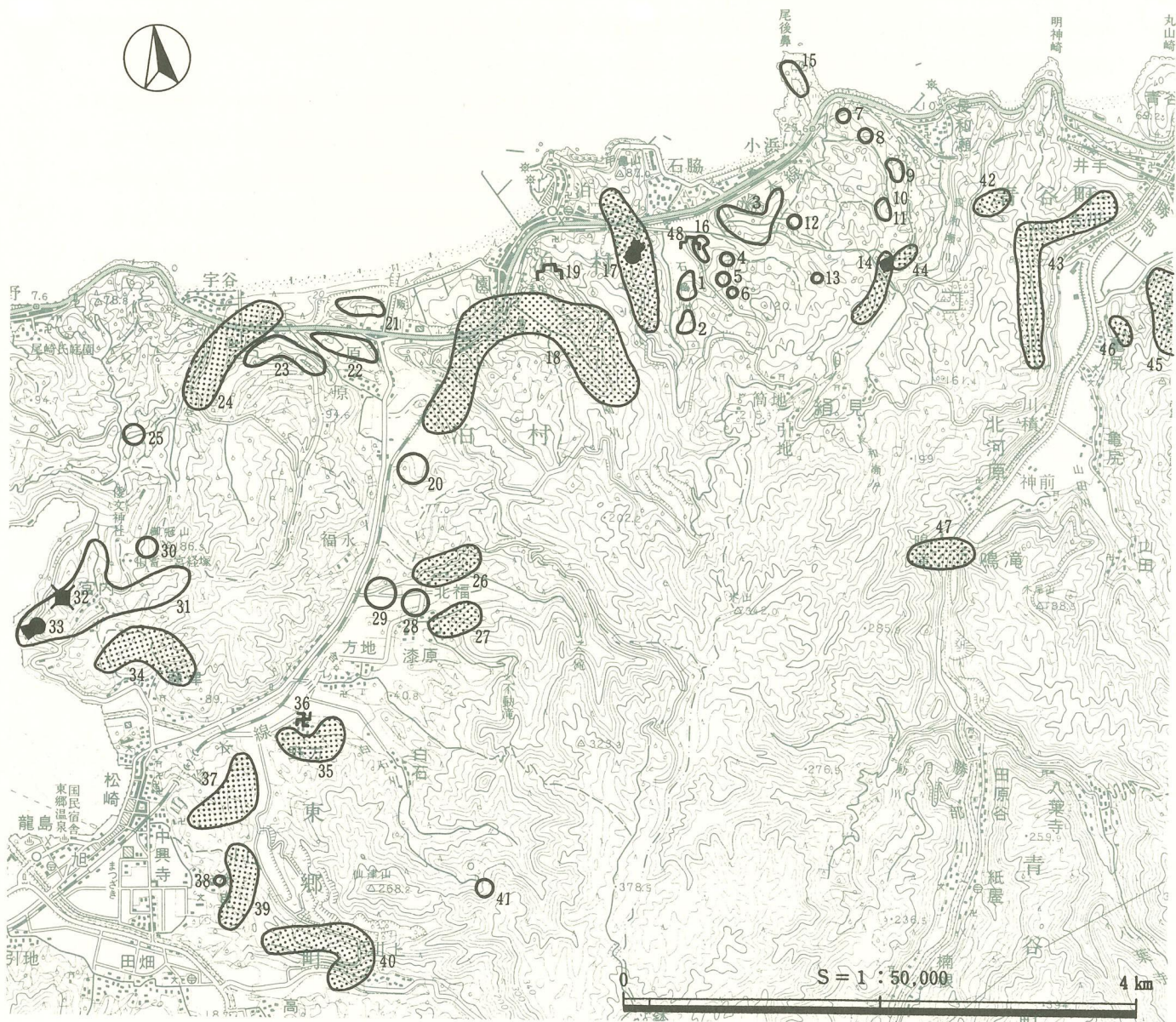
鳥取県内には、弥生時代の早い段階で弥生文化が流入したと考えられ、米子市目久美遺跡では弥生時代前期の水田跡が確認されている。県中部では、天神川河口の北条砂丘上に立地する長瀬高浜遺跡で、他地域に先行して集落が成立し、玉造り工房跡や住居跡のほか、土壙墓が見つかっている。弥生時代中期では、長瀬高浜遺跡で土壙墓がわずかに見られる以外に、現在のところ東郷池周辺で遺跡は見つかっていない。この時期の遺跡は天神川を遡った丘陵や台地上にあり、特に倉吉市後中尾遺跡では環濠集落が営まれる。後期も遺跡は丘陵上に集中し、東郷池周辺では泊村宇谷第1遺跡、羽合町南谷大山遺跡、倉吉市福庭遺跡をはじめとして、多くの遺跡で竪穴住居跡が調査されている。低地では、羽合町和助北遺跡で赤色塗彩された脚付注口土器がみられるのみである。またこの時期になると、木棺墓や土壙墓のほかに墳丘墓が出現してくる。なかでも倉吉市阿弥大寺1～3号墳丘墓、東郷町宮内1号墳丘墓、藤和墳丘墓などは四隅突出型墳丘墓の形態をとるものである。

また、県中部は銅鐸の出土例が多い地域で、泊村池ノ谷第2遺跡でも一口（外縁付鈕Ⅰ式）出土している。この銅鐸は身の流水文を人物や動物を描いた横帯で上下に分けており、神戸市桜ヶ丘1号銅鐸、滋賀県新庄銅鐸などと同範である。また、いっしょに青銅の舌が2本出土しており、この銅鐸は舌を使って音を出したものであることがわかる。

古墳時代前期、東郷池周辺は、橋津古墳群（馬ノ山古墳群）、長瀬高浜古墳群をはじめとして、県下でも有数の古墳密集地である。主な前期古墳には、復元全長100mを測る前方後円墳である橋津（馬ノ山）4号墳があり、三角縁神獣鏡を含む多数の副葬品が出土している。泊村には、全長33mと小規模な前方後円墳ではあるが石脇2号墳（尾尻古墳）があり、仿製斜縁獣帯鏡が1面出土している。長瀬高浜遺跡では、古墳時代前期に230棟ほどの竪穴住居、45棟の掘立柱建物をもつ大集落が出現する。この集落は中期中頃にはその規模が縮小し、集落廃絶後は古墳時代後期まで古墳が築造される。

中期も引き続き大型前方後円墳が築造される。東郷池東岸には全長90m以上の宮内狐塚古墳、南岸には全長110mの野花北山1号墳など、県内でも最大規模の前方後円墳が築造されており、古墳時代前期から中期にかけて、





四隅突出型墳丘墓      古墳      古墳群      遺跡      寺院跡      城跡  
                              

挿図3 周辺遺跡分布図

1. 石脇第1遺跡 2. 石脇第2遺跡 3. 石脇第3遺跡 4. 寺戸第1遺跡 5. 寺戸第2遺跡 6. 寺戸第3遺跡 7. 池ノ谷西平第1遺跡 8. 池ノ谷西平第2遺跡 9. 池ノ谷第1遺跡 10. 池ノ谷第2遺跡 11. 池ノ谷銅鐸出土地 12. 小浜ワラ畑遺跡 13. 笹谷遺跡 14. 小浜1号墳 15. 尾後遺跡 16. 宮の山遺跡 17. 石脇2号墳(尾尻古墳) 18. 園古墳群 19. 河口城跡 20. 原第1遺跡 21. 浜山第2遺跡 22. 原第2遺跡 23. 宇谷第1遺跡 24. 宇谷古墳群 25. 宇野第1遺跡 26. 北福古墳群 27. 漆原古墳群 28. 北福第3遺跡 29. 北福第1遺跡 30. 伯耆一宮経塚 31. 宮内遺跡群 32. 宮内1号墳丘墓 33. 宮内狐塚古墳 34. 藤津古墳群 35. 野方古墳群 36. 野方・弥陀ヶ平廃寺 37. 中興寺古墳群 38. 久見古瓦出土地 39. 久見古墳群 40. 川上古墳群 41. 白石第1遺跡 42. 長谷古墳群 43. 吉川古墳群 44. 釜ノ口古墳群 45. 露谷古墳群 46. 亀尻古墳群 47. 鳴滝古墳群 48. 石脇城跡

東郷池周辺が東伯耆の中心地であったと考えられる。この時期の集落としては、宇谷第1遺跡で中期前葉から中葉、南谷大山遺跡で中期後半の竪穴住居跡が見ついている。後期になると、大型前方後円墳は姿を消し、小規模な古墳が盛んに築造され、群集墳を形成するものが見られるようになる。また、従来の竪穴系の埋葬施設に代わり横穴式石室が導入され、以後主流となっていく。泊村内では、園古墳群、宇谷古墳群、石脇古墳群など扁平板石組石室をもつものが知られている。古墳以外では、埴見中ノ谷古窯群がある。6世紀前葉の窯跡で、この地域で須恵器を生産した数少ない遺跡の一つである。

白鳳期には仏教思想の高まりとともに、多くの寺院が建立される。7世紀中頃に倉吉市大御堂廃寺、東郷町野方・弥陀ヶ平廃寺が、後半には東伯町斎尾廃寺、倉吉市大原廃寺が造営される。

奈良時代になると現在の倉吉市国府に伯耆国衙がおかれ、その周辺に伯耆国分寺、国分尼寺も建立される。この時代の集落跡には、掘立柱建物を中心とする倉吉市観音堂遺跡・大栄町向野遺跡が、竪穴住居を中心とする倉吉市平林遺跡などがある。この地域は、律令体制下では伯耆国河村郡にあたり、笏賀、舎人、多駄、埴見、日下、河村、竹田、三朝の8郷からなり、泊村は笏賀郷に属する。笏賀郷は、「延喜式」にみえる笏賀駅のあったところで、「平城宮跡出土木簡」にも「笏賀郷」の銘がみられる。郡衙の所在地は不明である。また、羽合平野や北条平野を中心に、古代律令体制の名残としての条里遺構が残っている。長瀬高浜遺跡ではこの条里にのらない畠跡が確認されている。

平安時代末期になると末法思想が広まり、経塚がつくられるようになる。倭文神社境内に隣接したなだらかな丘陵からは、伯耆一の宮経塚が見ついている。石柳内から出土した金銅製経筒、金銅製観音菩薩立像、銅製千手観音菩薩立像、銅版線刻弥勒立像はいずれも国宝に指定されている。

鎌倉時代には地頭の勢力が次第に強力になり始める。正嘉2(1258)年銘の「伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図」からは、地頭の荘園侵略の様子や当時の東郷池周辺の地理等が窺われる。集落跡としては倉吉市今倉遺跡の住居跡があり、また、中世貝塚が東郷町門田遺跡、羽合町南谷貝塚遺跡で見ついている。長瀬高浜遺跡では、鎌倉から安土桃山時代の火葬墓や土壙墓と水田跡が調査されている。

南北朝時代には山名時氏が伯耆国守護職につき、倉吉市田内に田内城を築き伯耆国統治の拠点とした。山名氏はその後打吹山に城を移したが、1524年尼子経久により落城した。室町時代には1336年南条貞宗により羽衣石城が築かれている。また天正9(1581)年、羽柴秀吉と吉川元春が対陣したが、このとき元春が築いた土塁が馬ノ山に残っている。泊村内には石脇城(久塚)と、山名氏の居城である河口城があり、南北朝時代から慶長5(1600)年まで存続している。現在、園字西前には河口城跡として東西40m、南北60mの平坦地が残っている。中部地区の城は、1615年の一国一城令に伴いすべて取り壊された。

山間地には製鉄関連遺跡が多く、関金町内で約40か所、三朝町でも約100か所のタタラ、鍛冶場の跡が確認されている。天神川上流の上小鴨地区では5軒の鋳物師が営業しており、そのうちの斎江家に残る江戸末期の文書からは、周辺のタタラ場から銑鉄を購入していたことがわかり、その関係が窺われる。

江戸時代末期には日本海沖にも外国船が頻繁に出没しはじめる。鳥取藩でも沿岸防備のため、文久3(1863)年から砲台設置に着手し、海岸線に8基の台場が建設された。県中部では赤碕、由良、橋津に築かれている。このうち由良台場は西洋式の城塞プランが取り入れられており、藩築造の台場としてはきわめて異色で貴重なものである。

(岩崎)

## 第3章 小浜ワラ畑遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

小浜ワラ畑遺跡は、海岸より約450m程離れた北向きの丘陵の斜面および谷間にあり、北東側約450mに小浜小谷遺跡が、南西には谷を挟んで北東側に延びる尾根上に石脇第3遺跡操り地区がある。

調査区は西端を頂点とする不整な扇状に広がる。標高は東隅が57.5m、南隅が56.75mで、東端が高く、その間が低くなる谷地形となる。この部分は、南東から北西方向に向けて開いており、調査前の標高差は南端と北端で15mあり、急勾配であった。等高線は東側ではいずれも回り込んでおり、調査区外にのび、西側は緩やかな斜面となる。

調査区の南西から北に向かい小河川が流れ、この部分の表土は砂が堆積していた。砂は遺跡の北東にいくほど厚く、逆に調査区の南東および斜面には竹林が広がり、表土は土壌であった。なお遺跡の北西にのびる砂丘列では、北側部分で大規模に砂取りが行なわれている。

今回の調査により確認された遺構は、竪穴住居跡9基、段状遺構1基、土坑5基、自然流路1条であった。このうち、中心となるのは古墳時代中期の集落跡である。ただし、遺物は縄文時代早期から近世に至るまで幅広い時期の遺物が出土している。

縄文時代の遺構としてSK05があげられる。遺存状態は悪いものの、縁帯文土器が出土している。自然流路の肩からも福田KII式新相から縁帯文土器様式の鉢が出土している。その他、遺構外から縄文時代早期の押型文土器片が、SI05・06・09埋土中でも縄文時代後期末から晩期の土器片が出土している。石脇第3遺跡操り地区からは縄文時代後期と考えられるピット群があり、付近に縄文時代早期から晩期の遺構が散在するようである。

弥生土器は、SI02の埋土から1点確認できているのみである。ただし、操り地区からは弥生時代後期の貯蔵穴が確認できており、付近に住居等の存在が想定される。

古墳時代は、中期中葉から後葉の遺構が最も多く、SI02・03・05-2・06・07・09がある。SI02は斜面に平行する2本柱の建物跡である。SI03・04は斜面に直行する2本柱で、土層から2回にわたり建てられたものと考えられる。SI05は05-1→05-2の順に建て替えられたと考えられ、SI05-1の中央南端には、特殊ピット上に石をV字状に配し、その上に土師器高杯の杯を置くというきわめて祭祀的な施設がみられた。東西2本柱の建物と考えられる。SI05-2は、SI05-1に比べやや北西にずれるように建てられていた。4本柱で、南東壁には特殊ピットも伴っている。SI06・08は遺存状態が非常に悪く、わずかに斜面側が残っているのみで、柱穴も確認できなかった。SI07・09は遺存状態は比較的よく、とくにSI07は焼失住居で、炭化材が多量に遺存していた。床面上では須恵器壘2点をはじめ、土師器高杯等多くの遺物が出土した。

これらの住居は、いずれも内湾する斜面に建てられており、主軸はそろわないが、地形に沿って建てられたものと考えられる。

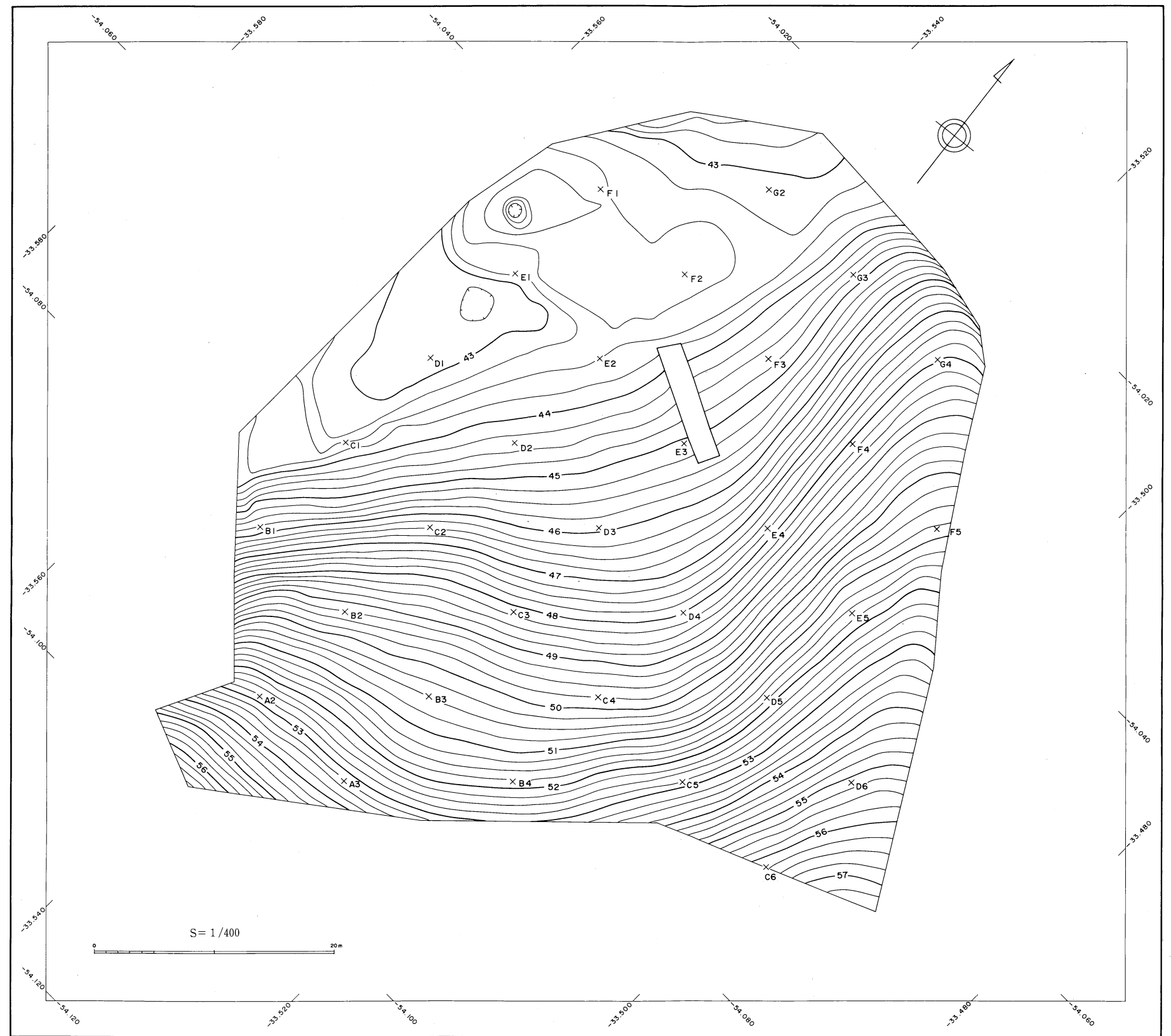
また、SI07・09・SS01は調査区の北端に位置し、さらに西側には緩やかに北西方向に張り出す斜面があり、付近にさらに多くの住居跡が存在すると考えられる。

その他、時期は不明であるが、SI01、SS01、SK01~04がある。

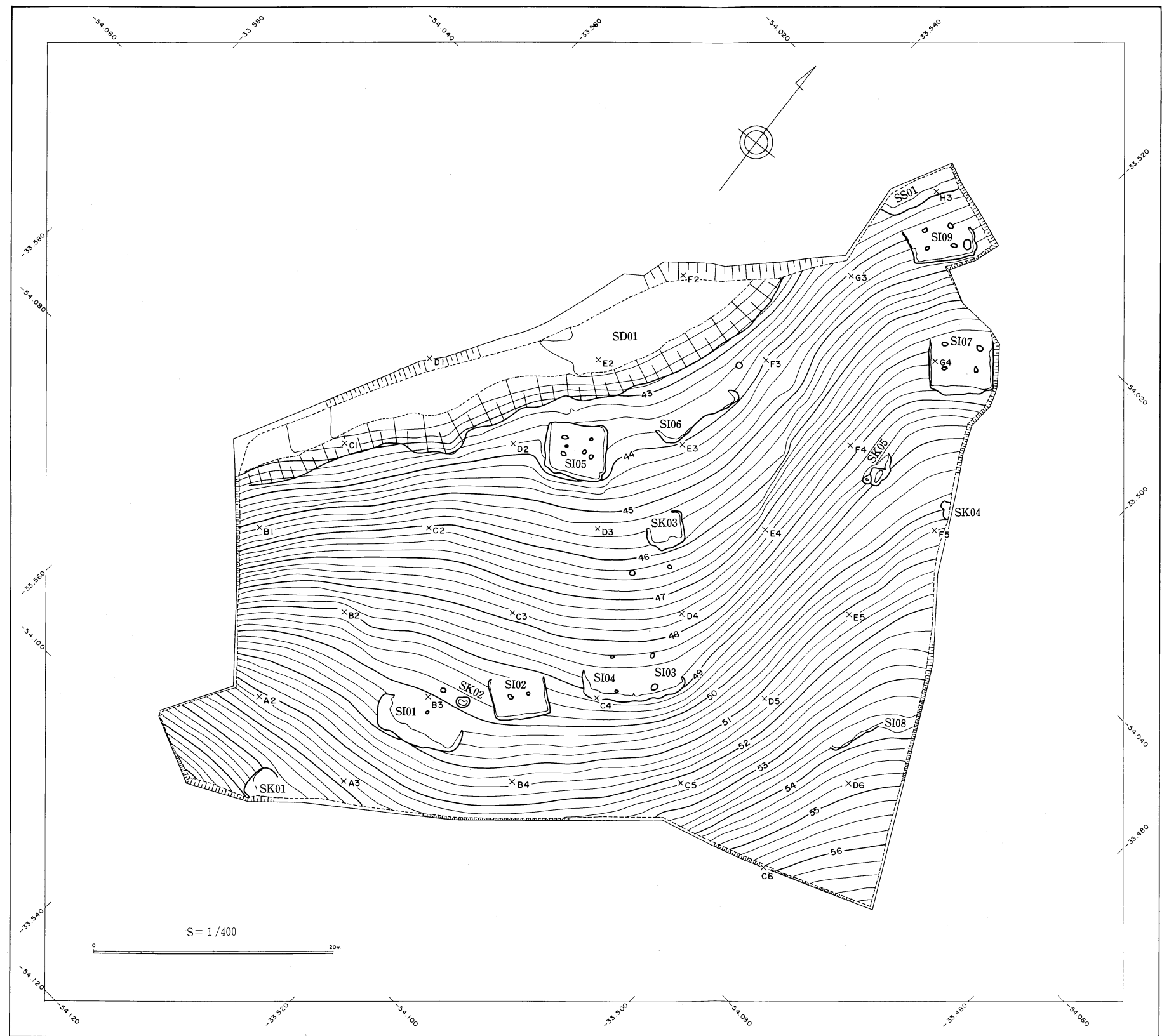
自然流路は、付近を流れる小河川に伴うものと考えられ、南西~北東方向にのびる。出土遺物は、縄文土器、土師器甕、須恵器杯が流路の肩付近、近世陶磁器が上の白砂中から出土している。この自然河川の底は深く落ち込んでおり、付近はさらに深い谷状地形であったと考えられる。したがって自然流路は、ある程度堆積した後、新砂丘の形成により埋められ、現在に至ったものと考えられる。

この間、古墳時代後期から中世にかけては、遺構・遺物ともに確認できなかった。

(八峠)



挿図4 小浜ワラ畑遺跡調査前地形測量図



挿図5 小浜ワラ畑遺跡遺構全体図

## 第2節 竪穴住居跡

### S I 01 (挿図6、図版2)

調査区南東側のB3・B4・C3・C4グリッド、標高49.7m～50.9mの西向きの斜面に立地する。東北側2mにS I 02、10m南にS K 01がある。

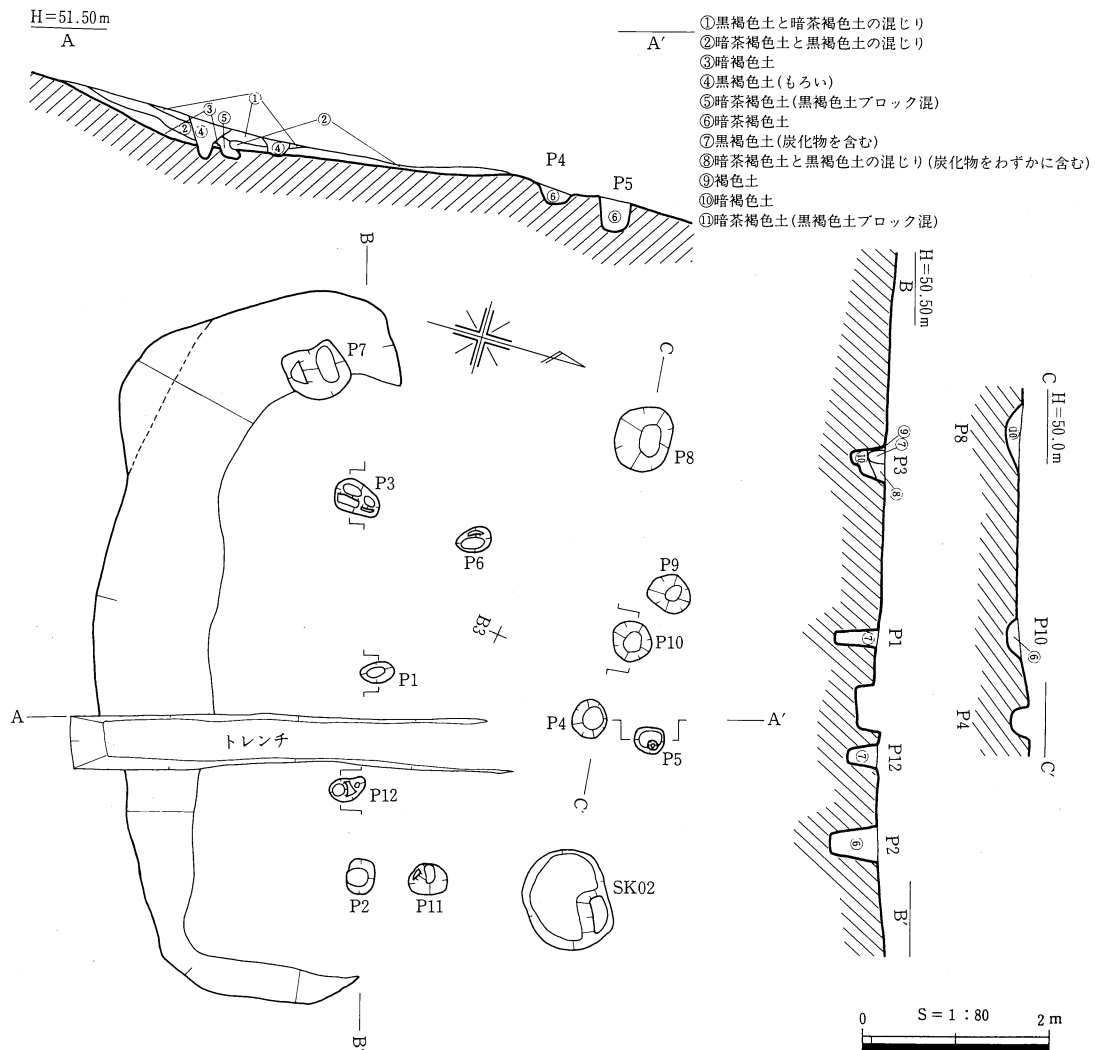
形態は方形を呈す。壁溝は検出できなかった。規模は残存値で、東西6.0m、南北4.6mで、床面積は推定で26.7㎡を測る。残存壁高は最も遺存状態のよい南壁で最大61cmを測るが、斜面の下側は大きく削られている。壁溝は確認できなかった。

主柱穴はP1・P2で、規模はP1(34×20-36)cm、P2(37×30-42)cmである。主柱穴間距離は、P1～P2が2.4mであった。柱穴が東側に偏っているため、あるいは建て替えの可能性もあるが、遺存状態が非常に悪く、柱穴が確認できなかった。柱穴以外の規模は、P3(50×34-36)cm、P4(42×36-23)cm、P5(31×29-35)cm、P6(39×26-41)cm、P7(61×55-42)cm、P8(74×58-16)cm、P9(46×40-12)cm、P10(44×42-23)cm、P11(41×33-48)cm、P12(38×25-36)cmであった。

埋土は3層に分層できた。層の厚さは最大で30cmであった。柱穴の⑦・⑧層からは炭化物が出土した。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

(八峠)



挿図6 小浜ワラ畑遺跡S I 01遺構図

S I 02 (挿図7・8、図版2・9)

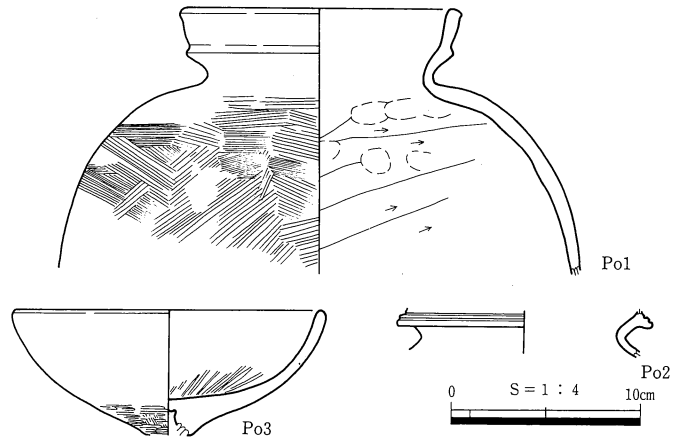
調査区南側のC4グリッドにあり、標高約49.1~49.9mの北西に向かって緩やかに傾斜する斜面に立地する。南西約2mにS I 01が、北東側約3mにはS I 03・04がある。

遺存状態は比較的よいが、斜面下側の北西側はほとんど流失している。平面形は北東~南西方向に長い長方形を呈するものと思われる。規模は南北4.45m、東西3.30m以上、床面積は残存する部分で13.5m<sup>2</sup>である。残存高は、最も遺存状態のよい南東壁で最大0.48mを測る。壁溝は南西~南東側で検出され、幅12~22cm、深さ2~4.6cmで、断面U字状を呈する。支柱穴はP1、P2の2個で、それぞれの規模は、P1(30×27-63)cm、P2(47×37-54)cm、支柱穴間距離は1.6mである。支柱穴間には、周辺床面よりやや高く、不整形に広がる焼土面が検出された。また、住居のほぼ中央に一部貼床がみられた。

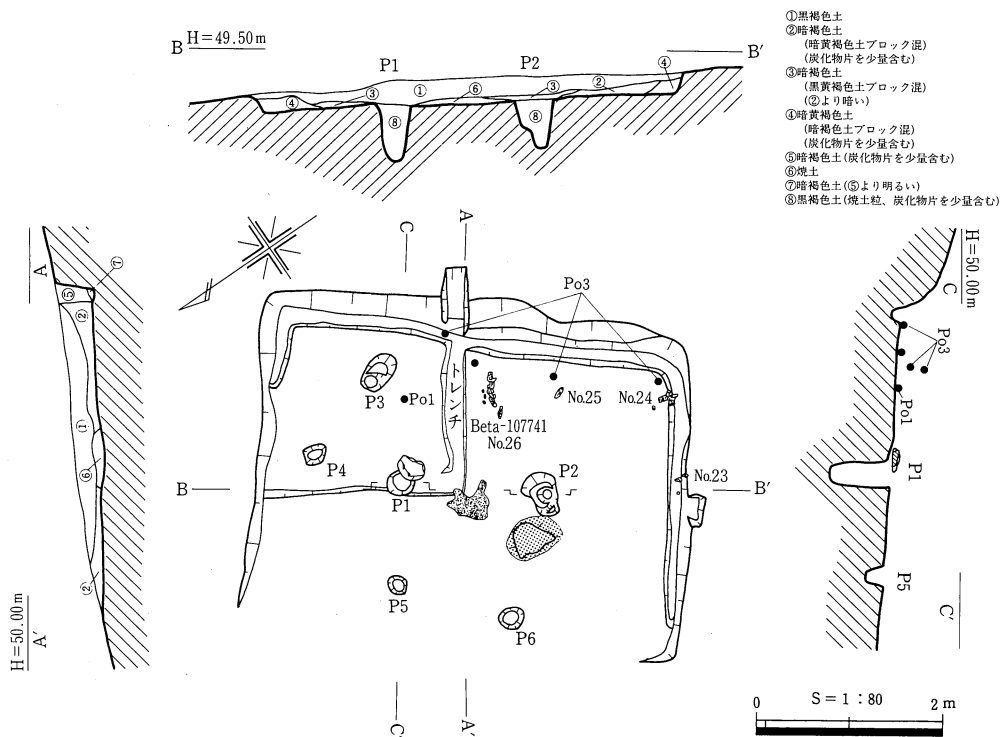
埋土は8層に分層できた。②~⑤層には炭化物・炭化材が含まれ、住居周辺でも少量の炭化物が検出されており、S I 02は焼失したものと思われる。炭化材は住居の中央部に向かって倒れており、いずれも構造材と考えられる。樹種は、No23はムクノキ、No24はコナラ(カシワ)である。No25、No26は特定できないものの、No25はウリカエデ、No26はフサザクラに類似しているという結果であった。すべて構造材であるかどうかは疑問であるが、S I 02では様々な種類の木を利用して生活していた様子がわかる。

出土した遺物は非常に少なく、甕Po1・2、高坏Po3が図化できた程度である。このうちPo1・3はほぼ床面から出土している。

出土遺物から、南谷大山編年Ⅷ期古相、古墳時代中期後半ごろと考えられる。<sup>14</sup>C年代測定を行ったところ、Beta-107741はB.P.1390±50、7世紀中ごろという結果が得られた。(岩崎)



挿図7 小浜ワラ畑遺跡S I 02出土遺物実測図



挿図8 小浜ワラ畑遺跡S I 02遺構図

S I 03・04 (挿図9・10、図版2・3・9)

調査区中央やや東寄りのD4・D5グリッドにあり、標高48.4~49.6mの西向きの斜面に立地する。3m南西にS I 02がある。

遺存状態は悪いが、壁溝および柱穴から2基の竪穴住居跡があったものと考えられる。

S I 03は、壁溝から方形を呈すものと考えられる。東西4.2m、南北は残存値で3.3mで、床面積は推定で13.4㎡である。残存壁高は最も遺存状態のよい東壁で、最大39cmを測る。壁溝は、東壁付近のみ残存しており、遺存状態は非常に悪い。最大幅26cm、深さは最大で3cmで、断面はU字状を呈す。

主柱穴はP1・P2で、規模は、P1(64×53-32)cm、P2(45×32-47)cmで、主柱穴間距離は、2.7mであった。

埋土は3層であった。柱穴は3層で、P8の埋土からは炭化物が混入していた。

遺物は住居の北側、床面から多少浮いた状態で出土した。図化できた遺物は、土師器甕Po4・5である。

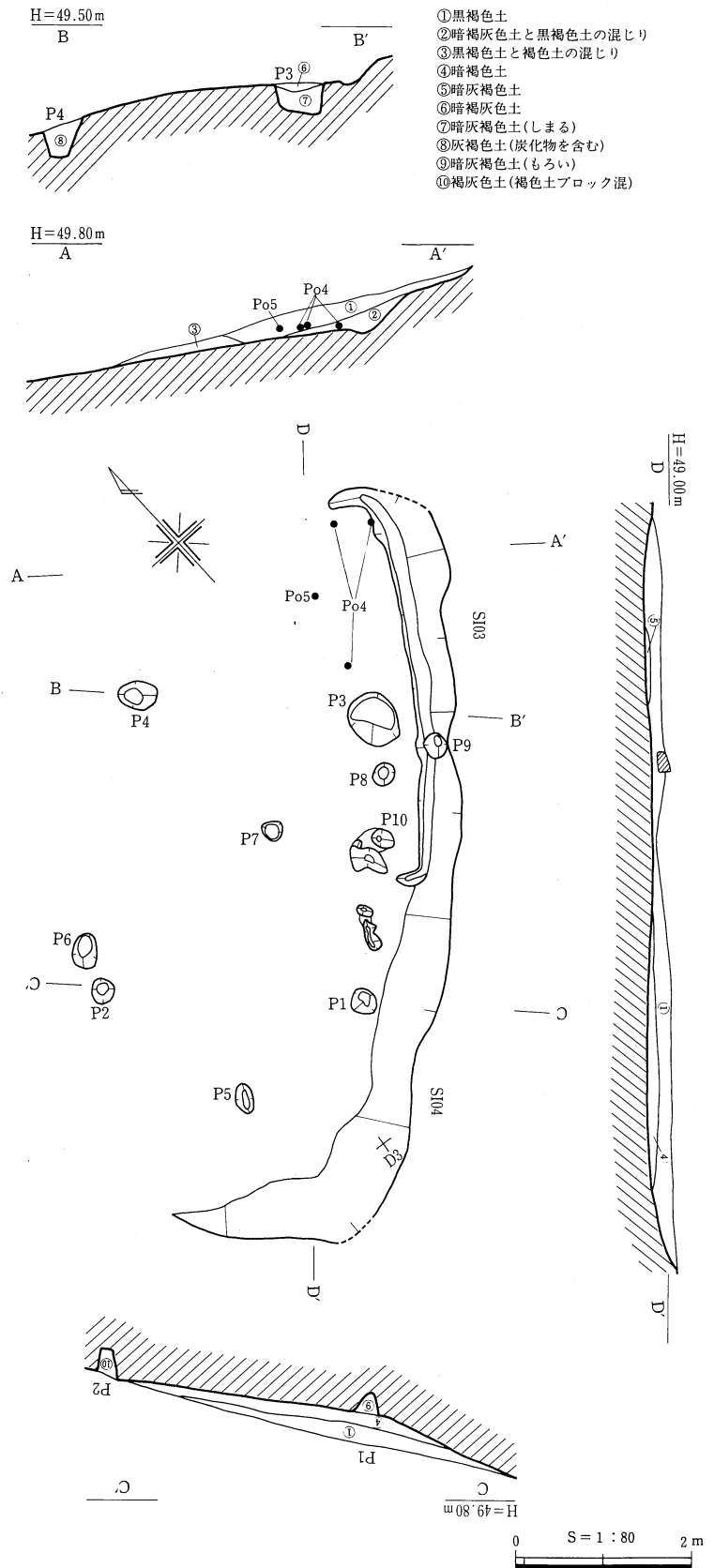
時期は遺物から南谷大山編年Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろと考えられる。

S I 04は、S I 03の南西に並んで検出された。東西3.5m、南北は残存値で4.0m、床面積は13.9㎡を測る。残存壁高は最も遺存状態のよい南壁で最大23cmを測る。

主柱穴はP1・P2で、それぞれの規模は、P1(29×28-25)cm、P2(30×23-36)cm、主柱穴間距離は、3.0mである。

埋土は2層に分層できた。S I 03との切り合い関係は、断面では確認できなかったものの、平面ではS I 04が古いとみられ、柱穴の規模もS I 03の方が大きく、壁溝も比較的よく残っていることから、S I 04の北側のピットを利用して規模を4本柱から2本柱に縮小して住居を建て替えた可能性もある。しかし、南北の長さが7.5m以上になることから、東西2本柱の建物の建て替えと考えたい。

(八峠)



挿図9 小浜ワラ畑遺跡S I 03・04遺構図



S I 05 (挿図11~13、図版3・4・9・10)

調査区中央西側のC 5グリッド、標高43.5~44.8mの西向きの斜面に立地する。4 m北東にS I 06が、2 m西側に自然流路SD01がある。

S I 05-1は、住居の南壁付近が遺存していた。平面は方形で、規模は北東~南西方向がS I 05-2よりやや小さい4.0m、北西~南東は0.4m以上である。床面積は残存で1.2㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい南壁で、最大70cmを測る。壁溝の遺存状態はよい。南隅では明確に屈曲するが、南西隅は緩やかである。幅6~15cm、深さは4~10cmを測り、断面U字状を呈する。

支柱穴はS I 05-2の貼床除去後に柱穴が検出できた。北東P17・南西P18の2本柱建物と考えられる。規模は、P17(35×27-75) cm、P18(20×19以上-54) cmで、支柱穴間距離は、1.5mであった。支柱穴の向きは南東壁に平行している。

壁際特殊ピットはP19で、床面中央南壁寄り付近にある。規模は(70×43-66) cmで、二段にわたり掘り込まれる。ピットの上面からは、やや厚い板状の石をV字状に配し、高坏Po19の坏部を西側の石の上部にのせ、東側の坏部は石に添って欠けた状態で出土した。また、この西側の床面上で高坏Po18が出土している。仕切り溝は確認できなかった。

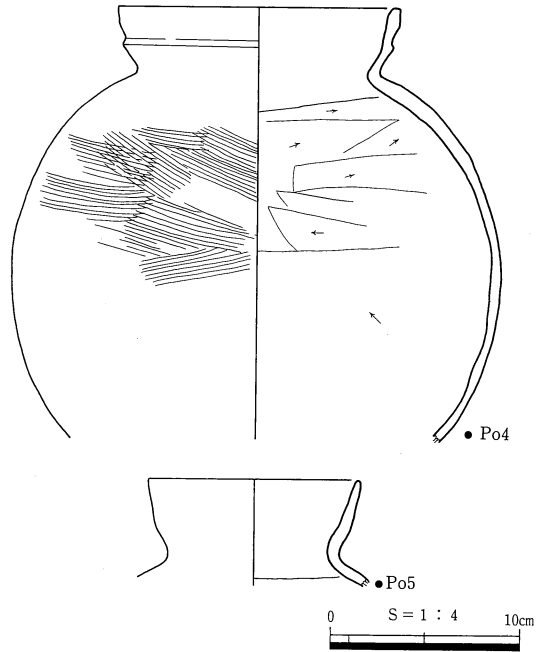
その他、貼床除去後に確認できたピットは、P20~P26で、規模は、P20(70×43-46~55) cm、P21(81×33~43-23) cm、P22(25×18-13) cm、P23(14×12-7) cm、P24(35×32-60) cm、P25(29×19-34) cm、P26(31×21-27) cmである。このうち、P20・21は住居の南側の隅にあり、不整形である。P24・25は北側の中央付近で、この部分は出入りに関係する可能性がある。

S I 05-2は、S I 05-1廃絶後の住居で、遺構の最終的な段階である。遺存状態は良好であった。規模は、北東~南西方向が4.4m、北西~南東は3.5mで、床面積は15.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい南隅で、最大65cmを測る。壁溝は特殊ピットP5に接している。この部分はS I 05-1の特殊ピットもあり、検出できなかったもののほぼ全周する。幅は8~13cm、深さは4~11cm、断面U字状を呈する。

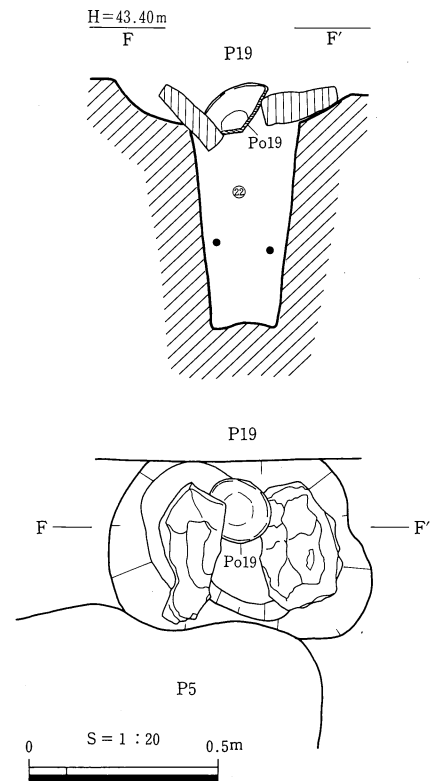
支柱穴はP1~P4で、規模は、P1(25×25-42) cm、P2(32×30-57) cm、P3(25×25-54) cm、P4(49×37-41) cmを測る。支柱穴間距離は、P1~P2から順に、1.5m、2.4m、1.4m、2.3mである。

P6~P9も支柱穴の可能性のあるものの、並びは不規則であり、柱の掘り替えによるものと考えられる。規模は、P6(23×23-25) cm、P7(25×20-17) cm、P8(37×31-21) cm、P9(27×22-36) cmであった。この内P4は柱穴を掘り替えた様子が観察できた。

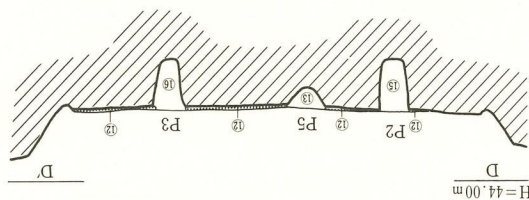
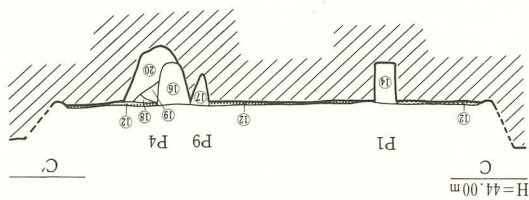
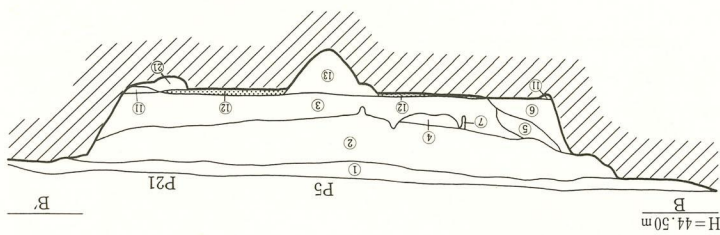
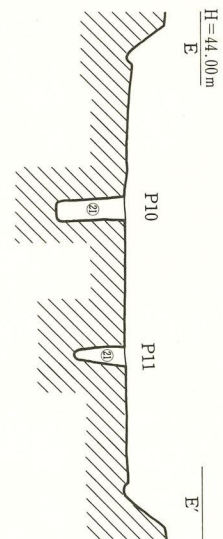
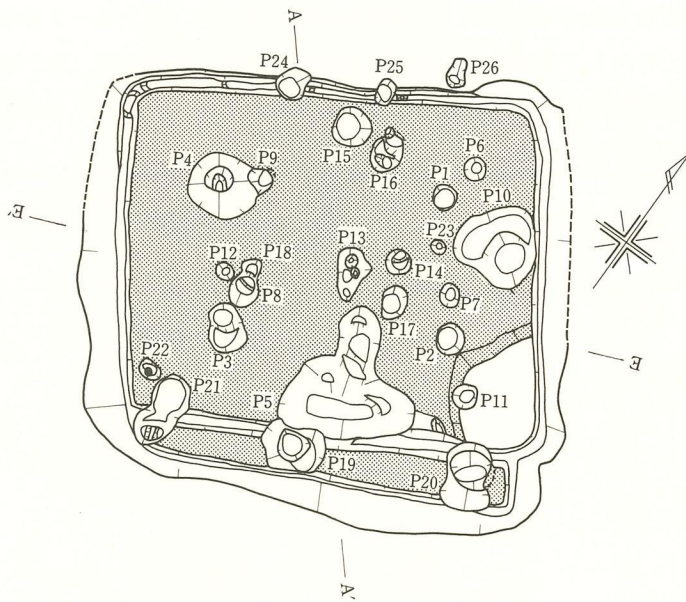
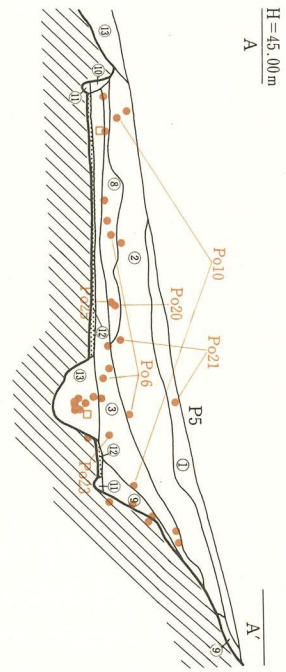
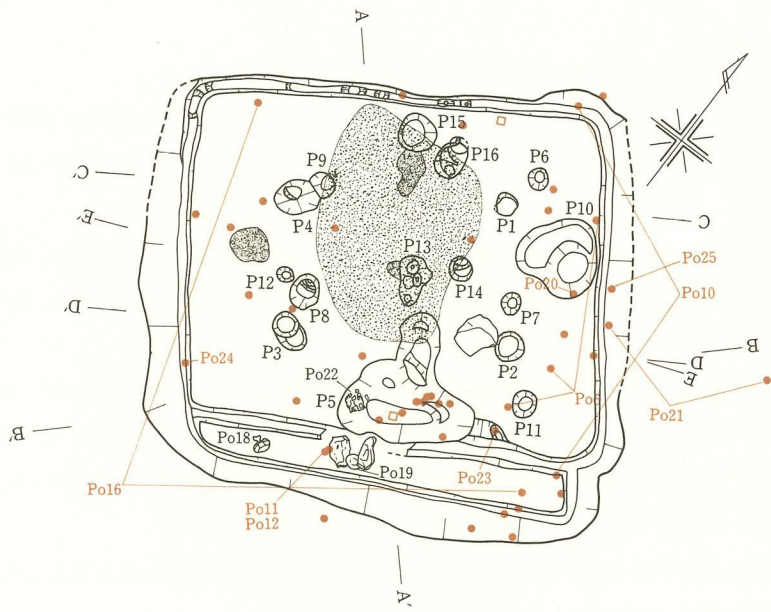
その他確認できたピットはP10~P16である。規模は、P10(87×85-25) cm、P11(29×25-11) cm、P12(19×17-36) cm、P13(55×24~34-23) cm、P14(25×24-19) cm、P15(41×40-33) cm、P16(43×30-13) cmである。



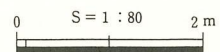
挿図10 小浜ワラ畑遺跡S I 03出土遺物実測図



挿図11 小浜ワラ畑遺跡S I 05 P19内遺物出土状況図



- ①暗灰色土(灰色砂を含む)
- ②黒褐色土(もろい)
- ③暗褐色土
- ④暗褐色土と茶褐色土の混じり
- ⑤暗茶褐色土(もろい)
- ⑥茶褐色土
- ⑦暗黄褐色土
- ⑧黒褐色土(焼土、炭化物を含む)
- ⑨暗灰褐色土
- ⑩黄褐色土と暗褐色土の混じり
- ⑪暗褐色土(粘性が強い)
- ⑫暗褐色土(しまる)
- ⑬暗黄灰褐色土
- ⑭暗茶褐色土
- ⑮暗灰褐色土(炭化物混)
- ⑯暗褐色土(褐色土ブロック混)
- ⑰黒褐色土
- ⑱暗褐色土(炭化物わずかに混)
- ⑲褐色土(暗褐色土ブロック、炭化物混)
- ⑳褐色土
- ㉑暗褐色土
- ㉒暗黄灰褐色土(もろい)



挿図12 小浜ワラ畑遺跡 S105遺構図

P15の南側に楕円形状の、P13の西側に半円状の焼土面を確認した。

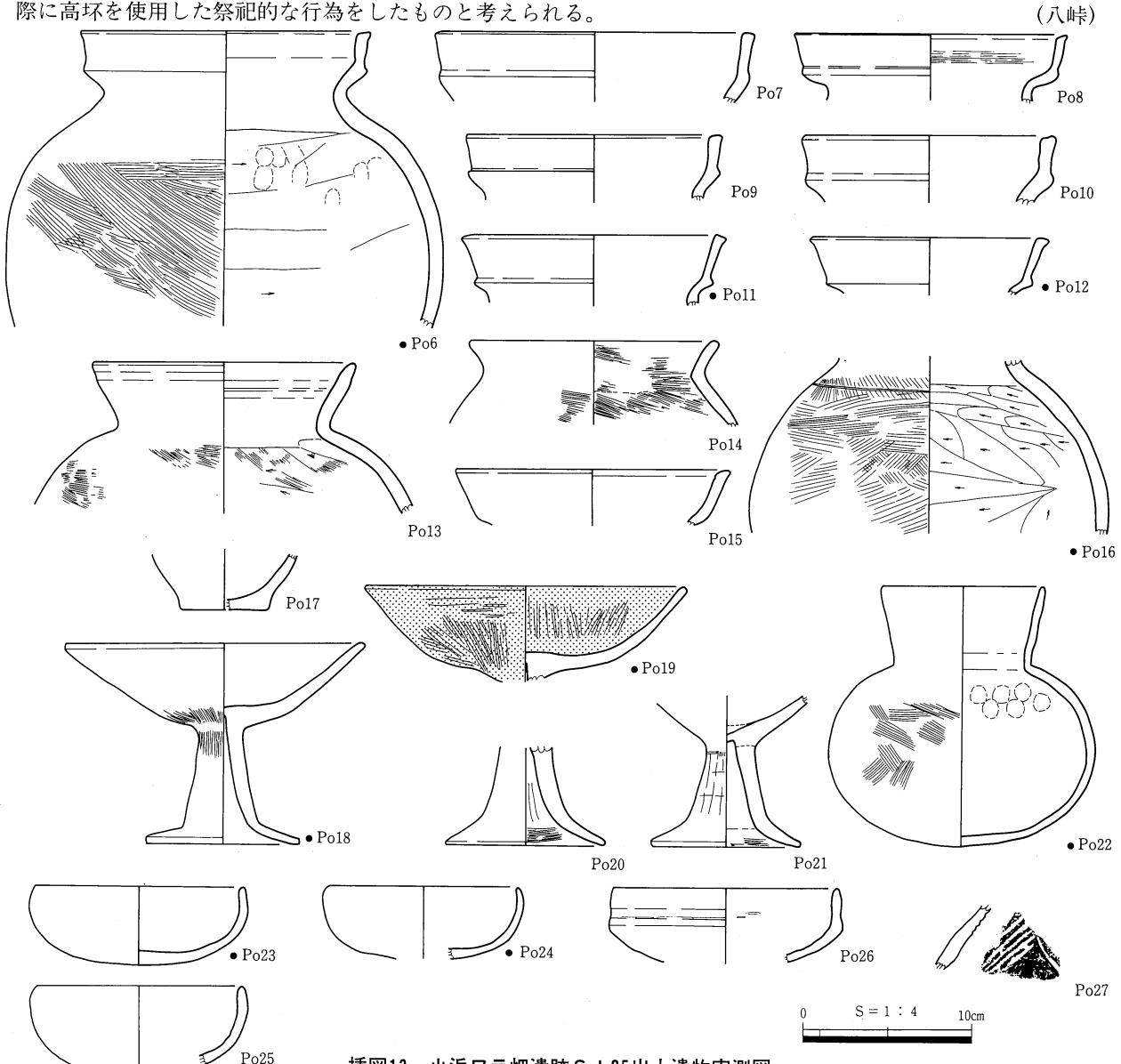
壁際特殊ピットはP5で、平面は東西方向および南北方向に長い楕円形を組み合わせたような形態で、南壁中央付近に位置する。仕切り溝は確認できなかった。規模は、(147×89-46) cmで、北側の部分は(77以上×44-23) cmであった。

埋土は11層に分層できた。このうち、⑨層は比較的古い時期に堆積したものとみられる。⑧は焼土層で、③上の中央から北西付近にかけて検出した。規模は東西1.3~1.7m、南北2.1~2.5m、厚さ5~22cmであった。貼床は⑫層で、よく締まっていた。

出土遺物は、土師器甕Po6~16、弥生土器底部Po17、土師器高坏Po18~21、土師器壺Po22、土師器椀Po23~26、縄文土器片Po27が出土している。これらの遺物は⑨層、③・⑧・⑬層、①・②層出土のものに分けられ、⑨層はS I 05-1、③・⑧・⑬はS I 05-2、①・②は住居廃絶以降のものと考えられる。出土遺物は、S I 05-1がPo11・18・19で、Po12もS I 05-1のものであろう。それ以外はS I 05-2と考えられる。

S I 05-2に伴う遺物として、Po11は住居南側中央付近、Po18が住居南隅付近のそれぞれ床面上から出土した。S I 05-2のP5の縁からはほぼ完存の直口壺Po22が出土した。

時期は、遺物からS I 05-1は南谷大山編年ⅦからⅧ中間期、古墳時代中期中葉ごろ、S I 05-2は南谷大山編年Ⅷ期古相、古墳時代中期後半ごろと考えられる。比較的時期差が大きいためこの住居は、S I 05-1が一旦廃絶した後、S I 05-2が建てられ、最終的には焼失したものと考えられる。なお、S I 05-1を廃棄する際に高坏を使用した祭祀的な行為をしたものと考えられる。



挿図13 小浜ワラ畑遺跡 S I 05出土遺物実測図

S I 06 (挿図14・15、図版4・10)

調査区のほぼ中央F3グリッドにあり、標高約43.4~43.8mの西側に向かって緩やかに傾斜する斜面に立地する。南側約4mにはS I 05がある。

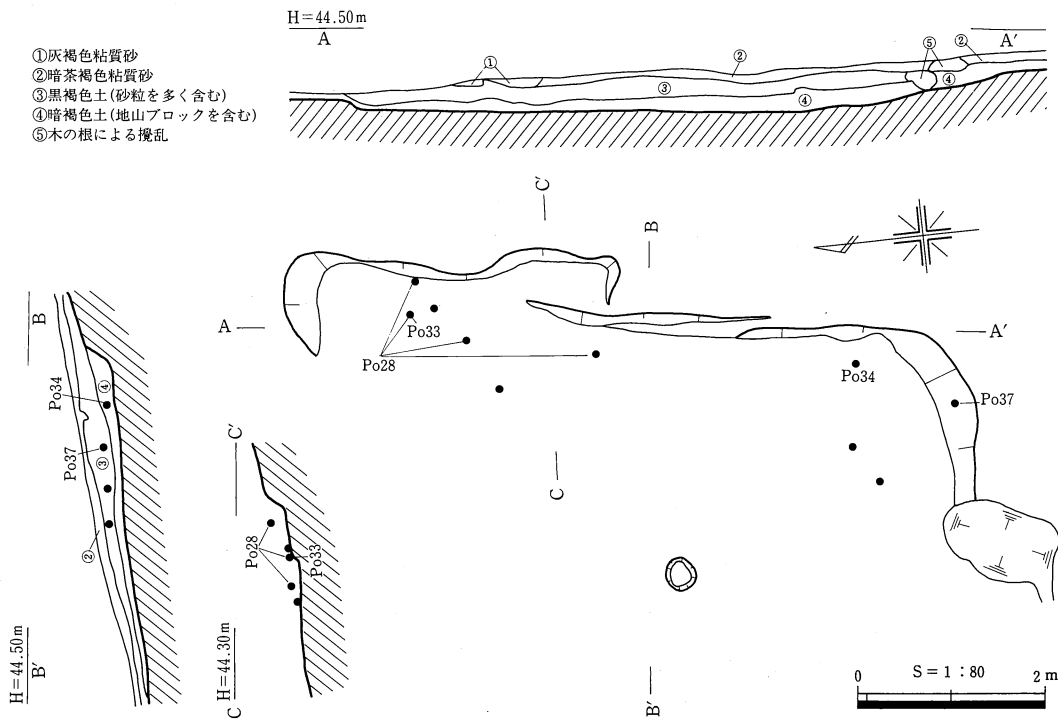
遺存状態は悪く、西側はほとんど流失している。竹根により大きく攪乱をうけており、平面形を明確にとらえることができなかった。2基の切り合い、あるいはいびつな隅丸長方形を呈するものとする。規模は、南北6.6m、東西1.7m以上、床面積は残存する部分で19.0㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.28mを測る。壁溝、支柱穴とも検出されなかったため、住居構造は不明である。

埋土は4層に分層でき、自然堆積したものとする。

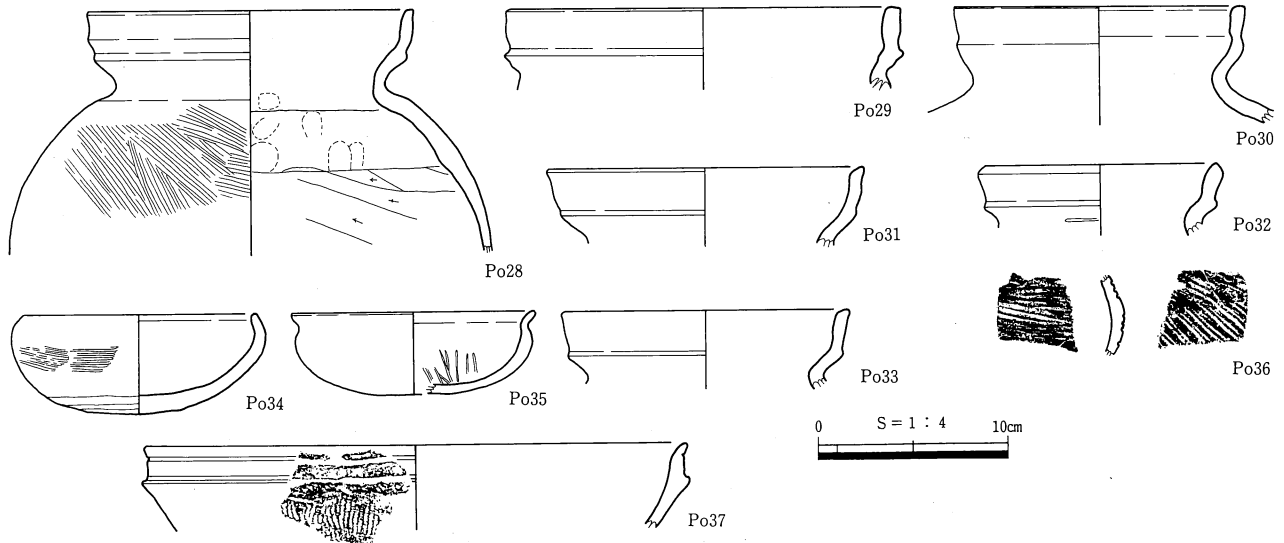
出土遺物は少なく、ほとんどの遺物は埋土中から出土している。図化したものに甕Po28~Po33、鉢Po34・35、縄文土器Po36・37がある。

出土遺物から、南谷大山編年Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろのものと考えられる。

(岩崎)



挿図14 小浜ワラ畑遺跡S I 06遺構図



挿図15 小浜ワラ畑遺跡S I 06出土遺物実測図

S I 07 (挿図16~18、図版4~6・10・11)

調査区北端のH 5グリッドにあり、標高約46.8~47.7mの北西に向かって傾斜する斜面に立地する。北西側約6 mには、S I 09がある。

遺存状態はよい。平面形は方形を呈するものと思われる。規模は、北東から南西5.08m、北西から南東4.10m以上、床面積は残存する部分で20.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい南東壁で最大0.89mを測る。壁溝は、北東辺と南東側にあるベッド状の高まり部分で検出された。幅9~16cm、深さ2.6~5 cm、断面U字状を呈す。

支柱穴はP 1~P 4で、規模はP 1 (34×32-75) cm、P 2 (44×30-77) cm、P 3 (49×41-72) cm、P 4 (35×34-75) cmを測る。支柱穴間距離は、P 1~P 2間から順に2.7m、2.1m、3.0m、1.9mである。また、P 3とP 4のあいだには、間仕切り溝と思われる溝がある。

P 5は壁際特殊ピットである。規模は(68×47-13) cmで、浅い楕円形を呈し、両側に溝を伴う。

また、P 6はP 1~P 2間に位置する特殊ピットである。上部いびつな方形、下部隅丸方形の二段掘りで、底面は西側にいくほど深くなっている。

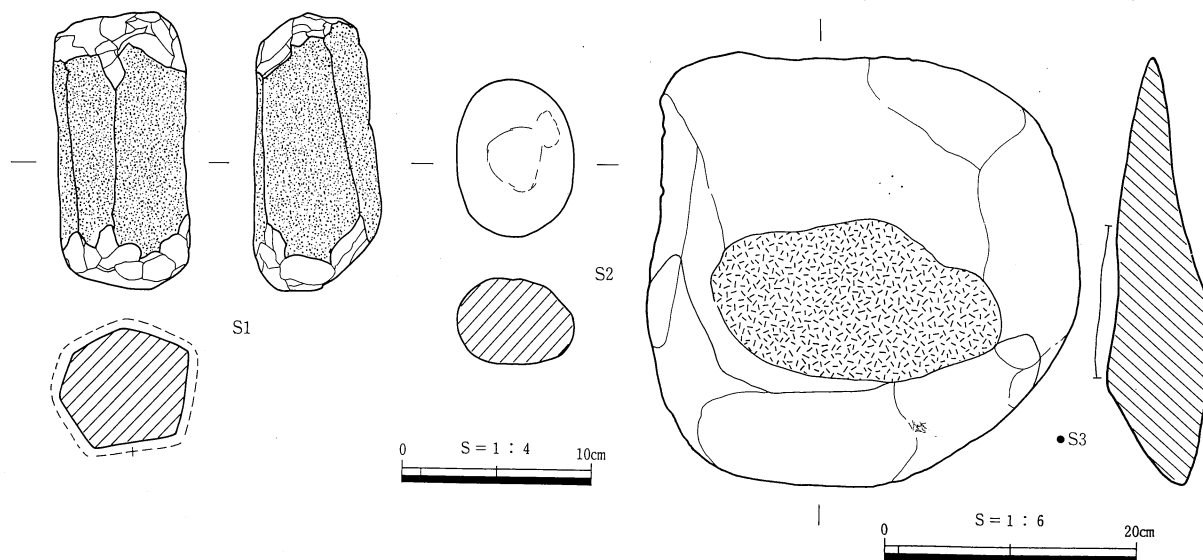
壁際特殊ピットP 5の南西側にはベッド状遺構がある。規模は、長辺1.7m、短辺1.2mで、床面からの高さは8 cm程度である。同様にP 5の北側も、周辺床面と比較して10cm程度高くなっている。P 5を挟んで、左右対称のベッド状遺構である可能性がある。

S I 07は焼失しており、構造物と思われる炭化材が、ほぼ住居全面の床面付近で検出された。板材と考えられるものはベッド状遺構上のNo.225のみで、他はおおよそ径5~15cm程度の丸木材のようなものである。樹種は、ベッド状遺構上のNo.224・226がスダジイ、No.225がマンサクで、径10cm程度のNo.240がコナラ(カシワ)、径4~5 cmのNo.254はイヌマキである。また、P 6内部には炭化材・焼土が落ち込んでおり、このピットは本来開いていたものと考えられる。

埋土は19層に分層できた。埋土上層の①~⑤層は、自然堆積したものと考えられる。埋土下層には炭化物・焼土粒が多く含まれ、北西側では、部分的に厚さ15cm前後の焼土層⑧層がみられた。⑩層は炭化物を含まないため、壁板が腐朽したものと考えられる。

ほとんどの遺物が埋土下層および床面から出土しており、住居の内区では土器類はほとんどみられない。甕Po38~Po47、高坏Po48~Po65、椀Po66、須恵器甕Po67・68、砥石S 1、敲石S 2、石皿S 3を図化した。

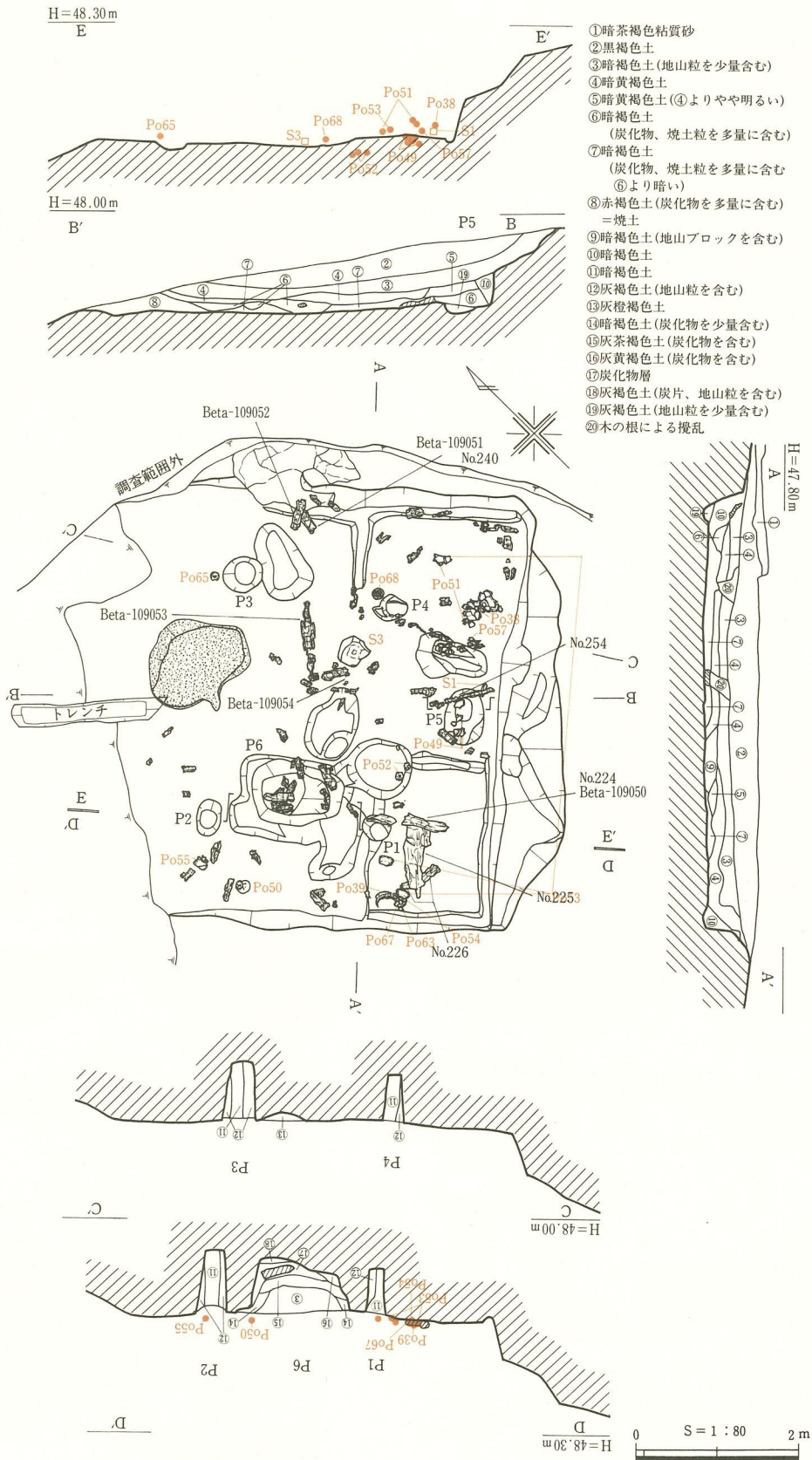
このうちPo48は、大半は斜面の上方であるF 5グリッド出土のものであるが、S I 07内出土の破片は床面付近で出土している。ベッド状遺構上ではPo39・53・54・67がまとまって出土した。甕Po39は肩部のラインできれいに割り揃えられている。また、甕Po67は内面朱塗りで、細かく破碎されて高坏坏部Po54のなかに入れられていた



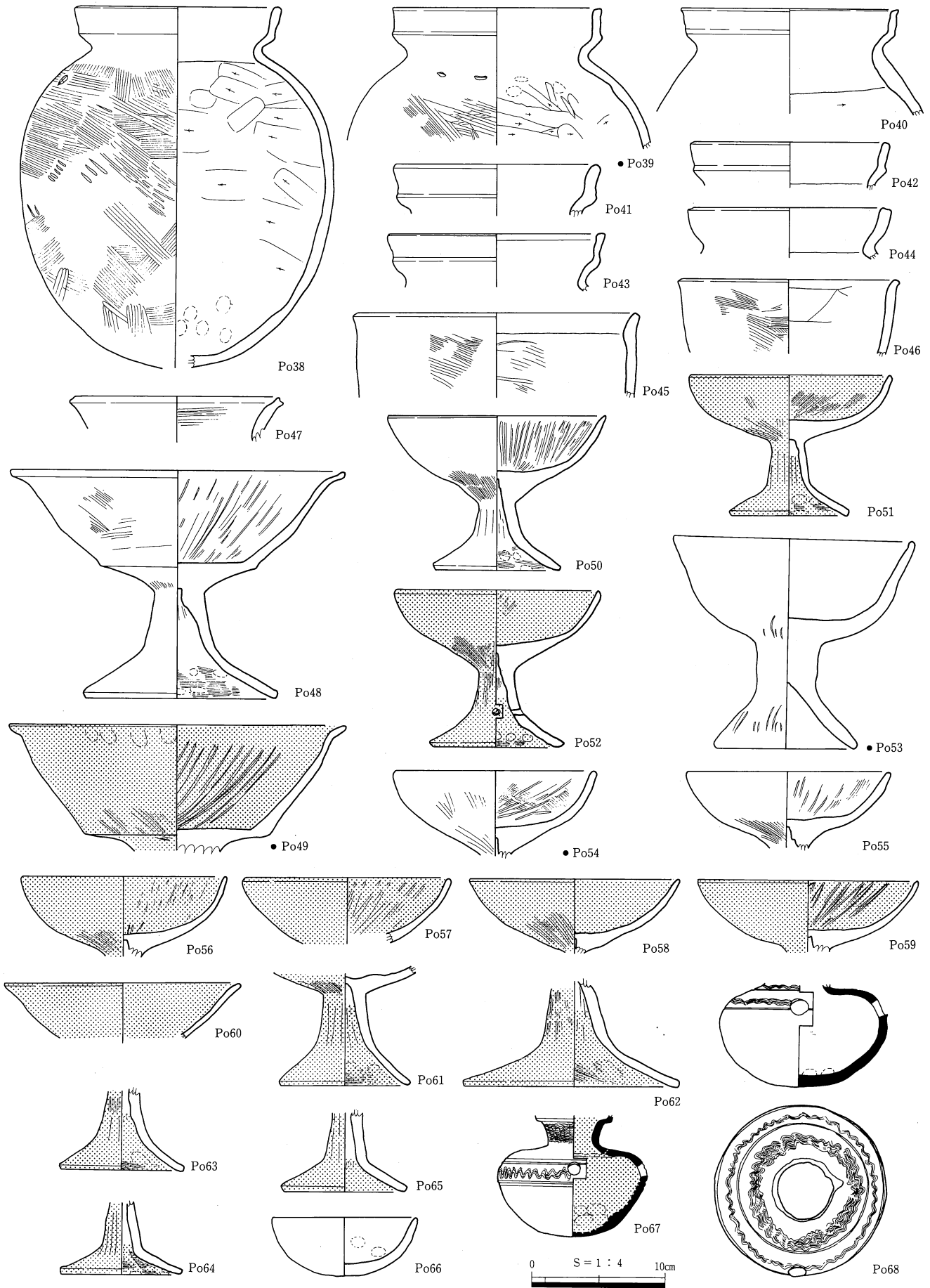
挿図16 小浜ワラ畑遺跡S I 07出土遺物実測図(1)

ものと思われる。また、Po53は坏部と脚部が、住居の両端から離れて出土している。

出土遺物から、南谷大山編年Ⅷ期古相、古墳時代中期後半ごろのものと考えられる。



挿図17 小浜ワラ畑遺跡S107遺構図



挿図18 小浜ワラ畑遺跡 S107出土遺物実測図(2)

なお、床面出土の炭化材5点について<sup>14</sup>C年代測定を行った。その結果、Beta-109052のB.P.1640±60からBeta-109051のB.P.1410±60まで、5世紀前半～7世紀中ごろと年代的にはやや開きがみられた。(岩崎)

### S 108 (挿図19・20、図版6)

調査区東側のE6グリッドにあり、標高約53.8mの西方向へやや急に傾斜している斜面に立地する。北側約1.8mにはSK04、北西側約2.1mにはSK05がそれぞれ位置している。

形態は、竹の根による攪乱がひどく、西側も流失して遺存状態は悪く、かなり不明瞭である。残存する周壁・壁溝から平面形は、方形を呈すと考える。規模は、東西4.5m以上、南北1.2m以上を測り、床面積は13.92㎡以上を測る。残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大30.5cmを測る。壁溝は東壁際のみで検出され、幅は6～14cmと狭く、深さは10～16.5cmを測り、断面U字状を呈す。支柱穴と考えられるようなピットは検出できなかった。なお床面は、西側に向かって緩やかに傾斜している。

埋土は4層からなる。

出土遺物は、高坏Po69が図化できた。これは、壁溝内からと、埋土①層中から出土したものが接合したものである。

出土遺物から、古墳時代中期後半ごろと考えられる。(井上)

### S 109 (挿図21～23、図版6・12)

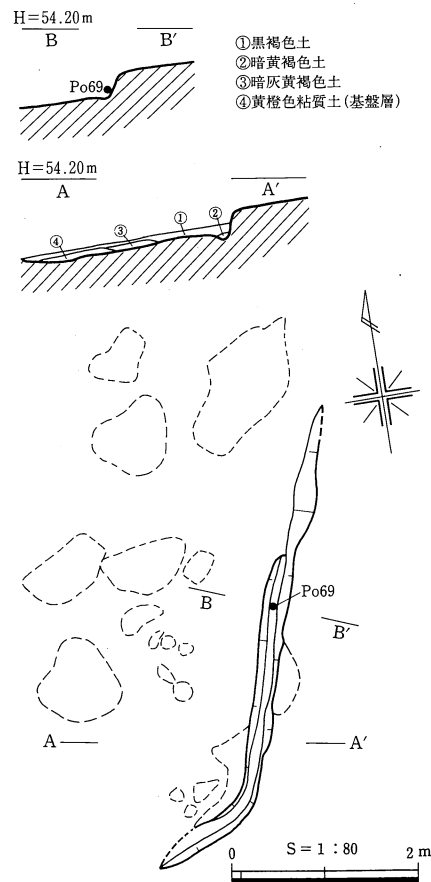
調査区北西側のG4グリッドにあり、標高43.8～44.7mの北西側に傾斜する斜面に立地する。北東側南西約6mにはS107、西側約2mにはSS01がある。

斜面に立地するために、西側は流失しているが、遺存する壁から平面は方形ないしは長方形を呈すものと考えられる。規模は南北4.82m、東西3.0m以上を測り、床面積は約14.5㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい東側で最大0.45mである。東から南壁際には幅10～16cmの壁溝が、部分的に途切れてはいるが検出された。断面形は、U字状を呈す。

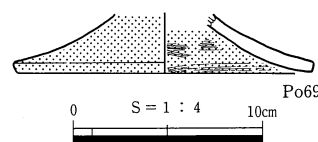
支柱穴はP1～P4の4個で、それぞれの規模はP1(45×36-39)cm、P2(41×30-20)cm、P3(37×26-47)cm、P4(35×32-40)cmを測る。支柱穴間距離は、P1～P2間から順に1.7m、2.2m、1.6m、2.2mである。P1～P2間に、(36×26-24)cmを測るP5があるが、用途は不明である。

中央ピット・特殊ピットは検出されていない。

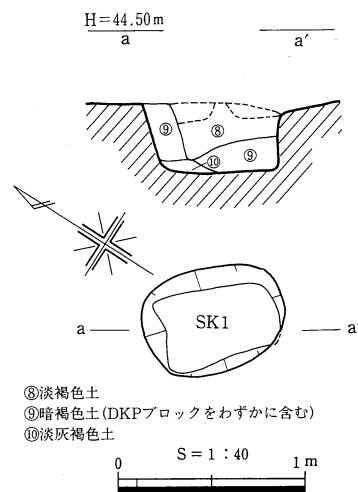
北東コーナーに土坑SK1、南東コーナーに土坑SK2が掘り込まれている。SK1は平面隅丸長方形、断面台形状を呈し、長軸76cm×短軸55cm、深さ40cmを測る。埋土は3層に分層できた。SK2は平面不整楕円形、断面皿状を呈し、長軸60cm×短軸56cm、深さ8cmを測る。



挿図19 小浜ワラ畑遺跡S108遺構図



挿図20 小浜ワラ畑遺跡S108出土遺物実測図



挿図21 小浜ワラ畑遺跡S109内SK1遺構図

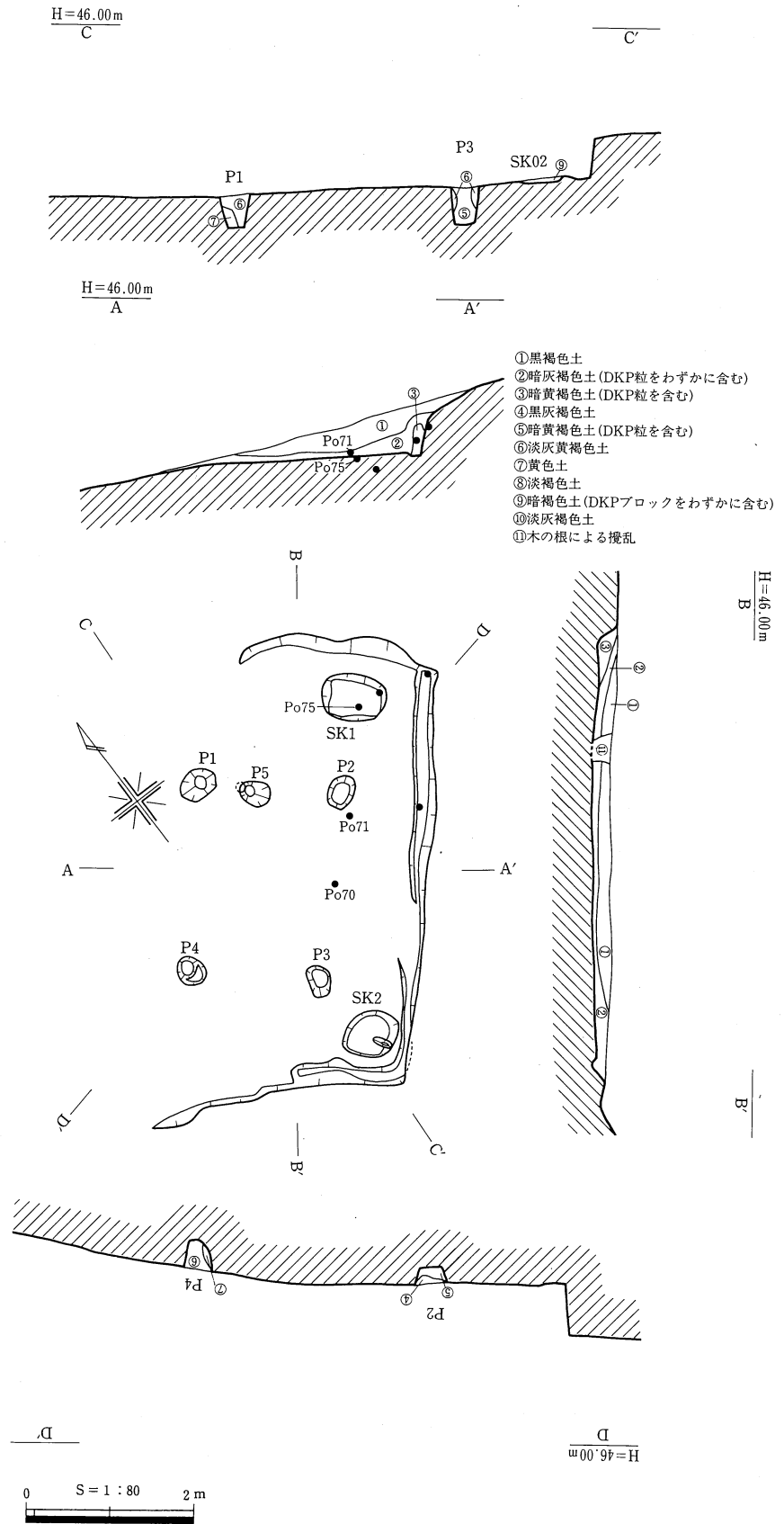


埋土は暗褐色土単層である。SK 1 は位置的に貯蔵穴の可能性はあるが、SK 2 については掘り込みも浅く、用途不明である。

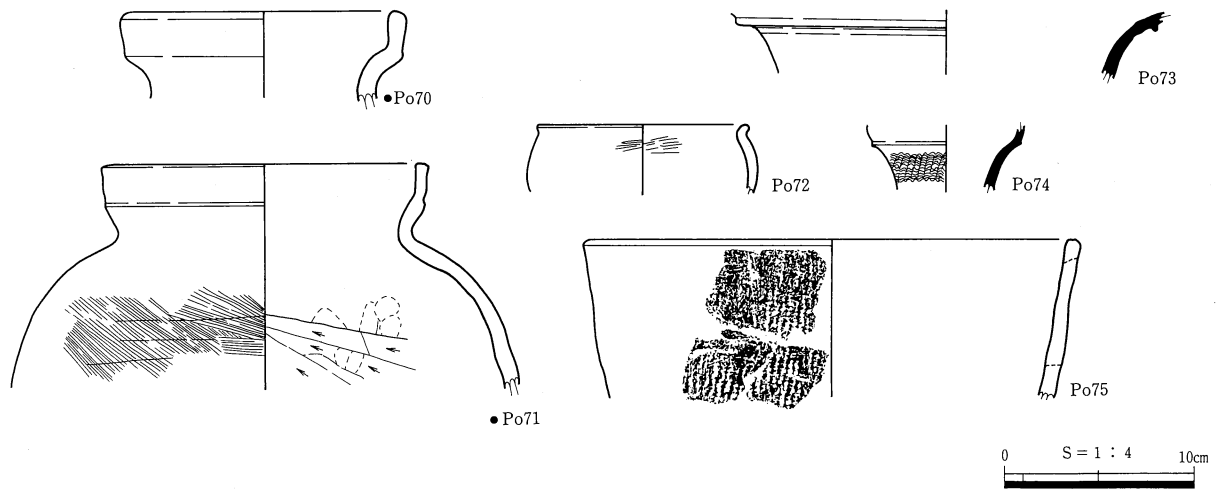
埋土は、自然堆積と考えられる①②層、壁板が腐朽したと考えられる③層に分層できた。

出土遺物には、図化できたものに土師器壺Po70、甕Po71、短頸壺Po72、須恵器甕Po73、甕Po74、縄文土器深鉢Po75がある。このうち、床面上P 2～P 3間で土師器壺Po70、P 2際でPo71が、SK 1 埋土下層でPo72、SK 1 内でPo75が出土している。その他は、埋土中からの出土である。

出土遺物から、南谷大山Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろのものと考えられる。(牧本)



挿図22 小浜ワラ畑遺跡 S I 09遺構図



挿図23 小浜ワラ畑遺跡 S I 09出土遺物実測図

### 第3節 土 坑

#### S K 01 (挿図24、図版7)

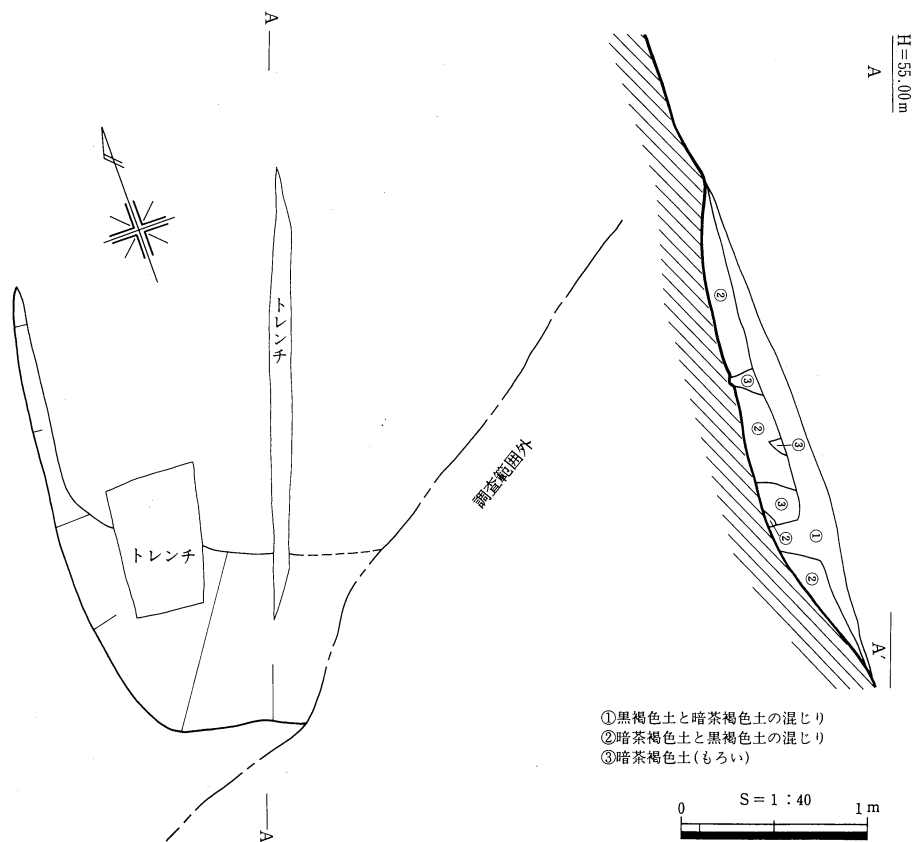
調査区の最も南のA 3グリッドにあり、標高53.8~54.9mの北側に傾斜する斜面に立地する。北側10mにS I 01がある。

大半が調査区外へ延びている。遺存状況は、斜面の上側では比較的よいが、下側は確認できなかった。平面不整な円形で、規模は残存値で東西3.1m、南北3.0mで、深さは最大で36cmを測る。

埋土は2層で、③は攪乱層である。

遺物は出土せず、時期・性格ともに不明である。

(八峠)



挿図24 小浜ワラ畑遺跡 S K 01遺構図

S K 02 (挿図25、図版2・7)

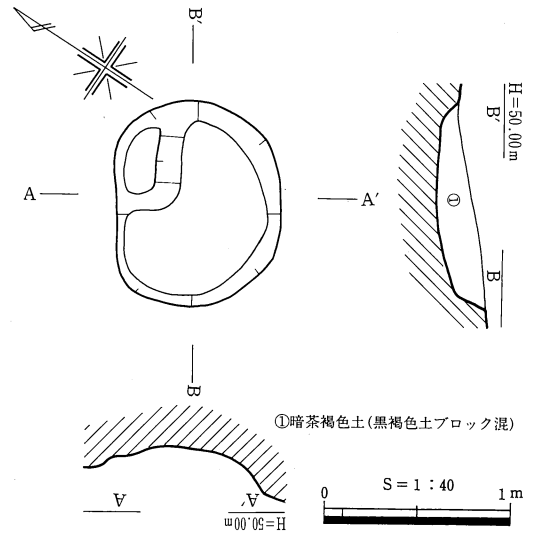
調査区南側のC 4グリッドにあり、標高49.8~49.9mの西向きの斜面に立地する。S I 01の範囲内であり、住居跡に伴う可能性がある。

遺存状態は比較的よい。規模は長軸1.1m×短軸0.9m、深さは最大28cmで、断面は浅い逆台形を呈する。

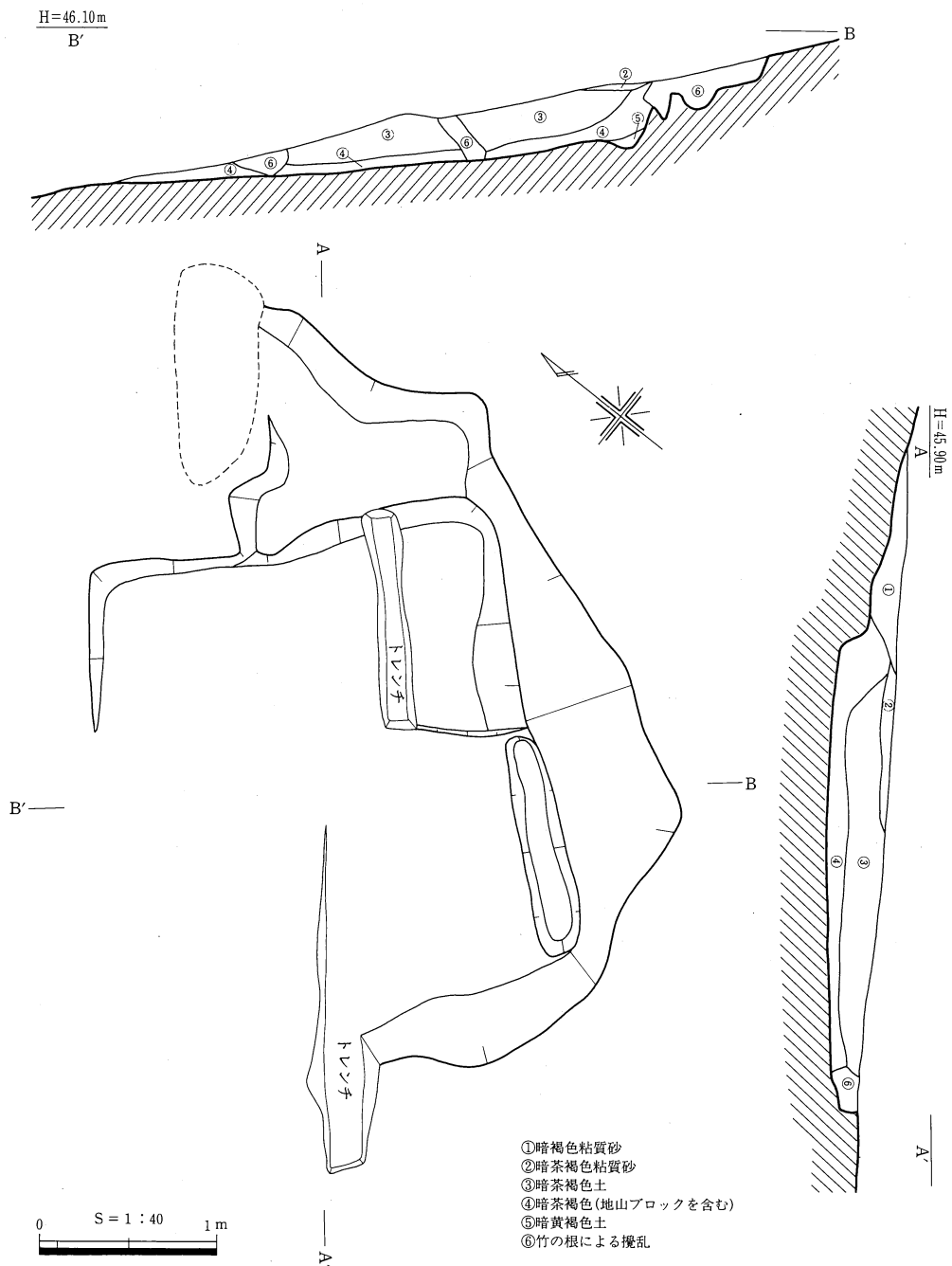
埋土は暗茶褐色土の1層であった。

遺物は出土せず、時期・性格は不明である。

(八峠)



挿図25 小浜ワラ畑遺跡S K 02遺構図



- ①暗褐色粘質砂
- ②暗茶褐色粘質砂
- ③暗茶褐色土
- ④暗茶褐色(地山ブロックを含む)
- ⑤暗黄褐色土
- ⑥竹の根による擾乱

挿図26 小浜ワラ畑遺跡S K 03遺構図

S K 03 (挿図26、図版7)

調査区中央のE 4グリッドにあり、標高約45.3~45.9mの緩やかに北西側に向かって傾斜する斜面に立地する。西側約5mにはS I 05がある。

北東側は竹根により攪乱をうけ、西側は流失しており遺存状態は比較的悪い。平面形は、上縁部不整形、下縁部方形を呈す。規模は、上縁部4.55×4.51m、下縁部3.45×3.20mで、深さは最大0.46mを測る。底面では、南西辺の約半分で浅い溝が検出された。

埋土は5層に分層でき、自然堆積したものと思われる。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

小型の住居の可能性もあるが、柱穴が検出されていないため、性格は不明である。

(岩崎)

S K 04 (挿図27、図版7)

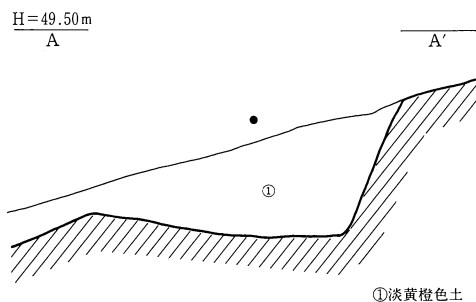
調査区北東側のG 5グリッドにあり、標高49.8~50.5mの西側に傾斜する斜面に立地する。南西側約6mにはS K 05がある。

北東側は調査区外にあり、平面形は不明であるが、不整形に二段に掘り込まれる。規模は長軸1.25m×短軸0.8m以上を測る。断面を観察すると、約30cm掘り込んだ後北側を部分的に37cm掘り込んでいる。

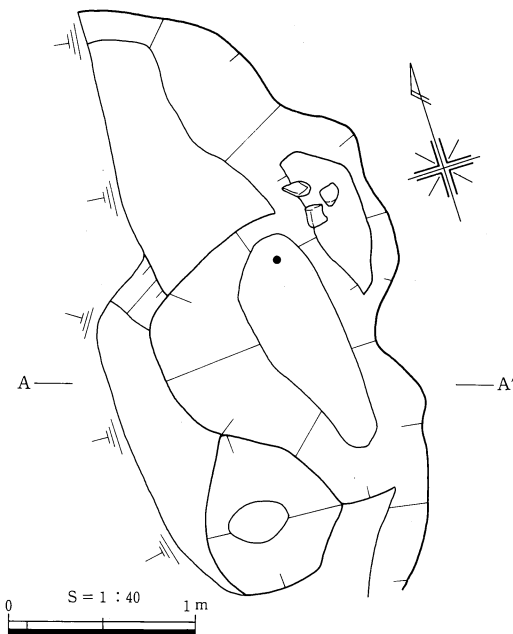
埋土は、2層に分層できた。

遺物は全く出土していないため、時期・性格とも不明である。

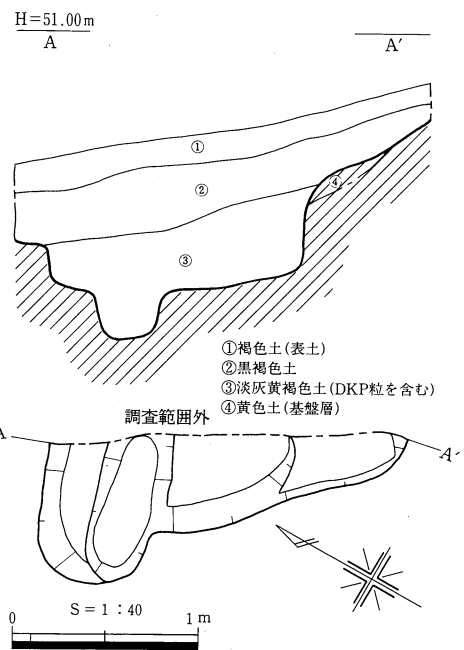
(牧本)



①淡黄橙色土



挿図28 小浜ワラ畑遺跡S K 05遺構図



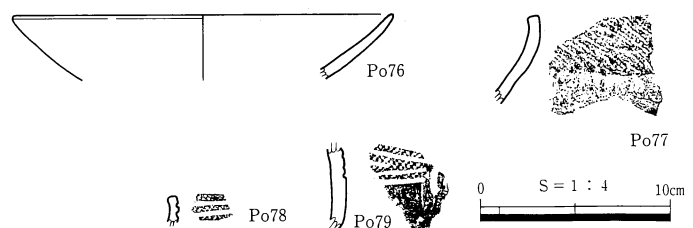
- ①褐色土(表土)
- ②黒褐色土
- ③淡灰黄褐色土(DKP粒を含む)
- ④黄色土(基盤層)

挿図27 小浜ワラ畑遺跡S K 04遺構図

S K 05 (挿図28・29、図版7・12)

調査区北東側のF 5・G 5グリッドにあり、標高48.3~49.2mの西側に傾斜する斜面に立地する。北東側約6mにはS K 04がある。

遺存状態は悪く、平面は不整楕円形を呈す。一部不整形に二段に掘り込まれる。規模は長軸3.15m×短軸1.43mを測る。深さは、最も遺存状態のよい東壁から0.73mを測る。



挿図29 小浜ワラ畑遺跡S K 05出土遺物実測図

埋土は、淡黄橙色土単層である。

埋土中から、縄文土器浅鉢Po76、深鉢Po77、縄文土器片Po78・79が出土している。また、北東側で円礫・角礫がややまとまって出土している。

出土遺物から、縄文時代後期と考えられるが、性格は不明である。

(牧本)

## 第4節 段状遺構

### SS01 (挿図30・31、図版8)

調査区の最も北西側のH3・I3グリッドにあり、標高43.2~43.4mの緩やかに北西側に傾斜する斜面に立地する。東側約2mにはSI09がある。

大半は調査区外へ延びており、平面形は不明である。規模は床面で南北6.1m以上、東西1.0m以上を測る。壁高は、最も遺存状態のよい東側で最大0.59mである。東~南壁際には幅26~43cmの幅広の溝が検出された。断面形は、U字状を呈す。

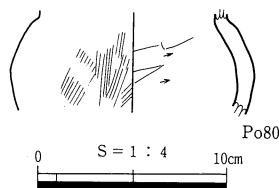
床面上でピットを2個検出しているが、いずれも調査区外へ延びており、詳細は不明である。

埋土を観察すると、上半は海岸からの被砂で覆われているが、純粋な埋土は砂質土層である。いずれも、自然堆積と考えられる。

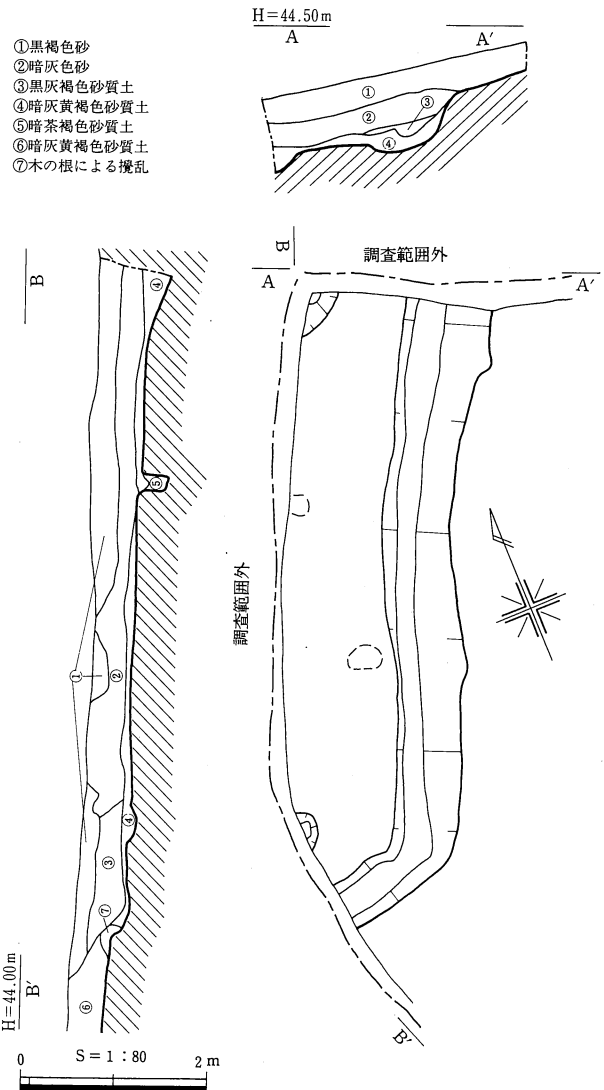
出土遺物には、図化できたものに埋土中からの土師器甕Po80がある。

出土遺物から時期は判断できないが、周辺の遺構の様子から古墳時代中期後半以降のものと考えられる。

(牧本)



挿図30 小浜ワラ畑遺跡SS01出土遺物実測図



挿図31 小浜ワラ畑遺跡SS01遺構図

## 第5節 自然流路

### SD01 (挿図32・33、図版8)

調査区西際のC1、D1・2、E1・2、F1・2グリッドにあり、標高42.3~43.2mの西向き斜面に立地する。

遺存状態はよく、南北方向に主軸をもつ。規模は、幅7.6m以上、長さは48m以上を測る。流路の南側の肩付近

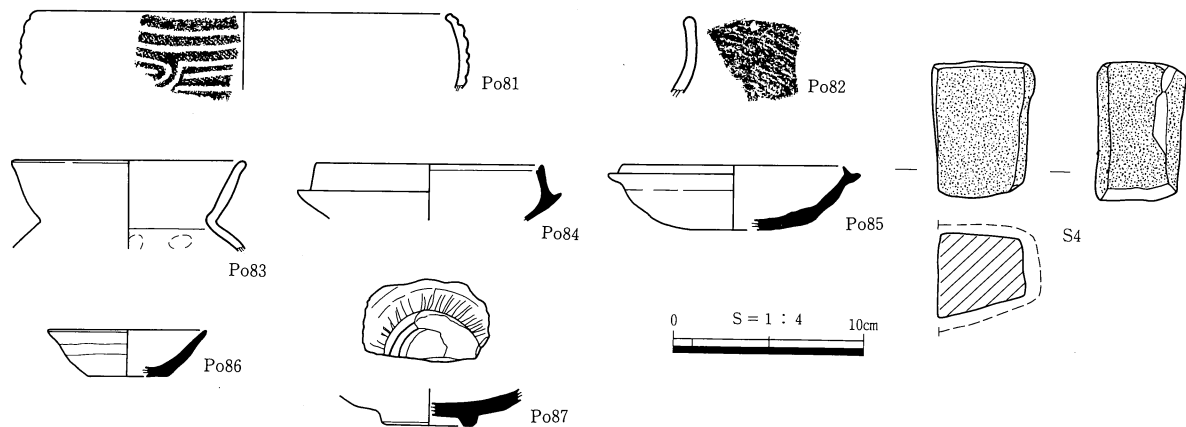


を確認した。底は湧水が著しいため確認できなかった。トレンチにより⑨層までを確認したが、遺物が出土せず掘り下げは⑨層上面までで終了した。地山が急激に落ち込んでおり、深い谷地形に飛砂や川の堆積物が溜まったものと考えられる。

埋土は14層以上で、粘土層、砂層、小礫層が互層になっており、砂層は横方向に筋状の堆積が認められた。

遺物は、縄文土器では、福田K II式新相から縁帯文土器様式の鉢Po81、粗製の鉢Po82、土師器甕Po83、須恵器坏身Po84・85、白磁Po86、瀬戸Po87が出土した。E 1・2・F 2グリッド付近からの出土で、斜面の谷部に当たることから、これらは付近から流れ込んだものと考えられる。

出土遺物の時期差が大きい、概ね古墳時代後期から近世にかけて堆積したものと考えられる。 (八峠)

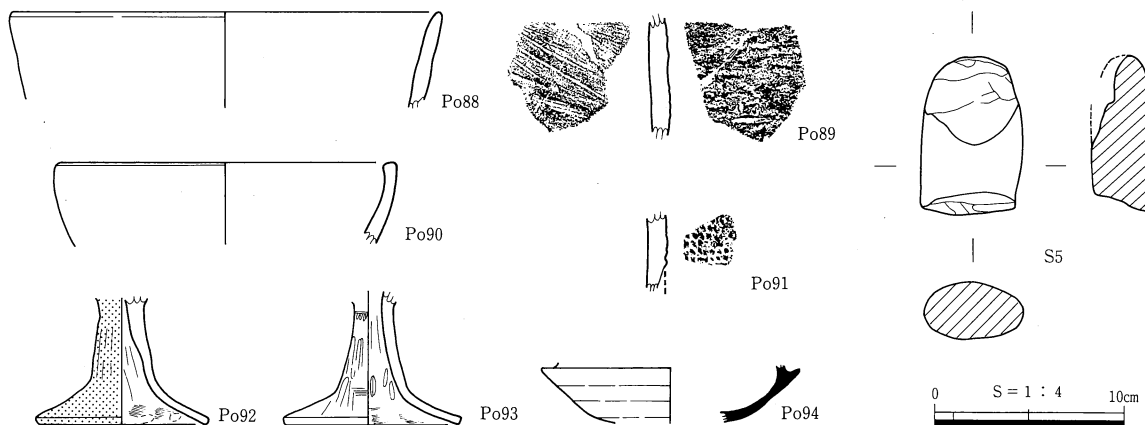


挿図33 小浜ワラ畑遺跡SD01出土遺物実測図

## 第6節 遺構外遺物 (挿図34、図版12)

遺構外からは、縄文土器、土師器、須恵器等が出土している。図化できたものは、縄文土器深鉢Po88~Po91、土師器高坏脚部Po92・93、須恵器坏身Po94、磨製石斧片S5である。

Po90は調査区南側のB 2グリッド、Po88・91・94、S5は調査区中央やや北側のE 3・F 3グリッド、Po92・93は調査区北側のF 5・G 4・G 5グリッドから出土している。Po88~90は、縄文時代後期から晩期にかけてのものと思われ、上方の遺構からの転落遺物の可能性があり、この時期の遺構の存在が推定される。Po91は、縄文時代早期の楕円押型文土器である。また、Po92・93は古墳時代中期後半ごろのもので、周辺の遺構からの転落遺物と考えられる。Po94は、古墳時代終末期のもので、この時期の遺構の存在が窺われる資料である。 (牧本)



挿図34 小浜ワラ畑遺跡遺構外出土遺物実測図

## 第4章 小浜小谷遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

小浜小谷遺跡付近は、海岸より約500m程離れた南向きの丘陵の斜面で、北東方向から南西方向に向かい谷状の地形となる。調査区はこの谷状に入り込んだ地形の南～南東方向の斜面にある。調査区の北側の丘陵頂部には平坦面が続いており、遺跡の範囲はかなり広がるものと考えられる。

調査区の形態は南側に開く不整な扇状で、標高は調査前で北側67.75m、南側で62.50mで、5.25mの比高差がある。山を隔てた東側約300mに池ノ谷第2遺跡が、南西約450mに小浜ワラ畑遺跡が位置する。また、東側の丘陵の頂上付近には小浜千速遺跡がある。

今回の調査により確認された遺構は、竪穴住居跡1基、それに伴うとみられる段状遺構1基、土坑4基、溝状遺構1条、埋葬施設1基、ピット群3か所である。主となる時期は、奈良時代である。

古墳時代を遡る遺構・遺物は確認できなかった。

古墳時代終末期から奈良時代にかけて、S I 01・S S 01がある。S I 01は4本柱の竪穴住居跡で、住居の上側の斜面をカットしてテラスを造り出している。このテラス上にはピットが等高線に平行して並んでおり、住居跡に付随する施設と考えられる。

奈良時代後半は、S K 04がある。S K 04は須恵器の坏が2個体とその上に内面を上にして須恵器蓋を2個体配した特殊な遺物の出土状況を示す遺構で、坏の下には炭化物がかなり付着していた。

S X 01は、S S 01の北西隣にあり、板石により石櫃状の施設が造られていた。石材は一部壊され、遺物は出土しなかったが、形態から奈良時代ごろの埋葬施設と考えられる。

S D 01は、等高線に対しほぼ直交し、南北方向にのびる。道もしくは区画するためのものと考えられる。その他、S K 01～03、ピット群も含め、時期は不明である。

付近の遺跡である小浜ワラ畑遺跡や池ノ谷第2遺跡からは、奈良時代の遺構・遺物は確認されておらず、そのような点からも小浜小谷遺跡の存在は特異である。付近は、伯耆国と因幡国との境付近であるが、推定される山陰道は石脇第3遺跡森末地区付近であり、小浜小谷遺跡付近は山の入り組んだ場所である。ただし、海岸から比較的近く、わずかではあるが丘陵の合間に沿うように平坦地があり、こうした土地を当時から利用していたとも考えられる。

平安時代以降については遺構・遺物はほとんど確認されていない。わずかに表土中から唐津片が1点出土したのみである。

(八峠)

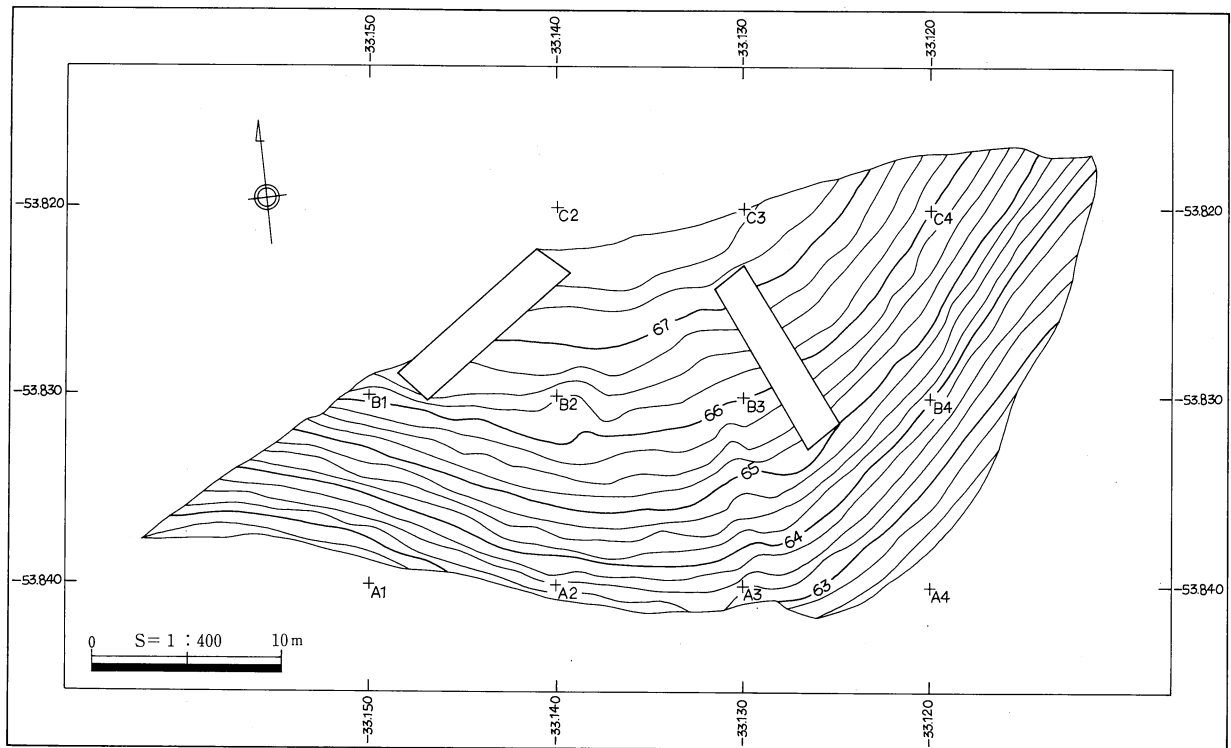


写真① 池ノ谷第2遺跡重機表土剥ぎ作業

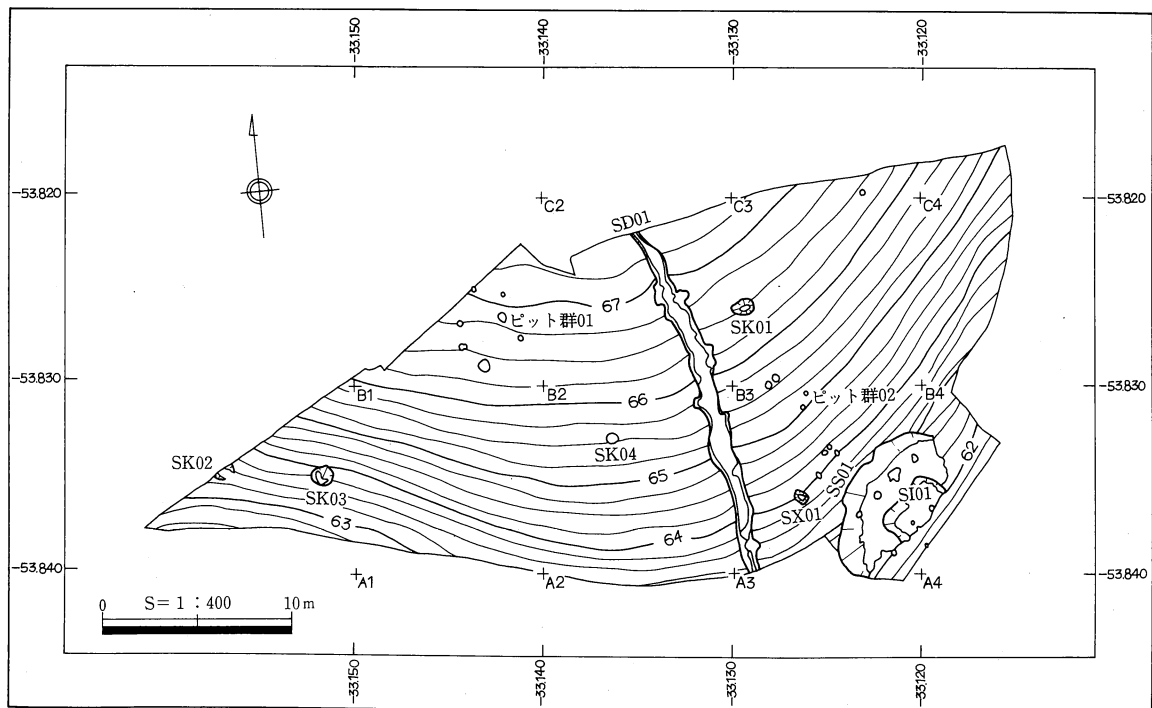


写真② 池ノ谷第2遺跡作業風景





挿図35 小浜小谷遺跡調査前地形測量図



挿図36 小浜小谷遺跡遺構全体図

## 第2節 段状遺構・竪穴住居跡

### SS01・SI01 (挿図37・38、図版13・16)

調査区南東側のB4・B5グリッドにあり、標高62.3~63.4mの南向きの斜面に立地する。北西側1mにSX01がある。

SS01の遺存状態は比較的よい。規模は、東西8.5m、南北4.2mの不整な扇状である。斜面の上側をカットして平坦面を造り出している。

3間の柱穴が並ぶ。規模はP1から順にP1(47×32-48)cm、P2(75×62-80)cm、P3(43×37-34)cm、P4(33×28-34)cmである。またP4の南側にはP5(28×27-41)cmがあり、対応する可能性がある。P1外側にはP6(23×23-39)cm・P7(28×24-27)cmが、P4の外側にP8(38×32-57)cmがある。柱穴間距離は、P1~2が1.3m、P2~3が1.3m、P3~4が1.4m、P4~5が2.8m、P1~6が1.1m、P4~8が1.0mを測る。その他、SI01の東西側を囲むようにP9~P15がある。規模は、P9(16×14-36)cm、P10(30×28-15)cm、P11(34×30-22)cm、P12(33×23-29)cm、P13(31×25-17)cm、P14(45以上×47-30)cm、P15(43×41-42)cmである。P9~11・13はSI01の周囲を囲むように位置しており、土砂の流入を防ぐ柵的なものと考えられる。

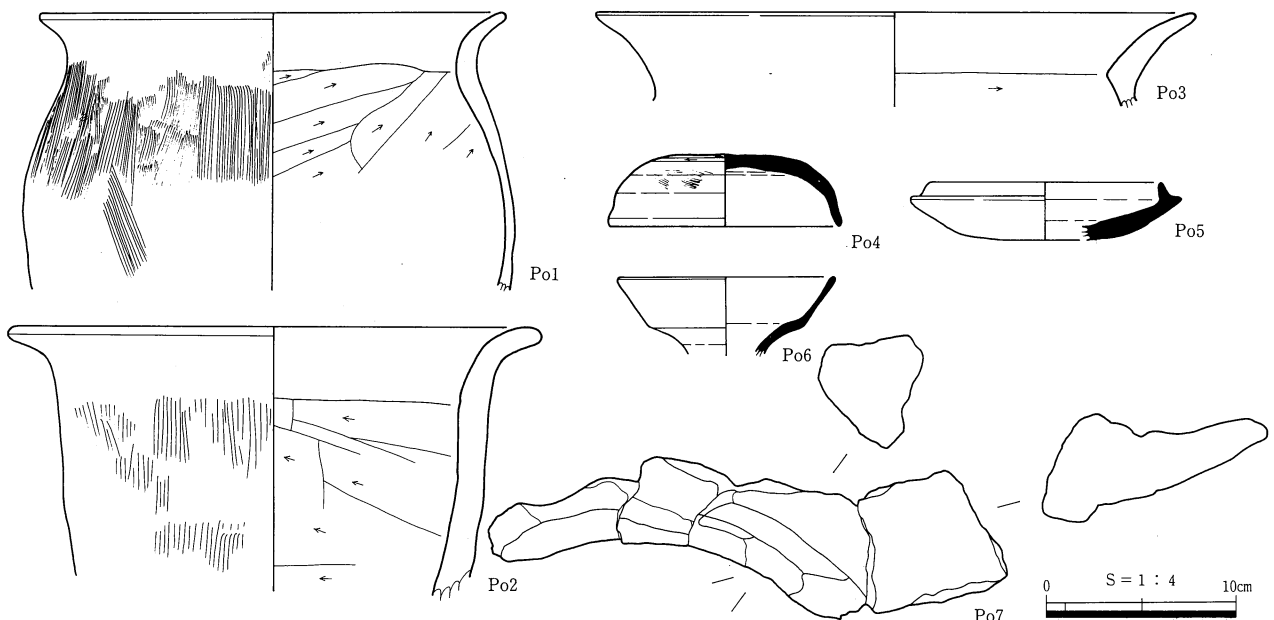
SI01はSS01の中央南側に位置する。遺存状況は北側では比較的よいが、南側はきわめて悪い。遺存する壁から、隅丸方形を呈すものと考えられる。壁溝は幅12~27cm、深さは最も遺存状態のよい北壁付近で最大11cmを測る。

規模は東西3.7m、南北1.9m以上の方形状を呈する。床面積は残存で3.1㎡を測る。

主柱穴は3個確認できたが、本来は4本柱と考えられる。規模はP1から順にP1(24×22-34)cm、P2(17×17-48)cm、P3(20×17-18)cmである。P1の東側に焼土面および炭化物を確認した。柱穴の根元が強く焼けていることからこの住居は焼失した可能性がある。主柱穴間距離は、P1~2が1.3m、P2~3が1.6mである。貼床が確認できた。

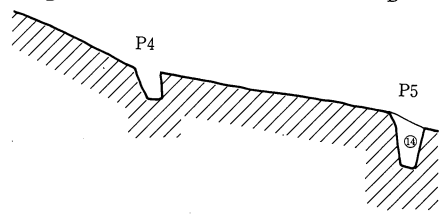
埋土は、7層に分層できた。⑤層はSS01からSI01にかけて堆積している。

遺物は、土師器甕Po1~3、須恵器坏蓋Po4、須恵器坏身Po5、須恵器礮Po6、土師器竈Po7が出土した。

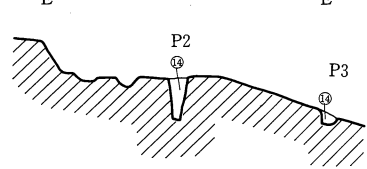


挿図37 小浜小谷遺跡SS01・SI01出土遺物実測図

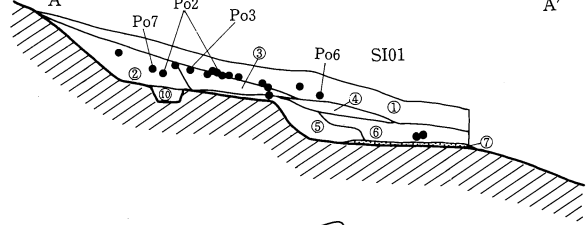
H=63.50m  
D



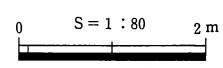
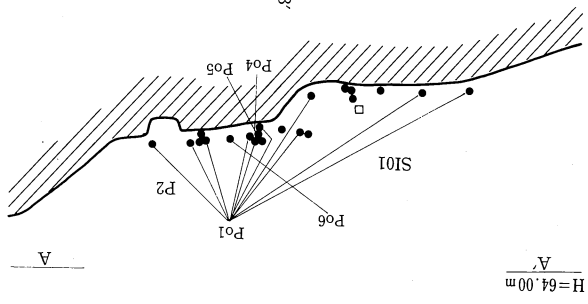
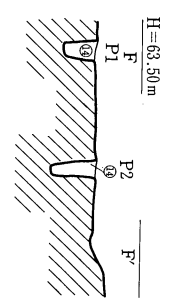
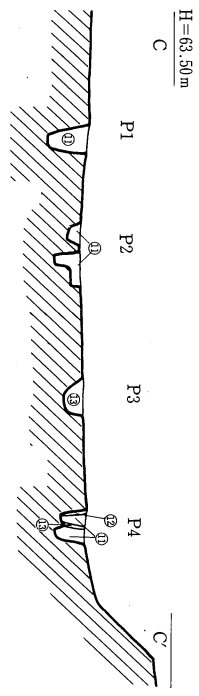
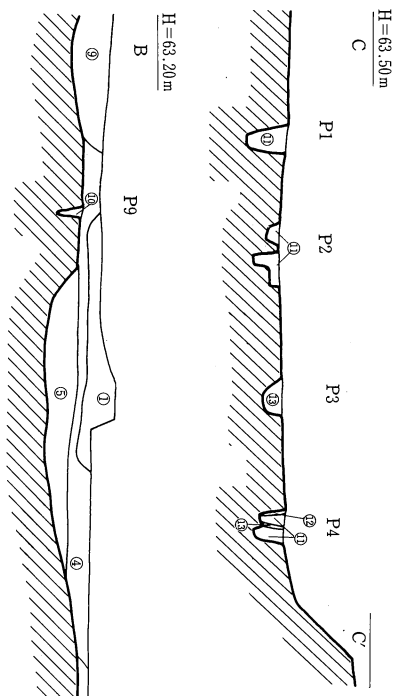
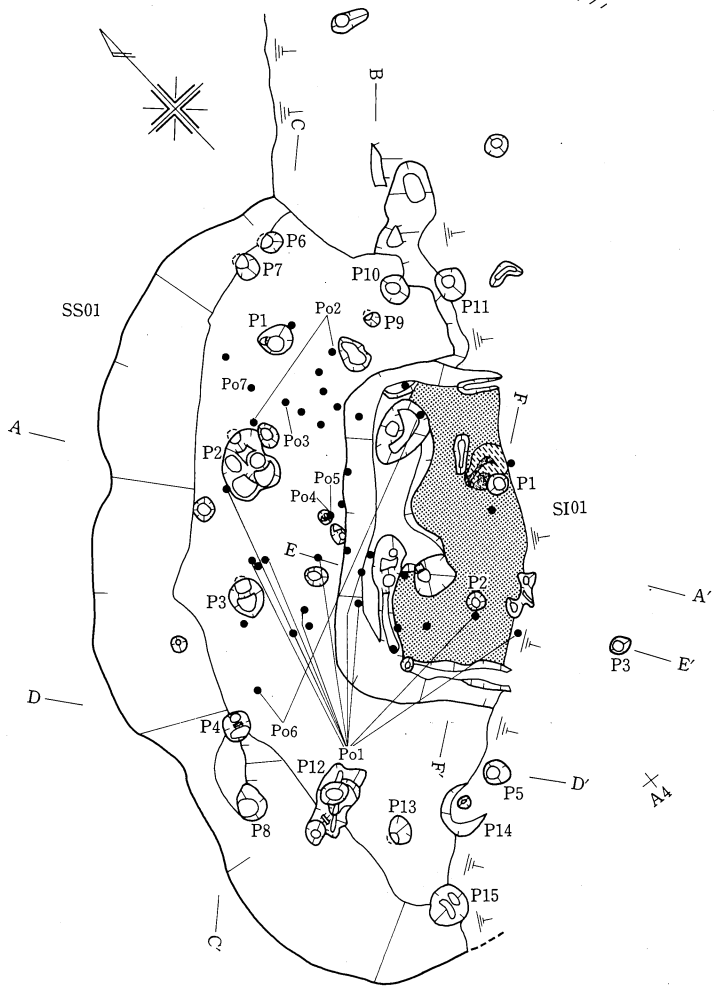
H=64.00m  
E



H=63.60m  
A



- ①黒褐色土
- ②暗褐色土
- ③暗茶褐色土
- ④黄褐色土と暗灰色土の混じり
- ⑤暗褐色土と暗灰色土(黒褐色土ブロック混)
- ⑥暗褐色土
- ⑦暗赤褐色土(しまる、貼床)
- ⑧黄褐色土
- ⑨暗灰色土
- ⑩褐色土と暗褐色土の混じり
- ⑪黒褐色土と暗褐色土の混じり
- ⑫暗茶褐色土
- ⑬黒褐色土と暗褐色土の混じり(炭化物含む)
- ⑭暗灰褐色土



挿図38 小浜小谷遺跡SS01・S101遺構図

いずれも埋土下層からの出土で、Po 1はS S 01とS I 01とが接合している。

時期は、Po 1～3の土師器甕は7世紀後半以降、Po 4～6は陶器TK217併行で、これらの遺物は、時期差があるとみられるが、概ね7世紀半ばから後半以降のものと考えられる。ただし、これらの遺物は多少浮いた状態で出土しており、遺構の時期とすることはできない。

土層および遺物の接合状況、柱穴等から、S S 01とS I 01は同時に機能しており、S S 01はS I 01のための加工段であると考えられる。(八峠)

### 第3節 土坑・土壇・埋葬施設

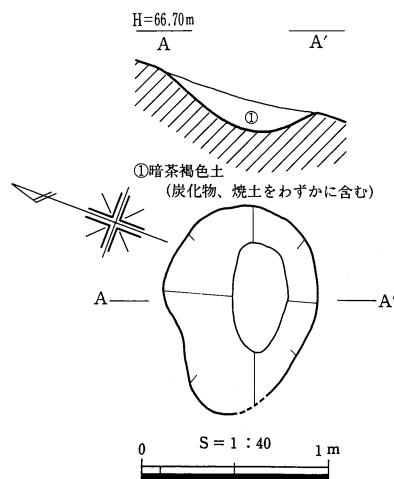
#### S K 01 (挿図39、図版13)

調査区北東側のC 3グリッド中央西端付近、標高66.3～66.5mの南向きの斜面に立地する。西側2mにS D 01がある。

遺存状態は悪い。試掘の際に確認できていた。規模は、東西112cm、南北80cm、東西方向にやや長い不整な楕円形である。断面形は逆台形状を呈し、深さは最も遺存状態のよい北側で、最大17cmを測る。

埋土は単層で、炭化物・焼土を含んでいた。

遺物は出土せず、時期・性格ともに不明である。(八峠)



挿図39 小浜小谷遺跡S K 01遺構図

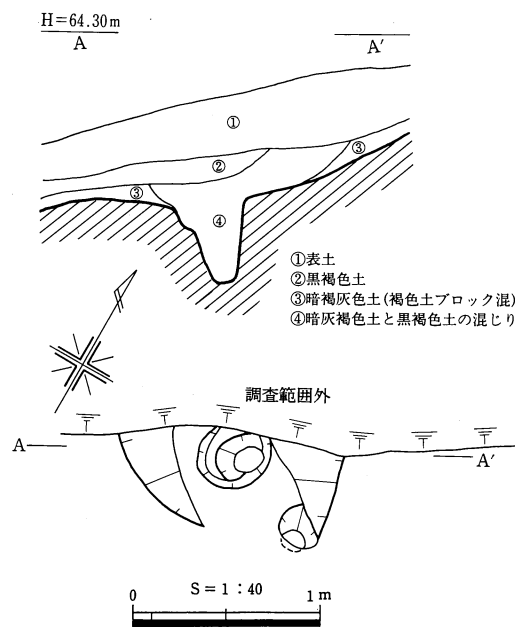
#### S K 02 (挿図40、図版13)

調査区の最も西側のB 1グリッド中央西側付近、標高63.3～63.8mの南向きの斜面に立地する。遺構の北側は調査区範囲外となる。東側4mにS K 03がある。

遺存状態は大変悪い。規模は、東西118cm以上、南北52cm以上、不整な円形を呈するものと考えられる。断面形は不明である。深さは土層断面で最大68cmを測る。

埋土は単層であった。

遺物は出土しなかった。中央にピットのあることから落とし穴状の遺構とも考えられるが、遺存状態が悪く、不明である。(八峠)



挿図40 小浜小谷遺跡S K 02遺構図

#### S K 03 (挿図41、図版13)

調査区の最も西側のB 1グリッド中央東側付近、標高63.6～64.1mの南向きの斜面に立地する。西側4mにSK02がある。

遺存状態はよい。規模は、東西110cm、南北104cm、不整な円形を呈する。遺構の南側は木の根により攪乱を受けていた。断面形は不整な逆台形状を呈し、深さは最も遺存状態のよい北側で最大93cmを測る。

埋土は4層に分層でき、①・②層は炭化物を含んでいた。

遺物は出土せず、時期・性格ともに不明である。(八峠)

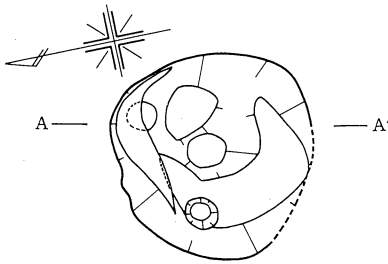
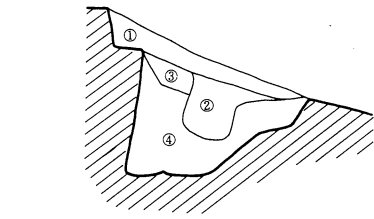
H=64.30m  
A A'

SK04 (挿図42・43、図版14・16)

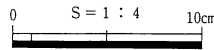
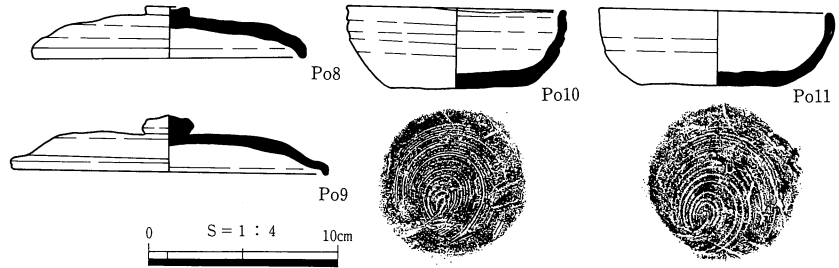
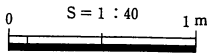
調査区中央のB3グリッド中央付近、標高65.4m前後のわずかな南側の斜面に立地する。東側5mにSD01がある。

遺存状態はよい。規模は東西59cm、南北48cmの不整な楕円形を呈する。深さは20cmである。

遺構の中央付近から須恵器坏蓋Po8・9、坏身Po10・11が出土した。出土状況は、Po10・Po11が内面を上に向けた状態で置かれ、その上にやはり内面を上に向けたPo8・Po9が置かれていた。Po8とPo11は重なるように配されていたが、Po9とPo10は位置が異なり、Po9はPo8の下側で、一部重なっ



- ①暗灰褐色土(炭化物を含む)
- ②暗灰褐色土と黒褐色土の混じり(炭化物を含む)
- ③暗茶褐色土(黒褐色土ブロック混)
- ④暗褐色土(黄褐色土ブロック混)



挿図41 小浜小谷遺跡SK03遺構図

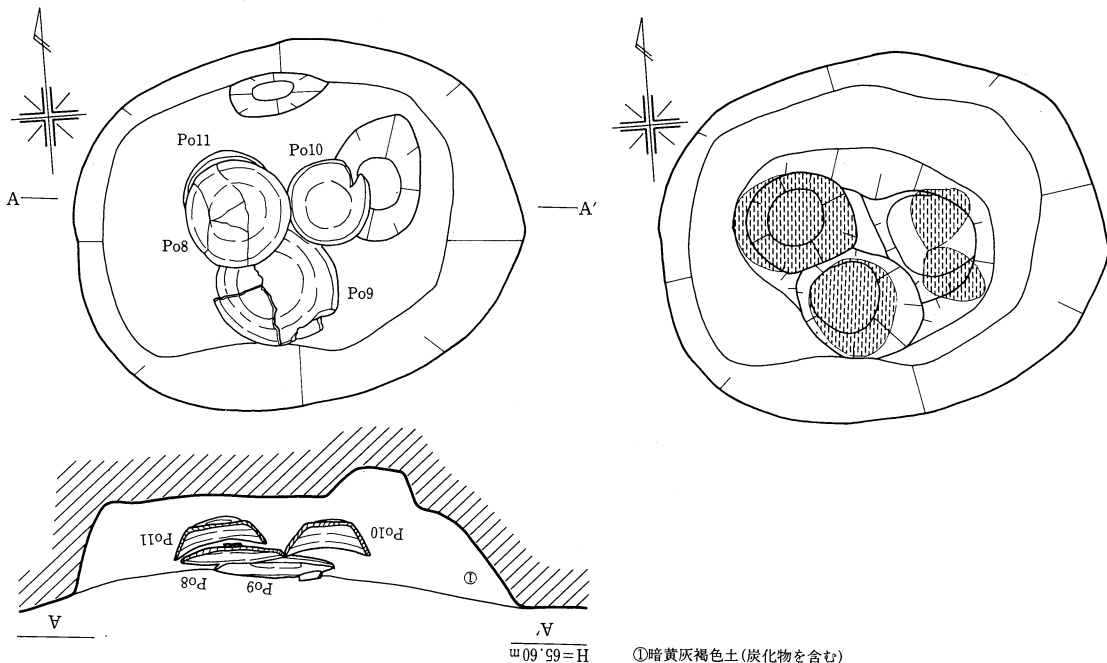
挿図42 小浜小谷遺跡SK04出土遺物実測図

ていた。坏蓋と坏身では蓋の口径が大きく、セットとはならない。

遺構の底は平坦で、中央付近に土を盛り、その上に遺物が置かれていた。Po9・Po10・Po11の接地した面には炭化物が多量に付着していた。炭化物はいずれも細片で、分析はできなかった。掘り方は不整な楕円形で断面は逆台形状である。遺構の中のピット状に窪んだ箇所は木の根による攪乱である。

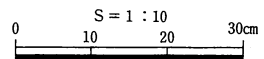
埋土は単層で、炭化物が含まれていた。

時期は、Po10・Po11の形態および底部がいずれも糸切り未調整であること、Po8・9のつまみが扁平で、口縁部にはかえりがないことから8世紀後半ごろと考えられる。ただし、蓋と身では口径に違いがあり、セットとは



①暗黄灰褐色土(炭化物を含む)

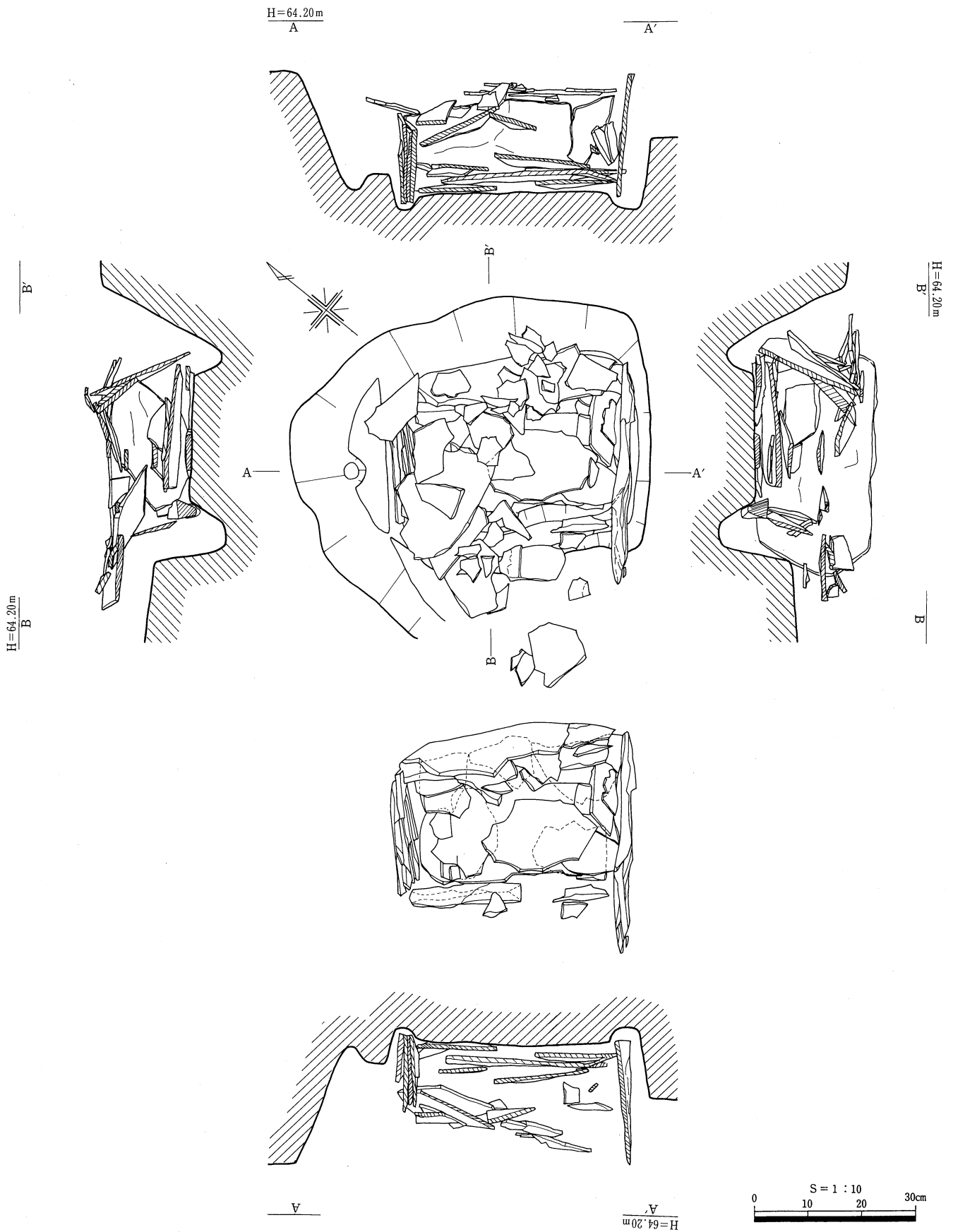
炭化物検出スクリーントーン



挿図43 小浜小谷遺跡SK04遺構図

ならないものの、これらの遺物は同時期と考えられる。

遺構の性格は、遺物の出土状況により袍衣埋葬具または地鎮具等の可能性も指摘できるが、不明である。(八峠)



挿図44 小浜小谷遺跡SX01遺構図

S X 01 (挿図44・45、図版14)

調査区のB 4グリッド中央部付近、標高63.5~64.0mの南向きの斜面に立地する。南東側1mにS S 01がある。

遺存状態は比較的よい。規模は、内法で東西29cm、南北38cmを測る。高さは天井部が失われており不明であるが、18cm以上である。平面は長形状で、南北の側石で、東西の側石を挟むものと考えられる。

東側石は1枚の板石であるが、西の側石は抜き取られ、一部北半分が残存している。この部分は、本来は2枚で構成されたものと考えられる。南側石は1枚石で、西側に長く張り出している。北側石は厚いが、4枚に剝離している。底石は3重に敷かれていた。東および西側石は、土圧により傾いている。

天井部は失われており、検出時には上面に板石が散乱し、内部には板石が乱雑に入っていた。

掘り方は、東西49cm以上、南北66cmで、不整な楕円形状を呈する。南側は木の根による攪乱である。北側が一段高いテラス状となり、ピット状の窪みも確認できた。

内部には流土が入り込んでいた。

遺物は出土せず、時期不明であるが、奈良時代ごろの石櫃状の埋葬施設と考えられる。  
(八峠)

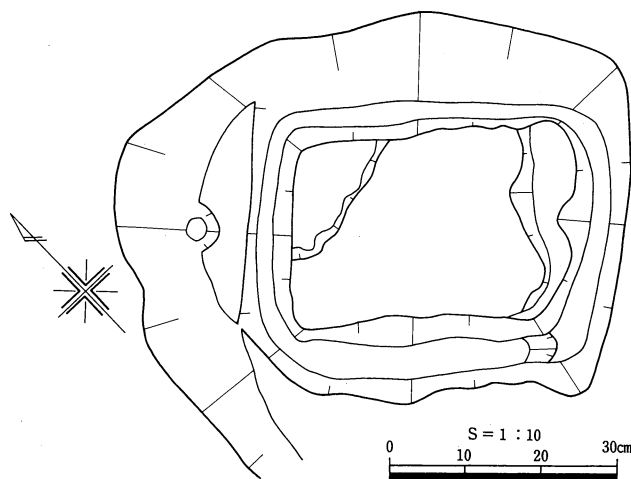
### 第4節 溝状遺構

S D 01 (挿図46、図版15)

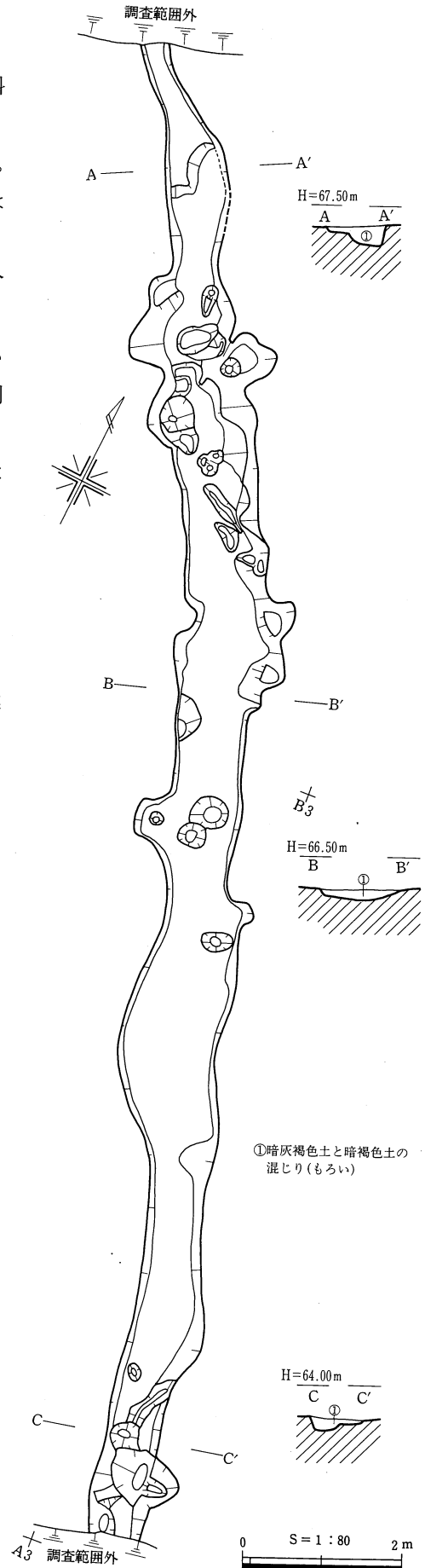
調査区中央部のC 3・B 3・B 4グリッド、標高63.2~67.4mの南向きの斜面に立地する。調査区中央付近を南北に縦断する。北側・南側は調査区外に延びる。

規模は幅0.3~1.4m、長さは残存で約19mを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単層であった。

遺物は出土せず、時期は不明であるが、道状または境界として使用されたと考えられる。  
(八峠)



挿図45 小浜小谷遺跡 S X 01墓墳掘り方実測図



挿図46 小浜小谷遺跡 S D 01遺構図

## 第5節 ピット群

### ピット群01・02 (挿図47・48、図版15)

ピット群01は、調査区C 2グリッド、標高66.1~67.1mのやや緩やかな南向きの斜面に立地する。ピットを8個確認したが、規則性はなく、付近には他に遺構は確認できなかった。

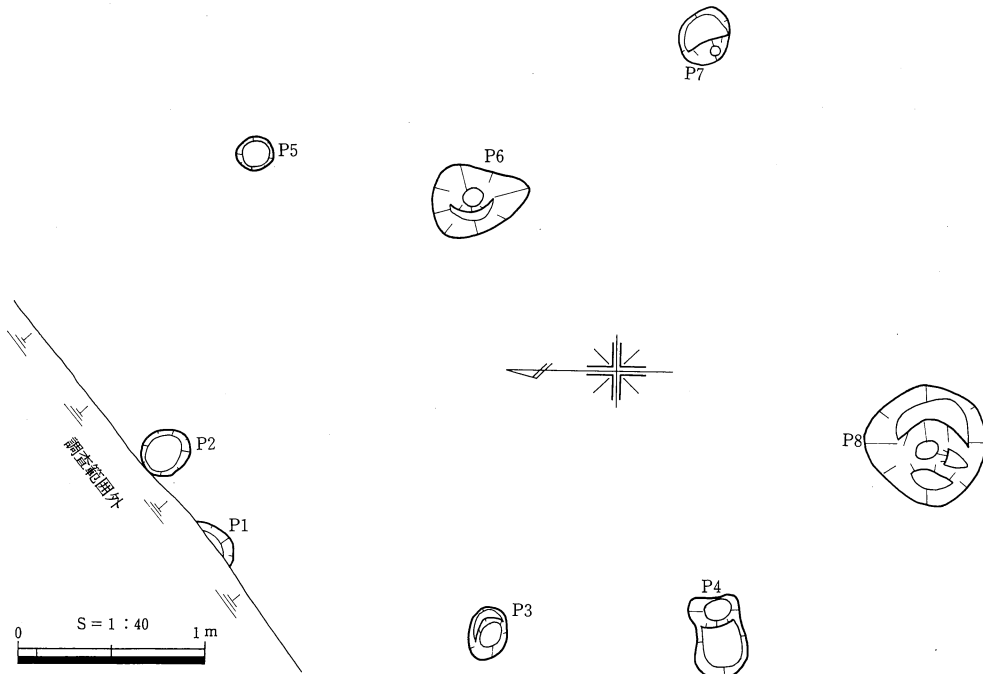
ピット群02は、調査区B 4・C 4グリッド、標高64~65.6mの南向きの斜面で、S X 01、S S 01に近いP 5~8と、その北側にP 1~4がある。また、D 4グリッド、標高66.4m付近の調査区際にピットを1個確認した。

いずれのピットも出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

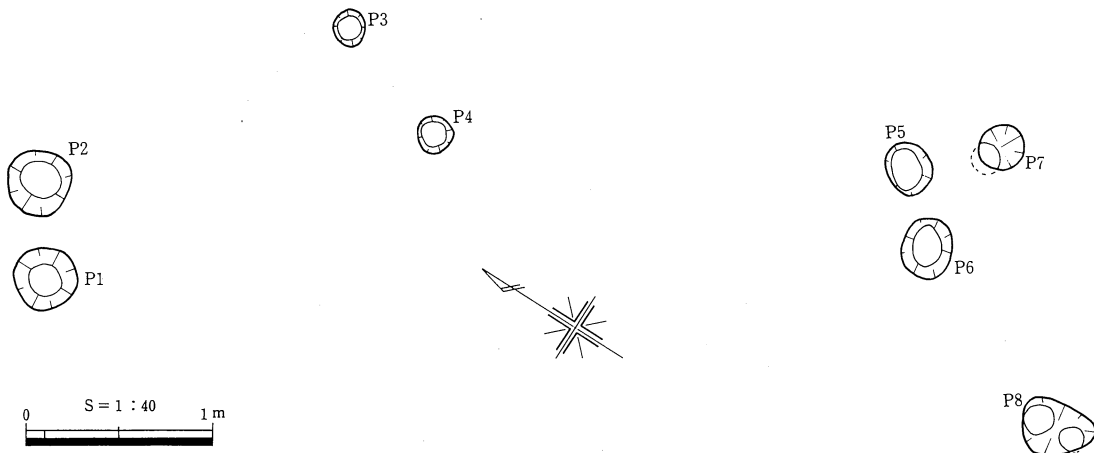
(八峠)

ピット群01				ピット群02				その他	
ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ
P 1	31↑×9↑-26	P 5	19×18-20	P 1	34×34-21	P 5	28×24-26	D 4 G P 1	23×22-46
P 2	27×24-45	P 6	51×39-42	P 2	35×34-38	P 6	31×26-39		
P 3	28×20-33	P 7	30×28-25	P 3	19×17-20	P 7	24×23-25		
P 4	43×28-18	P 8	63×63-45	P 4	19×19-56	P 8	39×28-80		

挿表1 小浜小谷遺跡ピット群一覧表



挿図47 小浜小谷遺跡ピット群01遺構図



挿図48 小浜小谷遺跡ピット群02遺構図



# 第5章 池ノ谷第2遺跡の調査

## 第1節 調査の概要

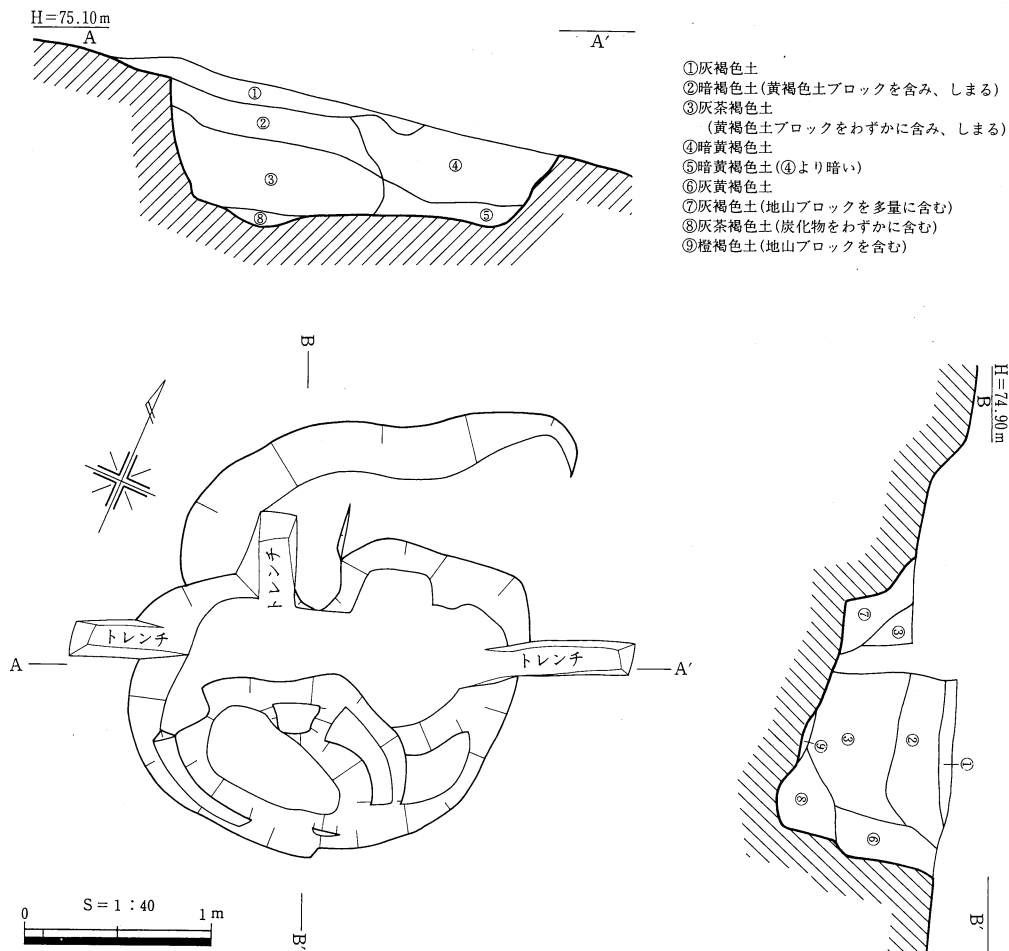
池ノ谷第2遺跡は、泊村小浜字池ノ谷に存在し、標高65~78mのほぼ南北に延びる丘陵上および東側に傾斜する斜面部に立地する。現況は丘陵頂部は畑地となっている。

この遺跡では、昭和8年に開墾によって外縁付鈕I式の流水文銅鐸1口が出土している<sup>(7)</sup>。この銅鐸の他に4個の同範銅鐸があり、このうち、最も新しく鑄造されたものとわかっている<sup>(8)</sup>。また、この銅鐸内には2本の青銅製舌が入っており、銅鐸使用方法を考える上でも大変貴重な資料である。

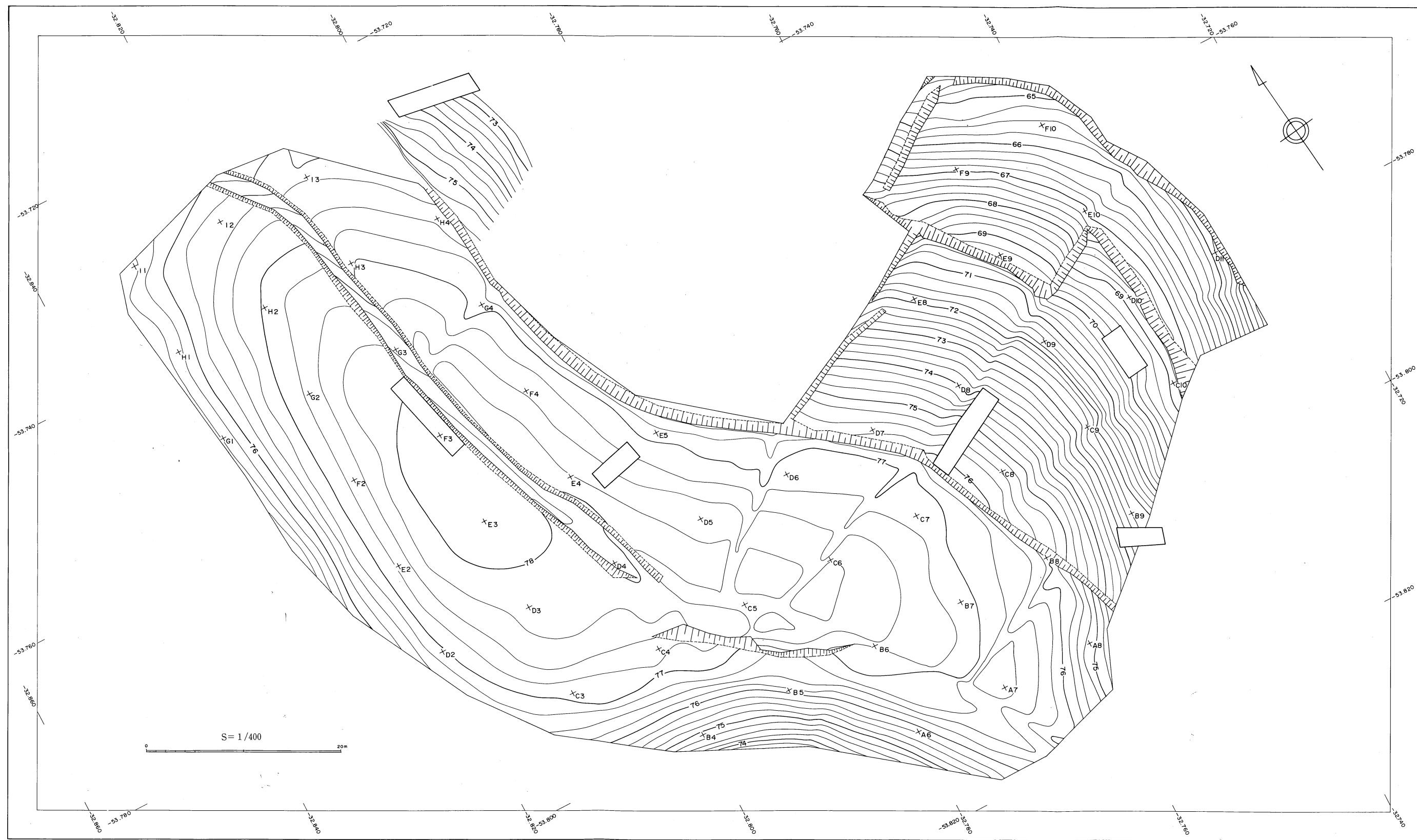
このため、調査地内には銅鐸埋納坑および銅鐸破片の存在が考えられ、特に発見者が生前話していた出土地点を中心に南北16m、東西22mの範囲を、磁気探査を行った後掘り下げた。磁気探査ではわずかに反応があったために2mグリッドを設定し、掘り下げの結果、この反応は開墾時における地山面の変形箇所に対応するものであったことが判明した。また、倉光報告から推定される出土地点を中心に南北16m、東西9mの範囲を、磁気探査を行った後に掘り下げを開始した。この箇所においては、磁気探査では反応が認められなかったため、一気に表土剥ぎを開始した。

検出した遺構は、土壙墓1基、不明土坑8基、溝状遺構2条、ピット群1か所である。遺物が出土し時期が判明するものは乏しく、わずかにSK02、SK04、SK07である。SK04は出土遺物から古墳時代中期後半ごろ、SK02は出土遺物から古墳時代前期ごろのものと考えられる。また、性格がわかるものについては、SK07が二段掘りの土壙墓である他は不明である。調査区内においては、銅鐸埋納坑は検出することはできなかった。

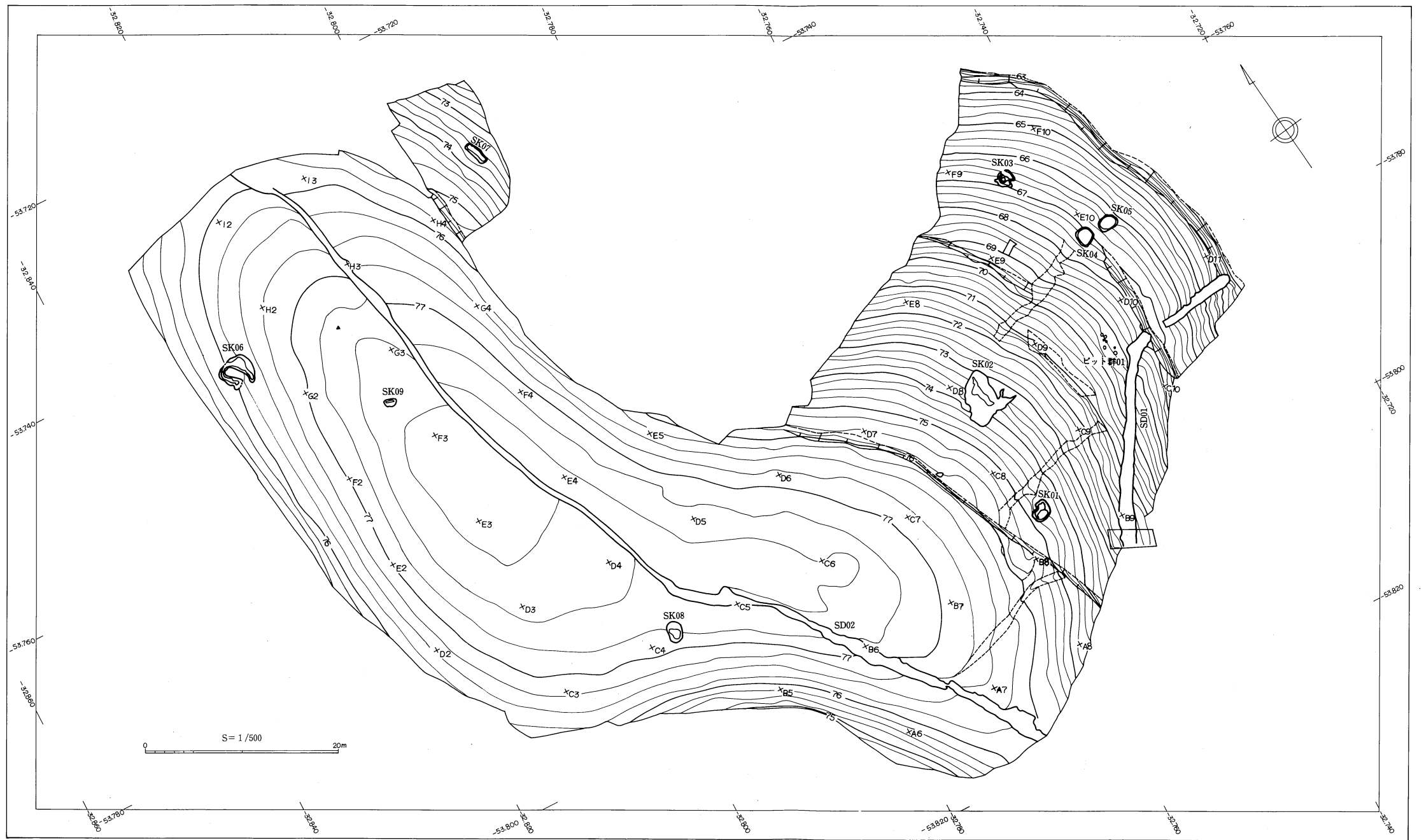
(牧本)



挿図49 池ノ谷第2遺跡SK01遺構図



挿図50 池ノ谷第2遺跡調査前地形測量図



挿図51 池ノ谷第2遺跡遺構全体図

## 第2節 土坑・土壌

### S K 01 (挿図49、図版18)

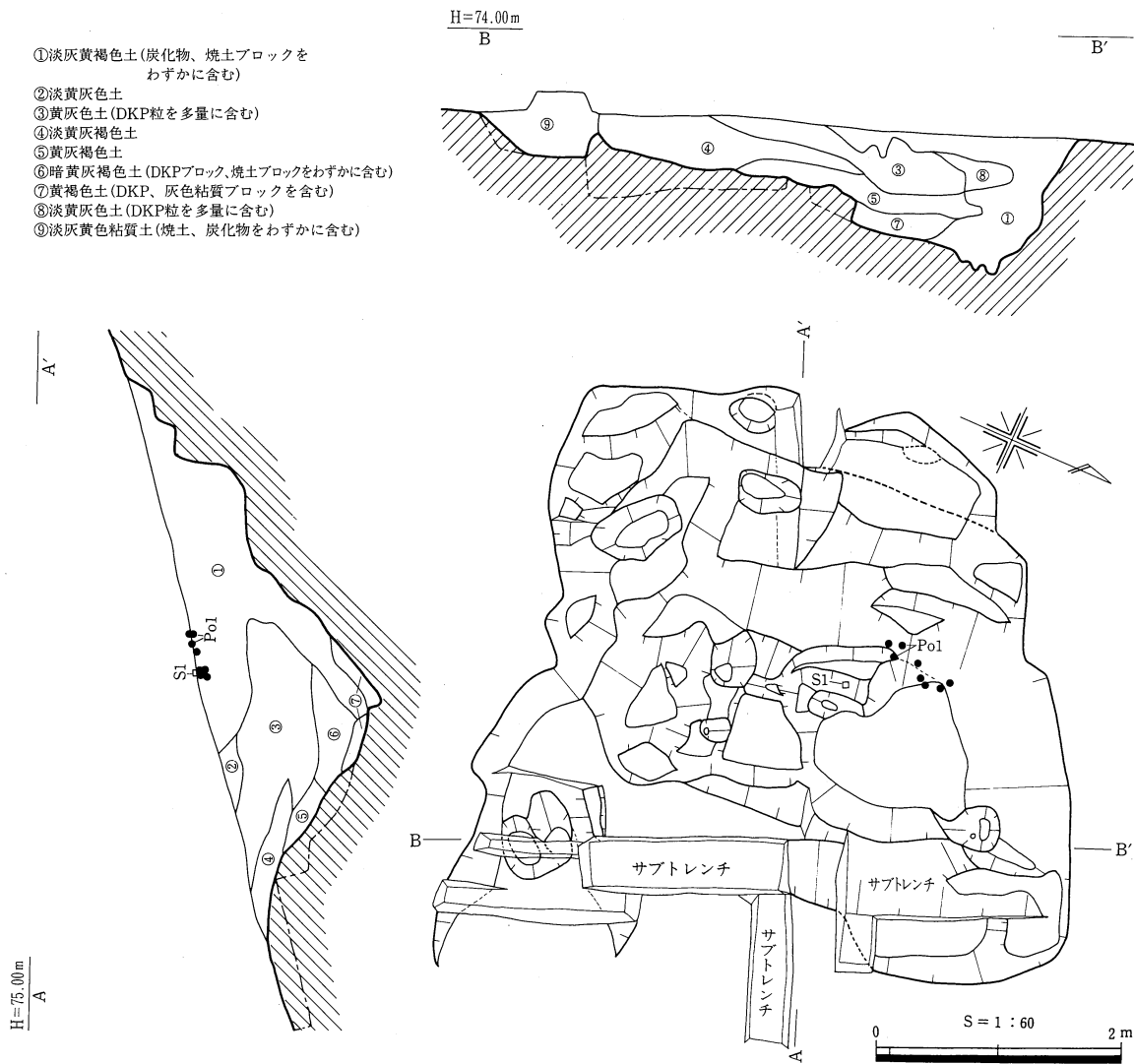
調査区東側斜面の上縁部C 7グリッドにあり、標高約74.3~75.0mの緩やかに東に向かって傾斜する斜面に立地する。

周辺は耕作等により削平されている。平面形は、上縁部・下縁部とも不整形を呈す。規模は、上縁部長軸2.04×短軸1.53m、底面長軸1.47×短軸1.07mで、深さは最大0.79mを測る。底面の南東側は、底面から約30cmの深さでくぼむ。

埋土は9層に分層でき、自然堆積したものと思われる。

遺物は土器片が数点出土しているが、時期・性格ともに不明である。

(岩崎)



挿図52 池ノ谷第2遺跡S K 02遺構図

### S K 02 (挿図52・53、図版18・22)

調査区南東側のD 9グリッド、標高73.1~74.3mの東側へ傾斜する斜面に立地する。南側約10mにはS K 01がある。

平面は上縁部・底部とも不整形、断面は不整V字形を呈し、特に斜面側では階段状に掘り込まれている。規模

は、上縁部で南北4.76m×東西3.5m、深さ最大1.91mを測る。

埋土は9層に分層できた。①⑥層中には、大型の焼土ブロックを含んでおり、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物には、図化できたものに布留式甕口縁部Po1、磨石S1がある。いずれも①層上面での出土である。

出土遺物から、古墳時代前期から中期ごろのものと考えられるが、性格は不明である。  
(牧本)

**S K 03** (挿図54、図版18)

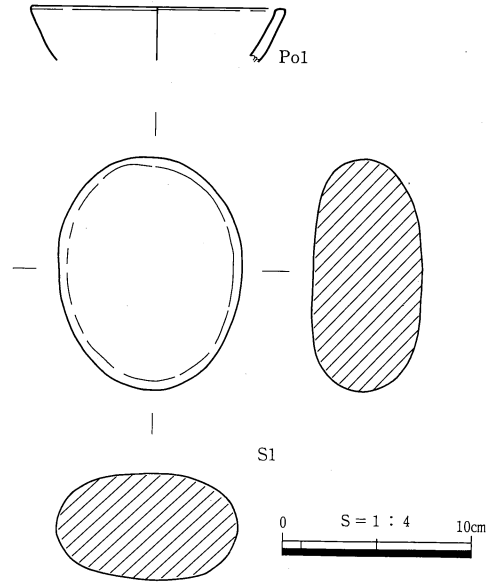
調査区東側斜面の中程F9グリッドにあり、標高約66.5~67.5mの東に向かって傾斜する斜面に立地する。

周辺は耕作により削平され、南側は木の根により攪乱をうけている。平面形は上縁部・下縁部とも隅丸方形を呈するものと思われる。規模は、上縁部長軸1.60×短軸1.18m、底部長軸1.54×短軸1.07mで、深さは最大0.47mである。ほぼ中央が円形に一段低くなる。

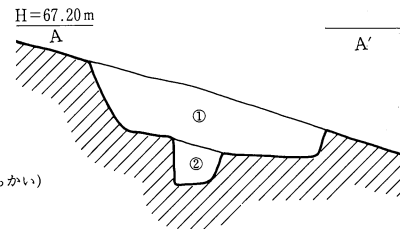
埋土は暗褐色土が単層で入る。

遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。  
(岩崎)

- ①暗褐色土
- ②暗褐色土(①より茶色がかかり、柔らかい)
- ③木の根による攪乱



挿図53 池ノ谷第2遺跡 S K 02出土遺物実測図



**S K 04** (挿図55・56、図版18・22)

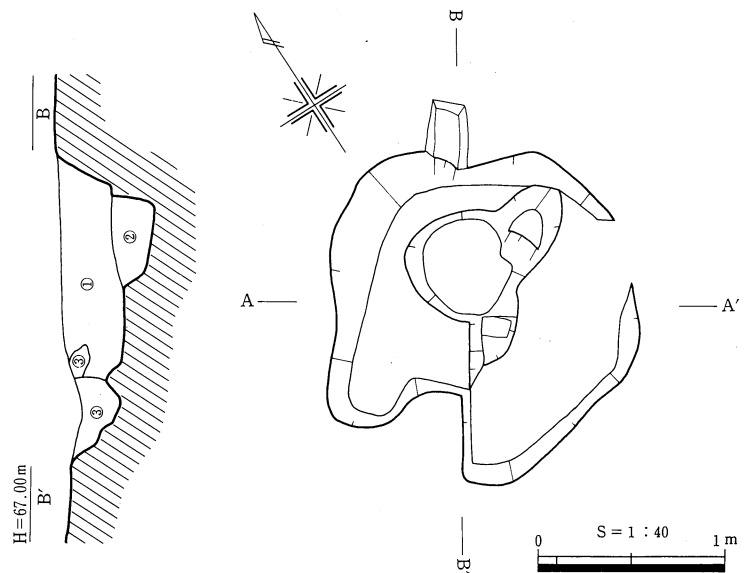
調査区東側の緩やかに南西から北東側へかけて傾斜する斜面部の先端に程近いE10・11グリッドの標高約67.4mの斜面上に立地している。東側約2mにS K 05が、北西側約13.6mにS K 03がそれぞれ位置している。

形態は、開墾後の耕作による削平をかなり受けており、遺存状態は非常に悪い。平面形はやや不整な円形である。断面は皿状を呈す。規模は、上縁部で長軸1.96m×短軸1.83m、底面で長軸1.73m×短軸1.27mを測る。深さはもっとも残りの良い北側で上縁部から約0.25mである。底部には木の根攪乱がある。

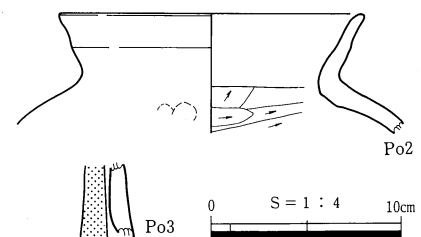
埋土は6層からなる。

遺物は、図化できたものに土師器甕Po2、高坏Po3がある。これらはS K 04検出時に、埋土①層上面から出土したものである。

出土遺物から古墳時代中期後半ごろのものとする。性格は不明である。  
(井上)



挿図54 池ノ谷第2遺跡 S K 03遺構図



挿図55 池ノ谷第2遺跡 S K 04出土遺物実測図

S K 05 (挿図57、図版18)

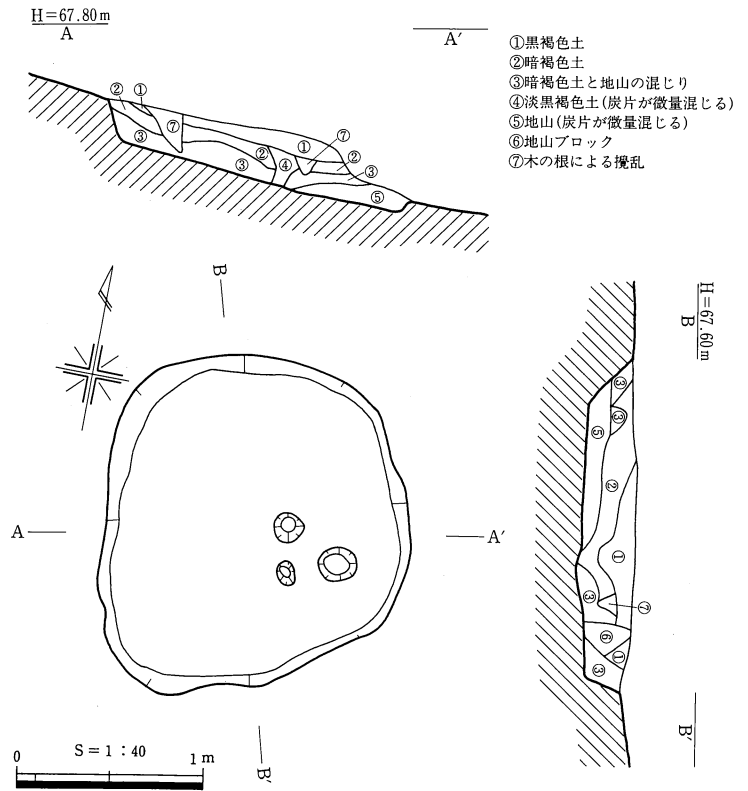
調査区東側の緩やかに南西から北東側へかけて傾斜する斜面部の先端に程近いE11グリッドの標高約66.7mの斜面上に立地している。西側約2mにS K04が、南側約11.4mにS D01がそれぞれ位置している。

形態は、開墾後の耕作による削平をかなり受けており、遺存状態は非常に悪い。平面形は上縁部、底面部ともに楕円形である。断面は逆台形状を呈す。規模は、上縁部で長軸1.78m×短軸1.62m、底面で長軸1.61m×短軸1.50mを測る。深さはもともと残りのよい西側で上縁部から約0.3mである。底部には木の根攪乱がある。

埋土は6層からなる。

遺物は、S K05検出時に、埋土①層上面から土師器片が数点出土しているが、図化できなかった。

時期判断できる遺物がなく不明である。また、性格も不明である。(井上)



挿図56 池ノ谷第2遺跡S K04遺構図

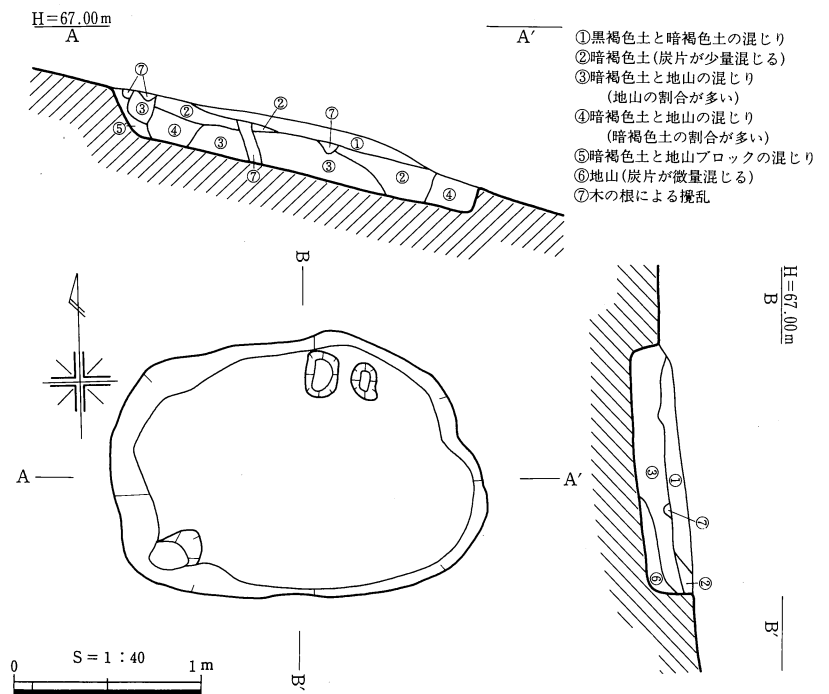
S K 06 (挿図58、図版19)

調査区北西側のH2グリッド、標高76.0~76.4mの緩やかに西側へ傾斜する斜面に立地する。南東側約12mにはS K09、東側約30mにはS K07がある。

平面は上縁部不整形なC字状、断面は不整な逆台形状を呈す。規模は、上縁部で南北3.58m×東西3.35m、幅0.4~1.5m、深さ最大0.51mを測る。

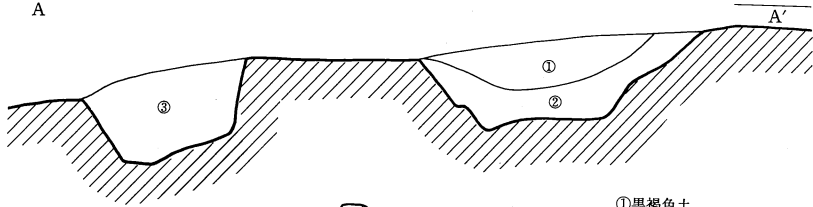
埋土は3層に分層できた。東側と西側では埋土が異なり、東側は黒褐色を主体とし2層に分層できたが、西側は淡灰色粘質土単層である。土層を見る限り、東側と西側は別遺構と考えられるが、平面的には一連のものと考えておきたい。

遺物は全く出土しておらず、時期・性格は不明である。(牧本)

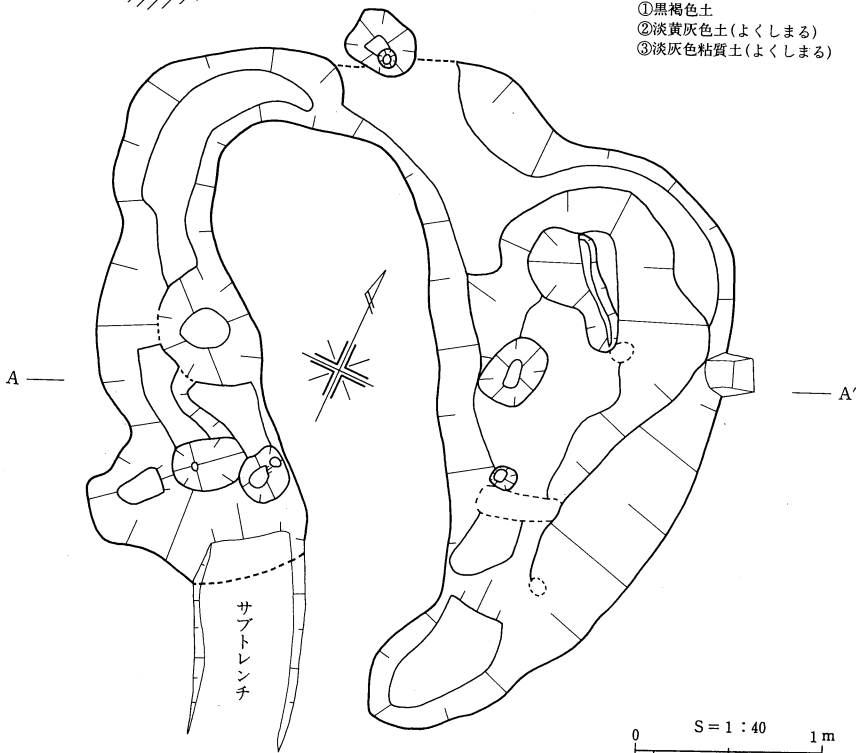


挿図57 池ノ谷第2遺跡S K05遺構図

H=76.50m  
A



- ①黒褐色土
- ②淡黄灰色土(よくしまる)
- ③淡灰色粘質土(よくしまる)

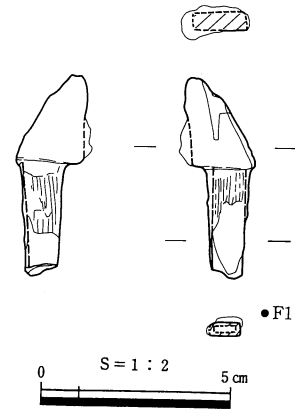


挿図58 池ノ谷第2遺跡SK06遺構図

SK07 (挿図59・60、図版19・22)

調査区北東側のI5グリッド、標高73.6~74.2mの東側へ傾斜する斜面に立地する。南西側約30mにはSK06がある。

平面は上縁部・底部とも長方形、断面は斜面側が二段に掘り込まれ、階段状を呈す。規模は、上縁部で長さ2.25m×幅0.87m、底面で長さ2.1m×幅0.55m、深さ最大0.36mを測る。主軸方向はN-13°-Wと、やや東西側に振れるがほぼ南北を向く。



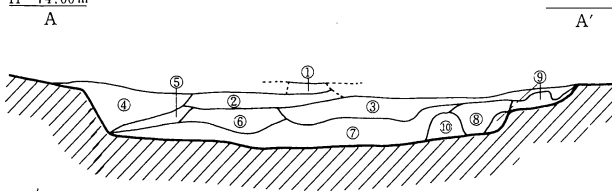
挿図59 池ノ谷第2遺跡SK07出土遺物実測図

埋土は10層に分層できた。いずれもほぼ水平堆積し、一部黒褐色系の土層と褐色系の土層が互層状に堆積しており、人為的に埋められたものと考えられる。木棺等の痕跡は確認できなかった。

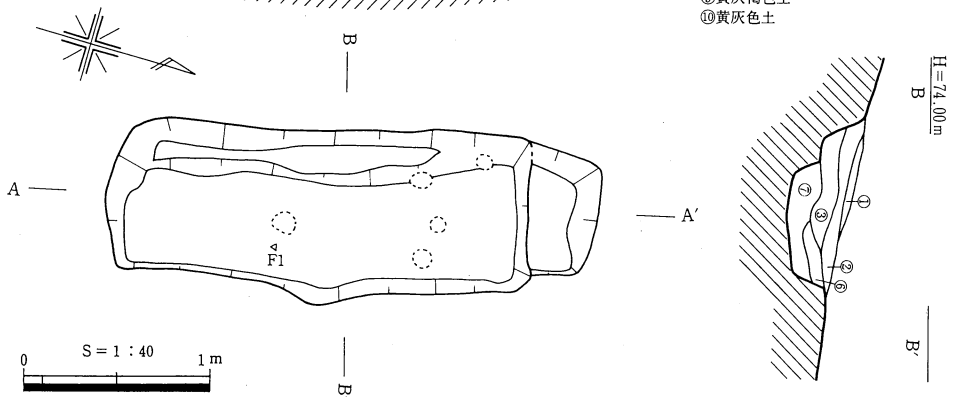
出土遺物には、底面中央やや南側から鉄製刀子片F1が出土している。

出土遺物には、時期を窺うものは出土していないが、周辺の遺構のあり方から、古墳時代前期から中期ごろの土壙墓と考えられる。(牧本)

H=74.00m  
A



- ①黒褐色土
- ②暗灰褐色土
- ③淡黒灰色土
- ④褐色土
- ⑤黒褐色土
- ⑥暗灰黄褐色土(基盤ブロックを含む)
- ⑦暗褐色土
- ⑧暗黄灰褐色土(基盤ブロックを含む)
- ⑨黄灰褐色土
- ⑩黄灰色土



挿図60 池ノ谷第2遺跡SK07遺構図

S K 08 (挿図61、図版19)

調査区中央やや南寄りC5・D5グリッドにかけての標高約77.3mのほぼ平坦面に立地している。北東側約2.2mにSD02が位置している。

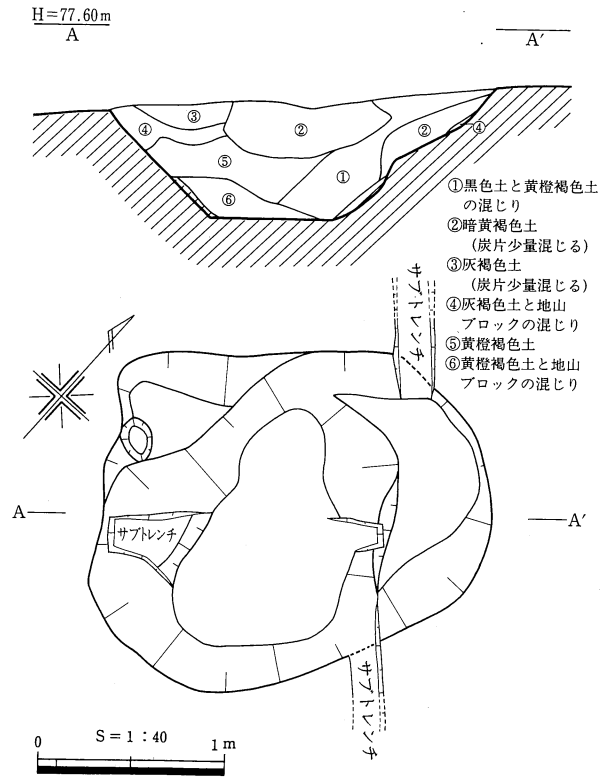
形態は、開墾後の耕作による削平をかなり受けており、遺存状態はあまりよくない。平面形は上縁部、底面ともにやや不整な円形である。北東側と南東側の2か所がテラス状をなし、不整形の底面に向かい落ち込む。規模は、上縁部で長軸2.06m×短軸1.68m、底面で長軸1.23m×短軸0.67mを測る。深さはもっとも残りの良い南西側で上縁部から約0.6mである。なお、西側には木の根による攪乱がある。

埋土は6層からなる。一部木の根による攪乱の影響も考えられるが、他の遺構と比較すると、全体的にモサモサした、しまりのない埋土であった。

遺物は全く出土していない。

時期・性格は不明である。

(井上)



挿図61 池ノ谷第2遺跡SK08遺構図

S K 09 (挿図62、図版20)

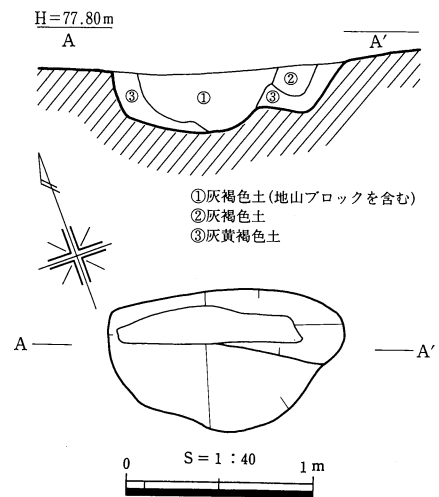
調査区中央やや北寄りのG3グリッドにあり、南北に走る尾根上の標高約77.6mの平坦面に立地する。

周辺は耕作により削平されている。平面形は、上縁部・下縁部ともに不整楕円形を呈する。規模は、上縁部1.25×0.73m、下縁部0.93×0.18mで、深さは最大0.4mである。

埋土は3層に分層でき、自然堆積したものと思われる。

遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

(岩崎)



挿図62 池ノ谷第2遺跡SK09遺構図

### 第3節 溝状遺構

SD01 (挿図63、図版20)

調査区南東のB9、C10、D10・11グリッドにあり、標高63.0~72.1mの東側に傾斜する斜面に立地する。10・11ライン付近で耕作等の掘削により大きく削り取られ、分断されている。また、斜面上方ではさらに南側調査区外にも延びているようだが、周辺は大きく削平されており、遺存状態は悪いと思われる。

上方では斜面に対し、斜めに南西から北東へほぼ直線的に走るが、C10杭付近で鈍角に折れ曲がり、途中分断されているが、ほぼ直線的に東側へ下降している。総延長32.5m以上、幅0.64~1.75m、深さ7~53cmを測る。

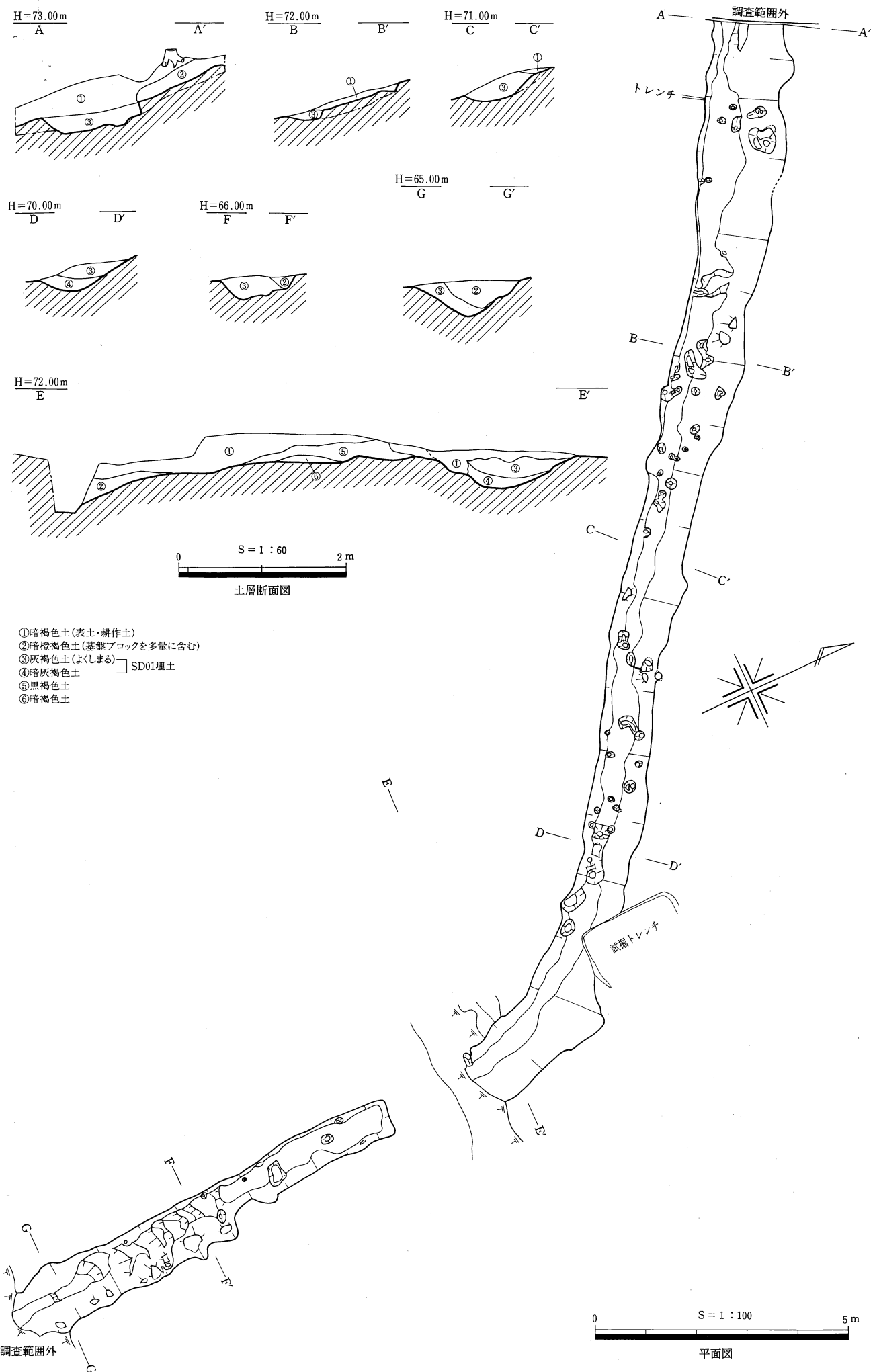
掘り込みは、斜面上方へ行くに従って浅くなり、東端付近では階段状に段がつく。

埋土は、単層から2層に分層できた。鈍角に折れ曲がる付近のF-F'ラインの土層を観察すると、黒褐色土⑤層から掘り込んでいる。また、耕作土・攪乱土が厚くかぶっており、近代以前のものであることは明らかである。

遺物は全く出土しておらず、時期・性格は不明である。

(牧本)





- ①暗褐色土(表土・耕作土)
- ②暗橙褐色土(基盤ブロックを多量に含む)
- ③灰褐色土(よくしまる) ] SD01埋土
- ④暗灰褐色土
- ⑤黒褐色土
- ⑥暗褐色土

挿図63 池ノ谷第2遺跡SD01遺構図

S D02 (挿図51・64)

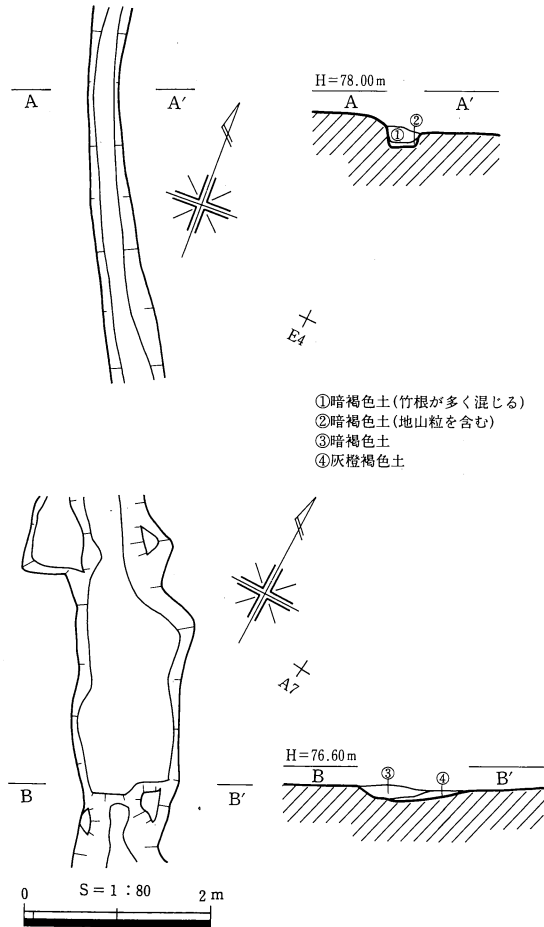
調査区を南北に走る尾根上にあり、標高75.96~77.65 mではほぼ尾根に沿って走る。

周辺は耕作により削平されている。S D02は長さ約99.2mで、両端は調査区外へ延びている。D 5グリッド付近を境にして形態が異なる。南側は幅0.84~1.48m、深さ6~27cm、断面は浅い皿状であるが、北側は、幅0.38~0.61m、深さ20~35cm、断面は逆台形を呈す。

埋土は同様にD 5グリッド付近で異なり、南側は比較的締まるが、北側は締まりのないものである。いずれも自然堆積したものと思われる。

遺物は土器片がわずかに出土したが、図化できなかった。時期は不明である。

調査前に既に、D 5グリッドより北側は明瞭な溝として観察できており、耕作にともない後世に掘り返され、改変されたものと思われるが、南側部分に関しては性格は不明であるが、調査区外での状況を見ると、道としての機能していたものと思われる。(岩崎)



- ①暗褐色土(竹根が多く混じる)
- ②暗褐色土(地山粒を含む)
- ③暗褐色土
- ④灰橙褐色土

挿図64 池ノ谷第2遺跡S D02遺構図

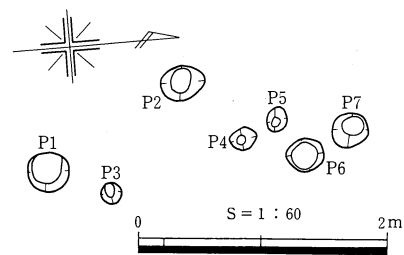
## 第4節 ピット群

ピット群01 (挿図65)

調査区南東側のD10グリッドにあり、標高69.0~69.5mの東側に傾斜する斜面に立地する。南側約1mにはS D01がある。

泊村の試掘調査で計7個のピットを検出している。それぞれの規模は、挿表2を参照されたい。いずれのピットも不規則に並んでいる。

遺物は出土しておらず、時期・性格は不明である。(牧本)



挿図65 池ノ谷第2遺跡ピット群01遺構図

ピット番号	規模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	規模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	規模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	33×30-15		P 4	22×17-10		P 6	30×25-22	
P 2	36×27-25		P 5	20×15-17		P 7	27×27-43	
P 3	16×15-8							

挿表2 池ノ谷第2遺跡ピット群01一覧表

## 第5節 銅鐸出土地の調査 (挿図64・66、図版21)

泊銅鐸は、昭和8年1月9日、同村小浜地内の住民が、食糧不足を解消するために分け与えられた村の共有地を開墾中に偶然に発掘した。

出土地は、因伯国境の一つ西側の標高約77.5mのほぼ南北に走る丘陵の、東斜面がわずかに膨らんだ部分の8合目あたりであるとされている。しかし、正確な位置については報告された時点が古いこと、また、報告されてからも耕作が進んでおり、地形の変化が著しいと推測されることなどから、不明な点が多い。

このような状況のもと、今回の調査に先立ち、1995年に泊村教育委員会によって試掘調査が行われている。<sup>(4)</sup> 試掘トレンチNo.30の位置は、発見者から生前聞いた位置を参考にして設定された。このトレンチでは遺物は出土していないが、ピット7個が検出されている。また、同トレンチ内では試掘調査段階では確認できてはいないが、SD01の掘り込み肩部が検出されている。しかし、銅鐸埋納坑と考えられるものは検出できていない。

このため、島根大学田中義昭教授の指導を仰ぎ、試掘トレンチを中心にさらに範囲を広げ、磁気探査を行った後に掘り下げを開始することとした。磁気探査の範囲は、試掘トレンチNo.30を中心にして、斜面がやや緩くなる部分を、地形に添うように南北16m×東西21mの範囲を2mグリッド、計88グリッドに設定して行った。その結果、反応があった箇所を×印で示しておく。その後、L字状にベルトを設定した後に掘り下げた。

土層断面を観察すると、表土・耕作土は厚さ25~70cmを測り、その下は耕作の際に攪乱を受けたと考えられる基盤層を多量に含む暗橙褐色土であることが判明した。

出土遺物には、図化できたものに、×グリッドからの布留式甕Po4・5がある。このグリッドの西側でSK02が検出され、この遺構上面から同時期の布留式甕が出土していることから、この遺物はSK02上面から出土した遺物と同一の可能性はある。

また、表土中から貝殻が出土しているが、耕作時に肥料として混入されたものと判断される。

同じ東斜面部からは、前述の不明土坑SK01~05、SD01が検出されているが、いずれの土坑も銅鐸を埋納したと思われる痕跡はなかった。SD01についても、性格は不明である。

また、I5グリッドに拡張区を設定した。この地区は、倉光報告を参考に設定した箇所<sup>(7)</sup>で、この地区も、同様に磁気探査を行った後に掘り下げを開始することになったが、反応が全くなかったため、表土を一気に掘り下げた。銅鐸埋納坑は検出することはできなかったが、おそらく古墳時代と考えられる土壙墓SK07を1基検出したのみであった。

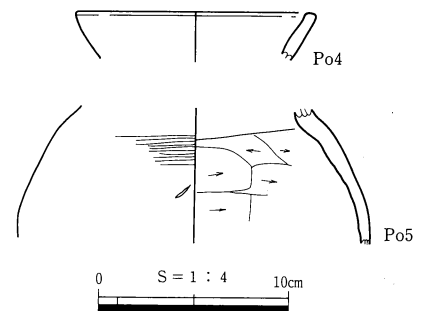
銅鐸の出土状況は、倉光報告では、地表下一尺五寸程度(約45.6cm)のところ<sup>(8)</sup>に身を稜線に平行し、底を東南南に向けて埋置されていたということであるが、現況の表土・耕作土が①②層を含めて厚いところで約90cm近くになるところもあり、そうすると表土・耕作土中からの出土であった可能性も出てきてしまう。

また、尾崎報告<sup>(9)</sup>では、出土地点は発見時より約30年前に開墾され、7・8年後原野に戻ったところで、以前にも発掘しそのまま埋めた人があるということで、複数回掘りかえされたものと推定できよう。

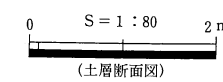
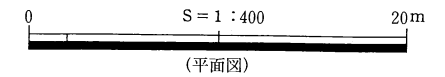
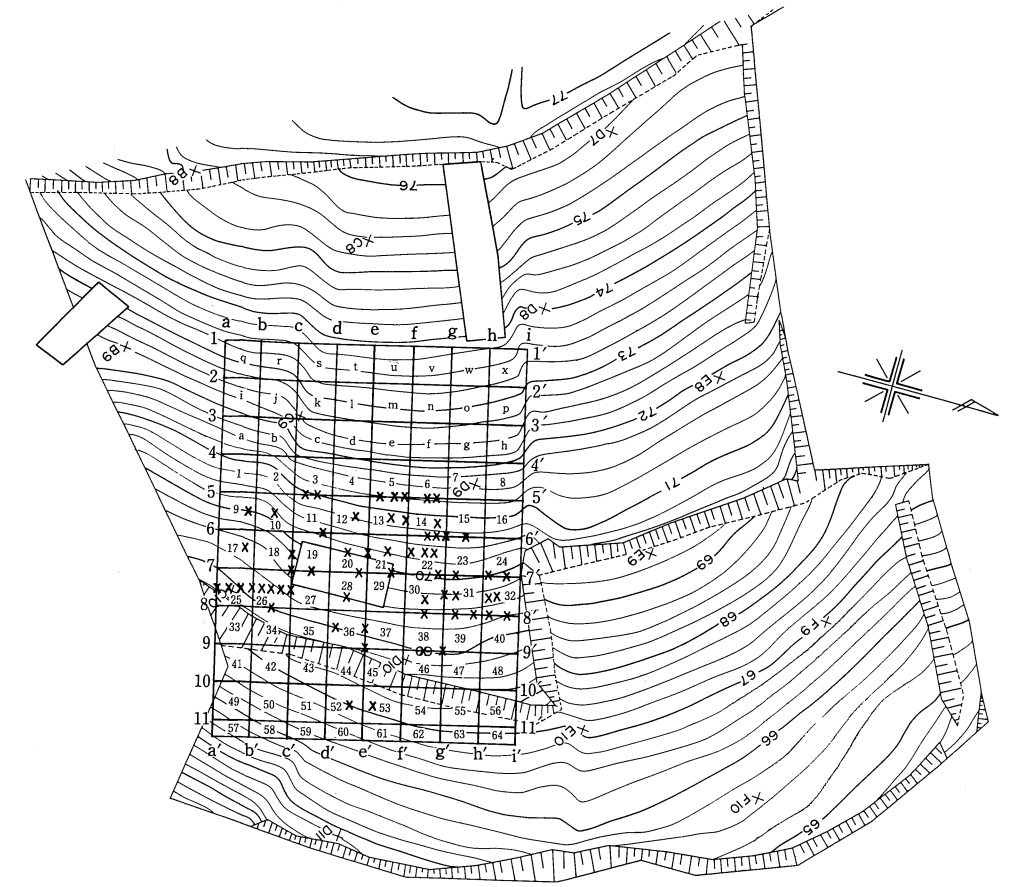
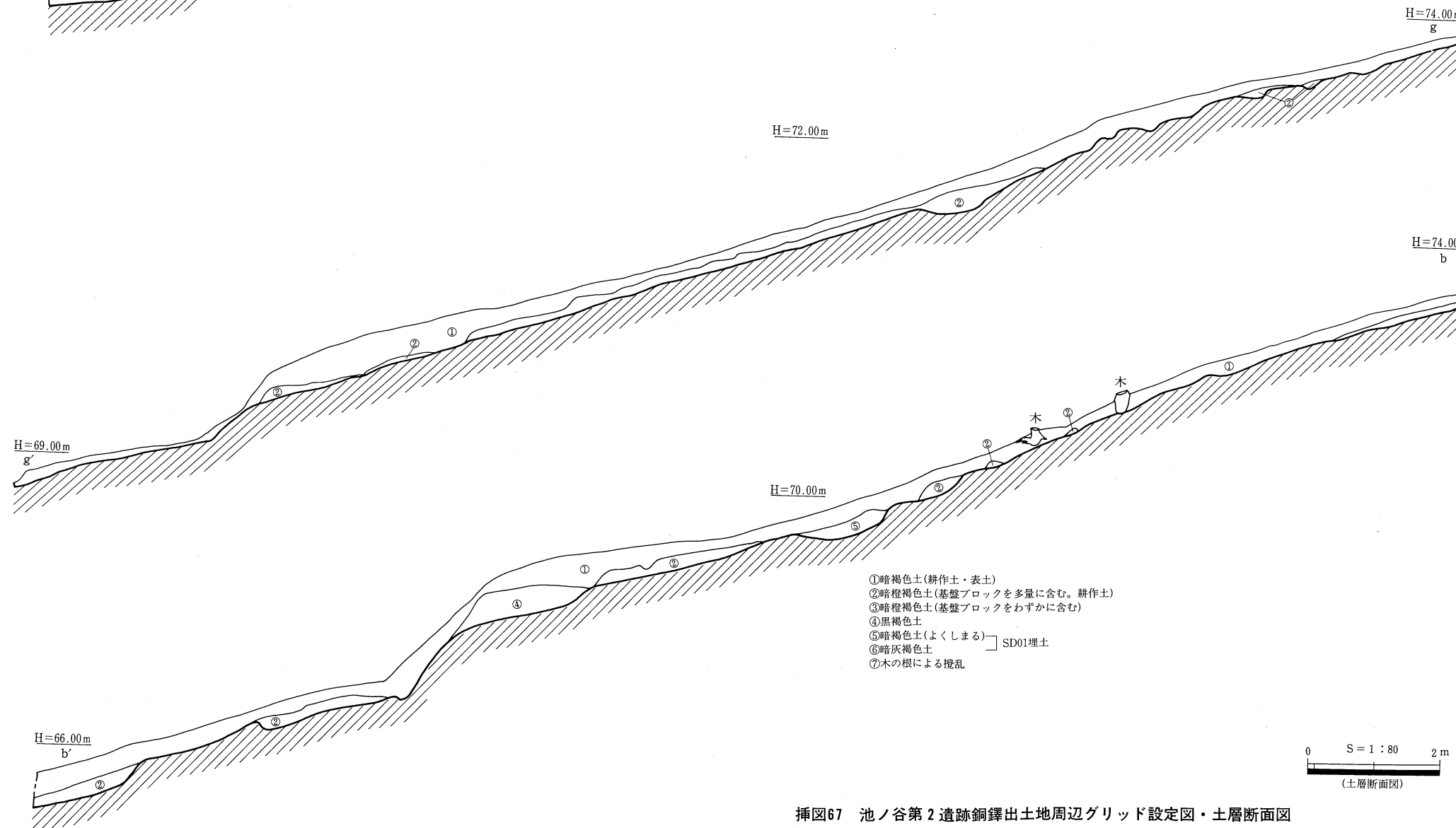
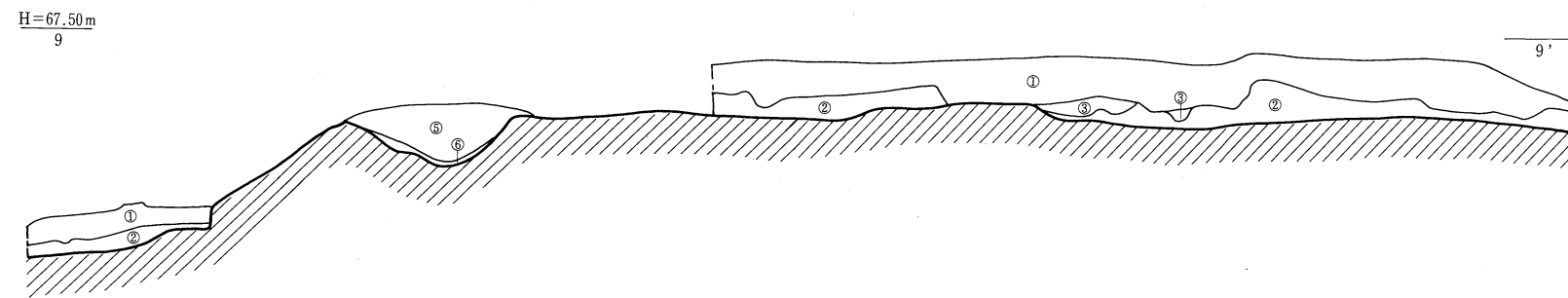
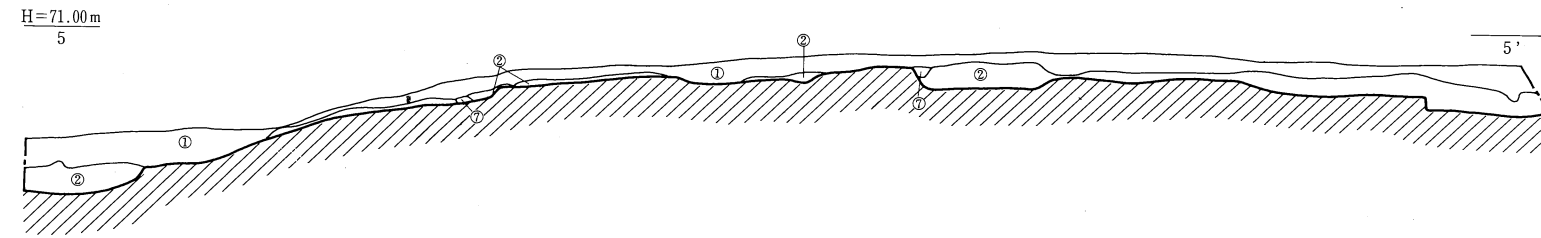
銅鐸の表面には、明らかに新しい傷跡が残っており、これが2回目の出土時<sup>(9)</sup>についたものか、1回目の出土時についたものかは不明であるが、埋納状況が判明する銅鐸の多くが、鱗を立てた状態で出土していることから、昭和8年当時発見されたときには、銅鐸は鱗を水平状態にしていた可能性があり、すでに本来の埋納場所からは移動していたものと推定される。

今回の発掘調査の結果および、従来の報告から判断すると、銅鐸埋納坑は別地点であると考えられるが、大きく移動したとは考えにくく、この丘陵斜面部近くに本来の銅鐸埋納坑は存在するものと推察される。

(牧本)



挿図66 池ノ谷第2遺跡銅鐸出土地  
周辺出土遺物実測図



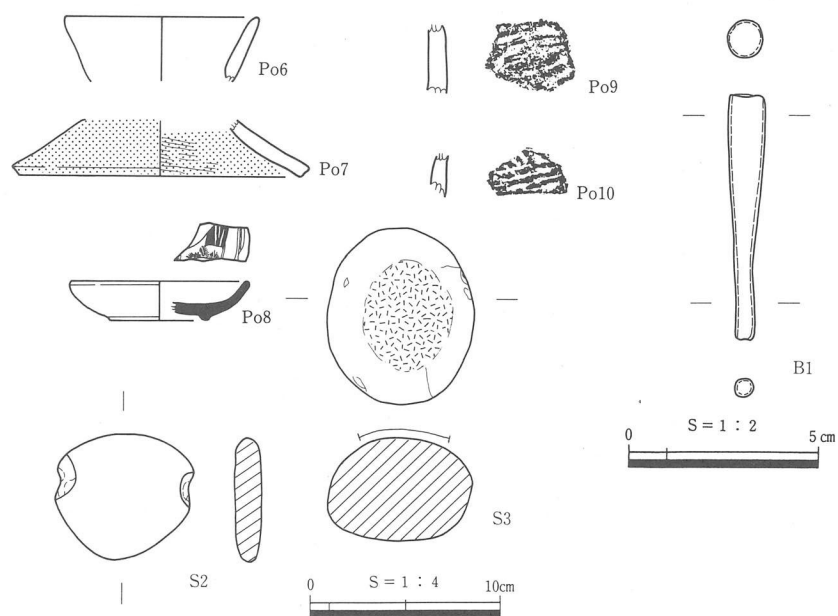
挿図67 池ノ谷第2遺跡銅鐸出土地周辺グリッド設定図・土層断面図

## 第6節 遺構外遺物 (挿図68、図版22)

遺構外からの出土遺物には、図化できたものに、土師器直口壺口縁部Po6、高坏裾部Po7、染付小皿Po8、縄文土器片Po9・10、打ち欠き石錘S2、磨石S3、煙管吸い口B1がある。

土師器類は古墳時代中期ごろ、染付・煙管は近世、Po9・10は縄文時代後期から晩期ごろのものと考えられる。

このうち、打ち欠き石錘が出土していることから、近辺には漁撈を行っていた集落が存在している可能性が考えられる。 (牧本)



挿図68 池ノ谷第2遺跡遺構外出土遺物実測図



写真③ 発掘調査参加者

## 第6章 遺構・遺物の検討

### 第1節 小浜ワラ畑遺跡出土土師器について

小浜ワラ畑遺跡では、古墳時代中期後半ごろの遺物が比較的まとまって出土しており、従来の土器編年を再考できる資料であると考えられる。ここでは、編年案を中心にして考察してみることにする。

この遺跡の遺物は、3時期に分けることができると考える。

#### 〈小浜ワラ畑Ⅰ期〉

この時期は、S I 05-1 出土遺物を指標とする。器種はそろっていないが、高坏は皿状を呈す(2)、椀状を呈す(1)がある。南谷大山編年Ⅷ期では、すべて高坏が椀状に変化していると考えられることから、南谷大山編年Ⅷ期以前と考えられる。

#### 〈小浜ワラ畑Ⅱ期〉

この時期は、S I 07出土遺物を指標とする。土師器では、複合口縁甕(3~5)は口縁端部は平坦面をもち、口縁部下端は突出がほとんどなくなる。胴部は長胴で丸底、外面平行叩き後ハケ目調整である、内面は、肩部、底部に指頭圧痕が明瞭に残り、ケズリが施される。布留式甕は、口縁外面にアクセントをもつもの(6)、内面肥厚するもの(7)がある。高坏は、大型有段のもの(10・11)、椀状坏部をもつもの(12~15)がある。(10・11)は、浅黄橙色胎土で端部が外反し、坏底部から口縁部の稜は非常に不明瞭となる。(13~15)は、坏部暗文が施され、脚部が5.5cm程度と短くなり、透かしをもつもの(14)もある。(12)は形態的に特異なもので、深い椀状坏部に、ほぼ中実の脚部をもつ。椀は体部が深いもの(16)と、やや浅いもの(17)、口縁部に屈曲が見られるもの(18)がある。直口壺(9)は、ほぼ直立する口縁部に扁球形の胴部をもつ。

この他に、無頸の甕(8)も出土している。

須恵器は、壘(19・20)が出土している。いずれも扁球形の胴部で、頸部が細い。(19)は波状文が頸部と胴部中位に1か所ずつ、(20)は波状文が肩部と中位に施される。定型化以前の所産と考えられ、TK216~ON46併行期と考えられる。

#### 〈小浜ワラ畑Ⅲ期〉

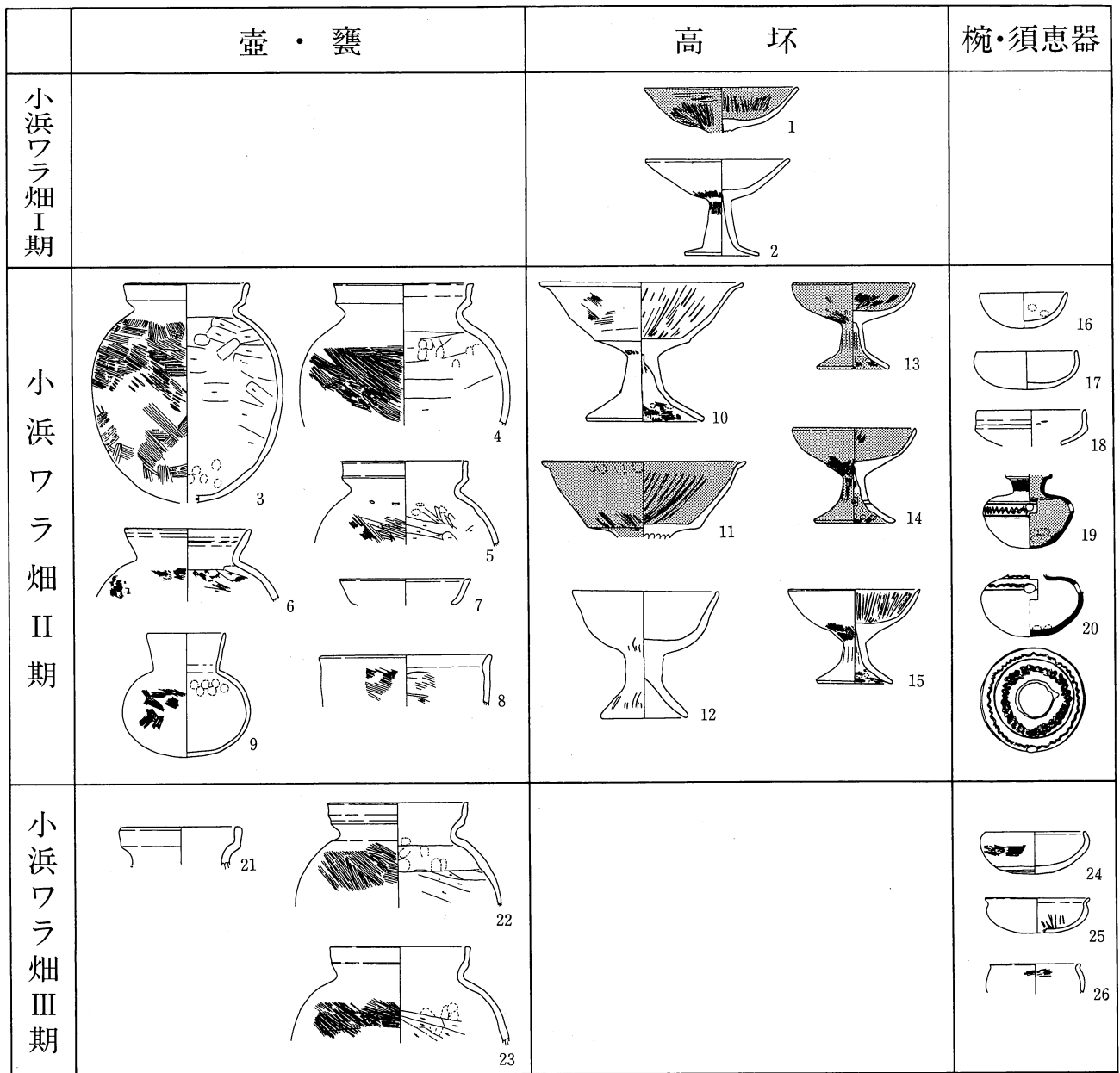
この時期は、S I 09出土遺物を指標とする。壺(21)は、口縁部が直立し、口縁部下端の稜が不明瞭になる。複合口縁甕(22・23)は口縁部下端が受け口状になる。椀(24~26)は、前時期と形態的にはほとんど変化がないが、口縁端部が外反する(25)、玉縁状に肥厚する(26)がある。

以上、編年案を提示したが、小浜ワラ畑Ⅰ期は、高坏が浅い皿状坏部のもので椀状のものが共伴していることから、南谷大山Ⅶ~Ⅷ中間期で石脇第1遺跡S I 02・13とほぼ同時期と考えられる。

また、小浜ワラ畑Ⅱ期は、南谷大山Ⅷ期に比べて、複合口縁甕の口縁部下端が鈍いながらも突出傾向にあり、また、布留式甕が内方へ肥厚するなど古相の様相がある。また、高坏も坏部は椀状を呈すが、南谷大山Ⅷ期に比べて脚部が細く、透かしをもつものがあるなど、若干古相と考える。

小浜ワラ畑Ⅲ期は、甕口縁部が受け口状に変化していることから、南谷大山Ⅷ期に併行するものとする。

(牧本)



挿図69 小浜ワラ畑遺跡土器編年案

1. KWS I 05Po19	6. KWS I 05Po13	11. KWS I 07Po49	16. KWS I 07Po66	21. KWS I 09Po70	26. KWS I 09Po72
2. KWS I 05Po18	7. KWS I 05Po15	12. KWS I 07Po53	17. KWS I 05Po23	22. KWS I 06Po28	すべてS=1/8
3. KWS I 07Po38	8. KWS I 07Po45	13. KWS I 07Po51	18. KWS I 05Po26	23. KWS I 09Po71	
4. KWS I 05Po 6	9. KWS I 05Po22	14. KWS I 07Po52	19. KWS I 07Po67	24. KWS I 09Po34	
5. KWS I 07Po39	10. KWS I 07Po48	15. KWS I 07Po50	20. KWS I 07Po68	25. KWS I 06Po35	

挿表3 小浜ワラ畑遺跡編年案対照表

## 第2節 小浜ワラ畑遺跡の集落変遷

小浜ワラ畑遺跡では、計9基の竪穴住居跡が検出され、小規模ではあるが古墳時代中期の比較的短期間に集落が営まれている。しかし、これらはすべて同時に集落を形成していたものではないことは、出土遺物を見るとわかる。以下、遺物の検討を踏まえた上で、小浜ワラ畑遺跡の集落の変遷を考えて見たい。

### (1)集落の変遷

前節でみたように、遺物は3時期に分けることができ、それぞれの時期での遺構の状況を考えて見たい。

小浜ワラ畑Ⅰ期は、S I 05-1のみである。一辺4.0mと推定され、方形を呈す小型の住居である。主柱穴は2本で、壁際特殊ピットをもつ。両側には仕切り溝は検出されなかった。このピット中では、V字状に組まれた石材の上に高坏部が乗せられており、壁際特殊ピットの性格を考える上でも興味深い。

小浜ワラ畑Ⅱ期では棟数が増え、S I 02・05-2・07の3棟である。いずれも一辺4.5~5mを測り、長方形または方形プランを呈す。床面積も15~20m<sup>2</sup>と小型の住居である。壁際特殊ピットはS I 05-2・07で検出され、いずれも仕切り溝を伴わないが、S I 07は両コーナーにベッド状遺構をもち、他の住居とは構造上異なる点があることに注目したい。

また、いずれの住居も焼失していることが注目される。このうち、S I 07以外からは住居内の遺物は少なく、この時期に、集落全体を襲う火災があったと考えるよりは、何らかの理由で放火廃棄されたものと考えた方がよいであろう。

小浜ワラ畑Ⅲ期では、確認できたところではS I 03・06・09の3棟であるが、S I 08もこの時期と考えてよいであろう。いずれも一辺約4~5mを測り、方形を呈す。床面積15m<sup>2</sup>とやはり小型の住居である。この時期には、壁際特殊ピットをもつものはなくなる。S I 09では、住居コーナーに屋内貯蔵穴が見られる。

### (2)小浜ワラ畑遺跡の性格

小浜ワラ畑遺跡では、時期が下るにつれて住居の数が増えるものの、集落全体としては大きく変化した様子は窺われない。また、住居自体の規模にもほとんど変化はなく、各時期を通じて等質的な集団であったものと考えられる。この中にあって、S I 07は他の住居より規模が大きく、床面にはベッド状遺構をもち、赤色顔料が入った須恵器甕をもつなど特異であり、この集落としては中心的な住居であった可能性がある。

住居以外の遺構については、調査区内ではほとんど検出されていない。わずかに土坑が検出されているが、性格は不明である。当遺跡は調査区外にも広がる可能性があり、住居以外の施設も存在するものと考えられる。

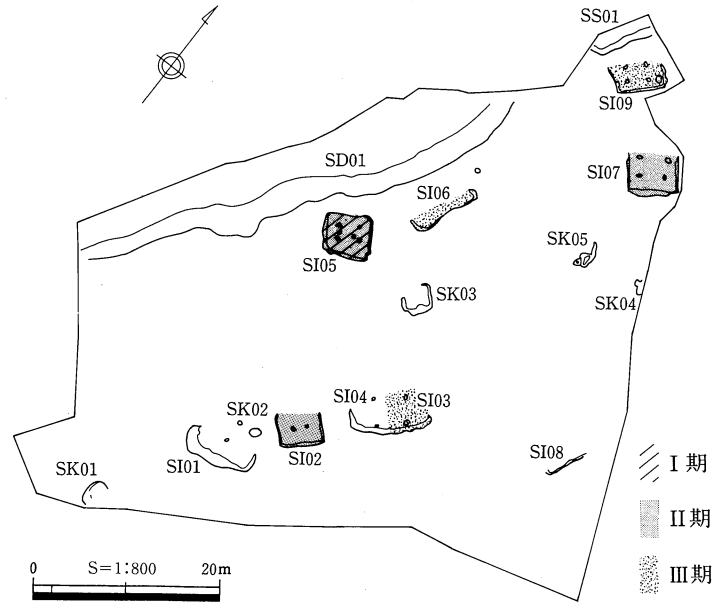
ほぼ同時期かやや遡る石脇第1遺跡<sup>(10)</sup>の集落は、一辺6m以上、床面積30m<sup>2</sup>以上の大型の住居で構成されるとともに、さらに集落の範囲が広がると考えられること、この時期非常に貴重な伽耶産の陶質土器、須恵器模倣土師器をもつなど、この地域では継続型拠点集落であったものと考えられる。それに対し、小浜ワラ畑遺跡は、一辺約5m前後、床面積15m<sup>2</sup>程度の小規模な住居のみからなる、小規模な単子集落<sup>(15)</sup>と考えられる。

また、住居の構造をみると、この遺跡の壁際特殊ピットをもつ住居では、両脇に仕切り溝をもつものはない。若干下る時期の南谷大山遺跡においても、大型住居ながら、両脇に溝をもつ壁際特殊ピットは皆無であるが、若干遡る石脇第1遺跡S I 01・02・13では、両側に溝をもつ壁際特殊ピットをもつことを考えると、南谷大山Ⅷ期前後（5世紀後半ごろ）には、壁際特殊ピット両脇の溝がなくなる傾向があると考えてもよいであろう。

しかし、倉吉市夏谷遺跡<sup>(11)</sup>、大栄町上種第5遺跡<sup>(12)</sup>、鳥取市湖山第1遺跡<sup>(13)</sup>、淀江町百塚第5遺跡<sup>(14)</sup>などでは、この時期には両側の溝は残っており、この現象が東伯耆東部の限られた地域での変化であると考えられることができる。

(牧本)





挿図70 小浜ワラ畑遺跡集落変遷図

遺構名	形態	規模 (m)	床面積 (㎡)	残存壁高 (m)	主柱穴 (本)	遺物	時期	備考
SI01	方形	6.0 × 4.6 ↑	26.7 ↑	0.61	2	なし	不明	
SI02	長方形	4.45 × 3.3 ↑	13.5 ↑	0.48	2	土師器甕・高坏	古墳時代 中期後半	焼土面、焼失
SI03	方形	4.2 × 3.3 ↑	13.4 ↑	0.39	2	土師器甕	古墳時代 中期前半	
SI04	長方形	3.5 × 4.0 ↑	13.9 ↑	0.23	2	なし	不明	
SI05-1	方形または長方形	4.0 × 0.4 ↑	1.2 ↑	0.7	2	土師器甕・高坏	古墳時代 中期中葉	壁際特殊ビット
SI05-2	長方形	4.4 × 3.5	15.3	0.65	4	土師器甕・高坏・直口壺・ 椀、弥生土器、縄文土器	古墳時代 中期中葉 ~後半	建て替え、焼土面、 壁際特殊ビット、 焼失住居
SI06	隅丸長方形?	6.6 × 1.7 ↑	13.4 ↑	0.28	不明	土師器甕・鉢・縄文土器	古墳時代 中期後半	
SI07	方形	5.08 × 4.1 ↑	20.3	0.89	4	土師器甕・高坏・椀、須恵 器甕、砥石・敲石・石皿	古墳時代 中期後半	壁際特殊ビット、 ベッド状遺構、焼 失住居、壁板
SI08	方形	4.5 ↑ × 1.2 ↑	13.9 ↑	0.31	不明	土師器高坏	古墳時代 中期後半	
SI09	方形または長方形	4.8 × 3 ↑	14.5 ↑	0.45	4	土師器甕・短頸壺、須恵器 甕・甕、縄文土器深鉢	古墳時代 中期後半	貯蔵穴?、壁板

挿表4 小浜ワラ畑遺跡竪穴住居跡一覧表

遺構名	形態	規模 (m)	床面積 (㎡)	残存壁高 (m)	主柱穴 (本)	遺物	時期	備考
SI01	隅丸方形	3.7 × 1.9 ↑	3.1 ↑	0.11	4	土師器甕・竈、須恵器坏蓋・ 坏身・甕	奈良時代	加工段、柵、焼土 面、焼失住居?

挿表5 小浜小谷遺跡竪穴住居跡一覧表

## 註・参考文献

- (1)小林達夫編『縄文土器大観』1～4 小学館 1989
- (2)財鳥取県教育文化財団『南谷大山遺跡II 南谷29号墳』 1994
- (3)田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (4)泊村教育委員会『泊村内遺跡発掘調査報告書』泊村文化財調査報告書第5集 1996
- (5)泊村『泊村誌』 1989
- (6)角川書店『角川日本地名大辞典 31 鳥取県』 1982
- (7)倉光清六「伯耆新発見の銅鐸」『考古学』第4巻第3号 東京考古学会 1933  
倉光清六「銅鐸に於ける新事実」『考古学』第4巻第4号 東京考古学会 1933
- (8)三木文雄『流水文銅鐸の研究』吉川弘文館 1974
- (9)尾崎岩雄「伯耆出土の銅鐸」『ドルメン』 1933  
尾崎岩雄『泊村の歴史稿』 1944
- (10)財鳥取県教育文化財団『石脇第3遺跡－森末地区・操り地区－ 石脇8・9号墳 寺戸第1遺跡 寺戸第2遺跡 石脇第1遺跡』 1998
- (11)倉吉市教育委員会『夏谷遺跡発掘調査報告書』 1996
- (12)大栄町教育委員会『上種第5遺跡発掘調査報告書』 1985
- (13)財鳥取県教育文化財団『湖山第1遺跡』 1989
- (14)財鳥取県教育文化財団『百塚第5遺跡 小波狭間谷遺跡 泉上経前遺跡』 1995
- (15)田中義昭「弥生時代拠点集落の再検討」『考古学と遺跡の保存』甘粕健先生退官記念論集 1996

## むすびにかえて

平成8年度及び9年度にかけて、国道9号改築工事に伴う発掘調査を行ってきましたが、このうち、小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、池ノ谷第2遺跡の調査によって、古墳時代の集落をはじめとし、当時の泊村の歴史を考える上でも大変貴重な成果を挙げることができました。

ここに関係各位のご協力により、発掘調査報告をまとめることができました。本報告書は、事実記載に力点を置き、報告の責を果たすよう努めたつもりであります。本報告書に収めた内容が、この地域の研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査の実施及び報告書の作成にあたり、指導、協力、助言をいただいた各位に、深く感謝申し上げます。

遺構名	遺物番号	取上号	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調内	色調外	備考	実測者番号
S I 02	Po1	10 18	埋土下層	土師器	甕	※15.0	△14.1			外面口縁部～頸部ヨコナデ。胴部斜め・横方向のハケ目。内面口縁部ヨコナデ。肩部以下右斜め上方向のケズリ。指頭圧痕。	密(1～3mm程度の石英・砂粒を多量に含む)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面胴部スス付着。内面胴部スス痕有り。	山本く210
S I 02	Po2	4	埋土上層	弥生土器	甕		△2.1			外面口縁部二条の凹線。内面ナデ。	密	良	にぶい褐色	にぶい褐色	外面頸部スス付着	野崎225
S I 02	Po3	8 15 16 17 19	埋土下層	土師器	高環	※16.2	△6.7			外面環底部ミガキ。口縁部風化のため調整不明瞭。内面環底部放射状暗文。口縁部風化のため調整不明瞭。	密	良好	明褐色～褐色	明赤褐色		山本く211
S I 03	Po4	30 35 36 38	床面	土師器	甕	※15.0	△23.1	25.8		外面口縁部ヨコナデ。胴部斜め方向のハケ目。下半風化のため調整不明瞭。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半右方向、下半左斜め上方向のケズリ。	密(1～3mm大の砂礫を含む)	良	赤褐色	赤褐色	外面口縁部～胴部上半スス付着。	野崎209
S I 03	Po5	37	床面	土師器	甕	※11.2	△5.3			外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ナデ。以下横方向のケズリ。	密	良	橙色	橙色	外面口縁部スス付着。	野崎203
S I 05	Po6	55 65 67 73 86 111 114 126 127	床面	土師器	甕	※17.4	△17.8	26.2		外面口縁部ヨコナデ。胴部斜め方向のハケ目。内面口縁部ヨコナデ。胴部右方向のケズリ。肩部指頭圧痕有り。	密(1～3mm大の砂粒を多く含む)	良好	にぶい黄褐色～灰色	にぶい黄褐色～灰色	内外面ともに胴部スス付着。口縁部～肩部黒斑有り。	野崎208
S I 05	Po7	67 87	埋土中	土師器	甕	※19.2	△4.2			内外面とも口縁部ヨコナデ。	密(2mm以下の石英や長石を含む)	良	にぶい黄褐色	明黄褐色～灰黄褐色	口縁部黒斑有り。	松本160
S I 05	Po8	63	埋土中	土師器	甕	※16.4	△4.0			外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部工具によるナデ。屈曲部密下ナデ。	密(1～2mm程度の砂粒を含む)	良好	橙色	橙色		山本く216
S I 05	Po9	66	埋土中	土師器	甕	※15.1	△3.9			内外面とも口縁部ヨコナデ。	密	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口縁部スス付着	野崎222
S I 05	Po10	50 78	埋土下層	土師器	甕	※15.2	△4.0			内外面とも口縁部ヨコナデ。	密(砂粒を含む)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		山本く217
S I 05	Po11	129 141 188	床面	土師器	甕	※15.8	△4.1			内外面とも口縁部ヨコナデ。	密(2mm以下の石英や長石を含む)	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口縁部スス付着	松本156
S I 05	Po12	129	床面	土師器	甕	※14.3	△3.4			内外面とも口縁部ヨコナデ。	密	良好	にぶい褐色	にぶい褐色		野崎224
S I 05	Po13	65 67 111	埋土中	土師器	甕	※15.8	△9.1			外面口縁部ヨコナデ。胴部横・斜め方向のハケ目。内面口縁部ヨコナデ。肩部ハケ目状工具による左斜め上方向へのケズリ。	密(1mm前後の砂粒を多く含む)	良好	浅黄色	浅黄色		山本く214
S I 05	Po14	87 111 127	埋土中	土師器	甕	※15.0	△5.1			外面風化のため調整不明瞭。胴部にハケ目がわずかにみられる。内面口縁部～胴部横・斜め方向のハケ目。	やや粗(微砂を多量に含む)	良	明黄褐色	褐色	胴部粘土つなぎ痕がみられる。	山本く219
S I 05	Po15	66 111 155	埋土中	土師器	甕	※16.4	△3.4			内外面とも口縁部ヨコナデ。	密(1mm前後の砂粒を含む)	良	にぶい褐色	にぶい褐色		野崎223
S I 05	Po16	84 116	床面	土師器	胴部		△10.5			外面肩部ナデ・斜め方向のハケ目。胴部横・斜め方向のハケ目。内面胴部おもに左斜め上方向へのケズリ。	密(2.5mm程度の石英・砂粒を多く含む)	良	明黄褐色～黄灰色	明黄褐色	胴部黒斑有り。	松本158
S I 05	Po17	69	埋土中	弥生土器	底部		△3.3	※5.3		内外面ともナデ。風化著しい。	やや粗(砂粒を多く含む)	やや不良	灰黄褐色	にぶい褐色	内面スス付着	野崎216
S I 05	Po18	156	床面	土師器	高環	※17.9	12.2	※9.2		外面環部横方向ナデ。接合部付近ハケ目がみられる。筒部ナデ。内面環部ナデ。筒部横方向ケズリ後ナデ。裾部ナデ。ハケ目がわずかにみられる。	密	良	褐色	褐色		野崎206
S I 05	Po19	158	P19内	土師器	高環	※19.4	△5.8			外面ハケ目後ナデ。口縁部ナデ。内面ミガキ。環底部ナデ。剝離。	密	良好	褐色	褐色	内外面赤色塗彩	野崎207
S I 05	Po20	59	埋土下層	土師器	高環		△6.0	※9.5		外面筒部～裾部ナデ。内面筒部シボリ目。裾部ハケ目。	密(1～3mm大の砂粒を含む)	良	褐色	褐色		野崎204
S I 05	Po21	58 62	埋土下層	土師器	高環		△9.1	9		外面環底部風化のため調整不明瞭。接合部付近ハケ目がみられる。筒部ケズリ後ナデ。裾部ナデ。内面環底部剝離。筒部ナデ。裾部ハケ目後ナデ。	密(1mm前後の砂粒を多く含む。輝石を含む)	良好	褐色	褐色		山本く213
S I 05	Po22	87 127 155 157	P5内	土師器	直口壺	※9.8	15.6	15.9		外面口縁部ヨコナデ。胴部横～斜め方向のハケ目。底部ナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部強いナデ。指頭圧痕多数有り。	密(1～2mm程度の砂粒を多く含む)	良好	褐色	褐色	外面スス付着。	野崎205
S I 05	Po23	83 126	床面	土師器	椀	※12.3	4.7			内外面ともナデ。	密(1～3mm大の砂粒を含む)	良	にぶい褐色	にぶい褐色		野崎201
S I 05	Po24	66 81 87	床面	土師器	椀	※11.9	△4.4			内外面ともナデ。	密(微砂粒をわずかに含む)	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		野崎200
S I 05	Po25	79	埋土下層	土師器	椀	※12.2	△4.8			内外面ともに風化著しく調整不明。ナデか?	密(5mm以下の石英多数、2mm以下のカクセン石を含む)	良	黄褐色	黄褐色		松本157
S I 05	Po26	69 86 111	埋土中	土師器	椀	※13.4	△4.5			内外面とも風化のため調整不明瞭。	やや粗(細かい石英・砂粒を多量に含む5mm大の礫を含む)	良	褐色	褐色		山本く212
S I 05	Po27	163	埋土中	縄文土器	深鉢		△3.5			外面へラ描き沈線による山形文。内面ナデ。	密(2mm程度の石英を含む)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		厨子111
S I 06	Po28	92 95 102 119 120	埋土下層	土師器	甕	※17.4	△12.9			外面口縁部～肩部ヨコナデ。胴部斜め方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。指頭圧痕。胴部左方向ケズリ。	密(1～2mm大の砂粒を含む)	良	浅黄褐色	浅黄褐色	内面一部スス付着。	野崎202
S I 06	Po29	122 193	埋土中	土師器	甕	※21.0	△4.4			内外面ともに口縁部ヨコナデ。剝離著しい。	密(2mm以下の石英やカクセン石を多く含む)	良	褐色～にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		松本159
S I 06	Po30	93	埋土下層	土師器	甕	※15.4	△6.3			内外面ともナデ。	密(1mm前後の長石をわずかに含む)	良	浅黄褐色	浅黄褐色		野崎232
S I 06	Po31	103	埋土下層	土師器	甕	※17.0	△4.2			内外面ともに口縁部ヨコナデ。	密(1mmの石英を多数含む)	良	黄灰色	灰黄色		南條173
S I 06	Po32	102	埋土中	土師器	甕	※13.1	△3.8			内外面ともに口縁部ヨコナデ。	密(1～4mmの石英を数点含む)	良	灰黄色	灰黄色		南條171
S I 06	Po33	119	埋土下層	土師器	甕	※15.4	△4.2			内外面ともに口縁部ヨコナデ。	密(1mmの石英を数点含む)	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面スス付着	南條170

挿表6 小浜ワラ畑遺跡出土土器観察表(1)

遺構名	遺物番号	取上番号	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	底部径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色内	色外	調外面	備考	実測者番号
S I 06	Po34	118	埋土下層	土師器	椀	12.5	5.3			外面ナデ。かすかにハケ目痕がみられる。底部横方向ケズリ。内面ナデ。底部剝離著しい。	密(石英・輝石を含む)	良好	にぶい 橙色	にぶい 橙色		内面底部黒斑有り。	野崎210
S I 06	Po35	102	埋土中	土師器	椀	※13.0	△4.4			外面ナデ。内面口縁部ナデ。放射状暗文。	密(砂粒を含む)	良好	明赤褐色	明赤褐色			山本く227
S I 06	Po36	106	サブトレンチ内	縄文土器	胴部		△4.2			内外面ともに条痕	密	良好	黄褐色	黄褐色			山本く229
S I 06	Po37	146	埋土下層	縄文土器	浅鉢	※28.6	△4.6			外面口縁部2条凹線。体部縄文。内面丁寧なナデ。	密	良好	明黄褐色	浅黄褐色			厨子109
S I 07	Po38	222	埋土下層	土師器	甕	15.6	△27.6	23.8		外面口縁部ヨコナデ。胴部叩き目後斜方向ハケ目。下半ミカキがみられる。底部ハケ目後ナデ。肩部棒状工具による刺突文。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半左方向のケズリ。下半左斜め上方向ケズリ。肩部指頭圧痕有り。底部指頭圧痕。	密(1~3mmの石英を多量を含む)	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色		外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。肩部ヨコナデ。	南條168
S I 07	Po39	213	床面	土師器	甕	15.8	△10.1			外面口縁部ヨコナデ。胴部主に斜め方向ハケ目。肩部工具による刻み目。内面口縁部ヨコナデ。肩部ナデ、指頭圧痕。胴部右方向のケズリ。	密	良好	浅黄褐色	浅黄褐色		内外面ともにスス付着。	厨子102
S I 07	Po40	168	埋土上層	土師器	甕	※16.5	△8.0			外面口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。内面口縁部ヨコナデ。肩部ナデ→右方向ケズリ。	密(1mm大の砂粒を含む)	良好	橙色	橙色			野崎212
S I 07	Po41	168	埋土上層	土師器	甕	※15.6	△3.9			内外面ともにヨコナデ。	密(1mmの石英を多数含む)	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色			南條169
S I 07	Po42	181	埋土中	土師器	甕	※15.1	△3.5			内外面ともにヨコナデ。	密(1mm程度の砂粒を多数含む)	良	橙色	にぶい 黄褐色		外面口縁部スス付着。	山本く221
S I 07	Po43	180	埋土中	土師器	甕	※16.4	△4.0			内外面ともにヨコナデ。	密	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色			野崎231
S I 07	Po44	154 172	埋土下層	土師器	甕	※15.4	△4.9			内外面ともにヨコナデ。	密	良好	明黄褐色	明黄褐色		外面口縁部スス付着。	山本く220
S I 07	Po45	170	埋土下層	土師器	甕	※21.8	△6.4			外面口縁部ナデ。胴部横～斜め方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。胴部工具によるナデ。	密	良好	明褐色	にぶい 褐色		内外面ともに胴部スス付着。	山本く224
S I 07	Po46	170	埋土下層	土師器	甕	※16.8	△5.6			外面口縁部ナデ。胴部ハケ目。内面口縁部ナデ。胴部ケズリ後丁寧なナデ。	密	良好	明黄褐色	明黄褐色		外面スス付着	山本く225
S I 07	Po47	170	埋土下層	土師器	甕	※16.0	△3.7			外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部工具によるナデ。	密	良好	明黄褐色	明黄褐色		外面口縁部スス付着。	山本く226
S I 07	Po48	176 177 178 212	埋土下層	土師器	高環	25.2	17.3	※14.1		外面口縁部斜方向ハケ目後ナデ。坏底部ナデ。筒部斜方向ハケ目後縦方向ケズリ。後ナデ。裾部ナデ。内面口縁部ナデ。口縁部斜方向暗文。坏底部放射状暗文。筒部シボリ目後ナデ。裾部ハケ目、指頭圧痕。	密(1mmの石英を含む)	良好	浅黄褐色	浅黄褐色			厨子105
S I 07	Po49	140 170 171 180 193 276 278 323	埋土下層 P 5内	土師器	高環	※25.4	△9.6			外面口縁部ナデ。下半ハケ目が残る。口縁部指頭圧痕がまわる。坏底部ナデ。内面口縁部ナデ。口縁部斜方向暗文。坏底部放射状暗文。	密	良好	浅黄褐色	浅黄褐色		内外面ともに赤色塗彩。外面スス付着。	厨子107
S I 07	Po50	210	床面	土師器	高環	16.6	11.7	※9.7		外面口縁部ハケ目後ナデ。坏底部縦方向ハケ目。筒部縦方向ケズリ後ナデ。裾部ナデ。内面口縁部縦～斜方向暗文。坏底部放射状暗文。筒部シボリ目後ナデ。裾部ハケ目、指頭圧痕。	密(2mm以下の砂粒を多く含む)	良	橙色～ 暗赤褐色	明赤褐色～ 黒褐色		内面口縁部一部スス付着。	松本161
S I 07	Po51	172 192 203 206	埋土下層	土師器	高環	※15.3	10.8	9.2		外面口縁部ナデ。坏底部ハケ目。筒部縦方向ケズリ後ナデ。裾部ナデ。内面口縁部斜方向暗文。坏底部放射状暗文。筒部シボリ目後ナデ。裾部ハケ目、指頭圧痕。	密(1~4mmの石英を含む)	良好	浅黄褐色	浅黄褐色		内外面ともに赤色塗彩。脚部内面は一部塗彩。	南條163
S I 07	Po52	170 173 193 282 283 286 315	埋土下層 P 6 P 7内	土師器	高環	※15.2	11.9	※9.6		外面口縁部ナデ。坏底部縦方向ハケ目。筒部縦方向ハケ目。一方向凹形透かし。裾部ナデ。内面口縁部斜方向暗文。坏底部風化・剝離のため調整不明。筒部上半シボリ目。下半シボリ目後ナデ。裾部ハケ目、指頭圧痕。	密	良好	明黄褐色	明黄褐色		外面および内面口縁部・筒部下半～裾部赤色塗彩	厨子104
S I 07	Po53	205 211	床面	土師器	高環	18.0	16	10.4		外面口縁部ナデ。坏底部叩き。筒部ナデ。裾部叩き後ナデ。内面口縁部ナデ。坏底部風化・剝離のため調整不明。ナデか?脚部ナデ。	密(輝石・1~2mm程度の石英を多く含む)	良好	明褐色～ 明赤褐色	明褐色～ 明赤褐色		黒斑有り。	厨子101
S I 07	Po54	217	床面	土師器	高環	15.4	△6.5			外面口縁部ハケ目後ナデ。坏底部ハケ目。内面口縁部ナデ。口縁部斜方向ハケ目後斜方向暗文。坏底部放射状暗文。	密(1~3mmの石英を含む)	良	橙色	橙色			南條162
S I 07	Po55	209	埋土上層	土師器	高環	※15.3	△5.9			外面口縁部ナデ。坏底部ハケ目後ナデ。内面口縁部斜方向暗文。坏底部放射状暗文。	密(1mmの石英を含む)	良好	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色			南條166
S I 07	Po56	152 167 172 193	埋土下層	土師器	高環	※15.4	△6.1			外面口縁部ナデ。坏底部斜方向ハケ目。内面放射状暗文。	密(1~2mmの石英を含む)	良	浅黄褐色	浅黄褐色～ 灰黄色		内外面ともに赤色塗彩。外面スス付着。口縁部黒斑	南條161
S I 07	Po57	172 193 220	埋土下層	土師器	高環	※15.8	△5.0			外面口縁部ナデ。内面口縁部ナデ。口縁部斜方向暗文。	密(1mmの石英を含む)	良	黄褐色	黄褐色		内外面ともに赤色塗彩	南條175
S I 07	Po58	123 148 180	埋土上層	土師器	高環	※16.0	△5.6			外面口縁部上半ナデ。口縁部下半～坏底部斜方向ハケ目。内面風化著しく調整不明。ナデか?	やや粗(1~3mmの石英を多量を含む)	良	浅黄褐色	浅黄褐色		内外面ともに赤色塗彩	南條160
S I 07	Po59	193	埋土下層	土師器	高環	※16.8	△5.4			外面ナデ。接合部付近ハケ目。内面口縁部斜方向暗文。坏底部風化著しいが、放射状暗文と思われる。	密(2mm以下の砂粒・6mm程度のカクセン石を含む)	良	黄褐色	黄褐色		内外面ともに赤色塗彩	松本155
S I 07	Po60	180	埋土中	土師器	高環	※17.9	△4.2			内外面ともに風化のため調整不明。ナデか?	密(微砂粒をわずかに含む)	良	にぶい 橙色	にぶい 橙色		内外面ともに赤色塗彩	野崎228
S I 07	Po61	167 173 193	埋土下層	土師器	高環	△8.5		※10.0		外面坏底部ハケ目。筒部縦方向ケズリ後ナデ。裾部ナデ。内面坏底部剝離。筒部シボリ目。裾部ハケ目、指頭圧痕。	密(2mm以下の砂粒・カクセン石を含む)	良	黄褐色	黄褐色		内外面ともに赤色塗彩	松本153
S I 07	Po62	123 147 170 181	埋土上層	土師器	高環		△7.7	※15.5		外面筒部ハケ目後縦方向ケズリ後ナデ。裾部ナデ。内面筒部シボリ目。裾部ハケ目。脚部ナデ。	密	良好	浅黄褐色	浅黄褐色		内外面ともに赤色塗彩	厨子106
S I 07	Po63	213 215	埋土下層	土師器	高環		△6.0	※9.5		外面筒部ケズリ後ナデ。接合部付近斜方向ハケ目。裾部ナデ。内面筒部シボリ目後ナデ。裾部ハケ目、指頭圧痕有り。	密	良好	浅黄褐色	浅黄褐色		内外面ともに赤色塗彩。黒斑有り。	厨子103
S I 07	Po64	140 171 172 181 193	埋土下層	土師器	高環	※9.1		※5.5		外面筒部ケズリ後ナデ。裾部ナデ。内面筒部ナデ。裾部ハケ目、指頭圧痕。	密	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色		外面・内面裾部赤色塗彩	野崎211

挿表7 小浜ワラ畑遺跡出土土器観察表(2)

遺構名	遺物番号	取上号	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	底部径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成色	調内色	調外色	備考	実測者番号
S I 07	Po65	218	埋土下層	土師器	高坏		△6.0		9	外面筒部接合部付近シボリ目。縦方向ケズリ後ナデ。裾部ナデ。内面筒部シボリ目後ナデ。裾部ハケ目、指頭圧痕。	密(1~4mmの石英を含む)	良好	黄褐色	黄褐色	外面赤色塗彩。内面裾部部分的に赤色塗彩後、格子目状へろ記号	南條164
S I 07	Po66	152 167 180 193	埋土下層	土師器	椀	※11.0	4.4			内外面ともにナデ。指頭圧痕有り。	密(2mm以下の砂粒・石英を含む)	良	褐色	褐色	外面底部黒斑有り。	松本154
S I 07	Po67	213 216	埋土下層	須恵器	甗		△9.3	11.3		外面頸部波状文。胴部にて。胴部上位に不明瞭な凹線を上下2条ずつめぐらし、そのあいだに波状文を施文。円形透かし。内面頸部指ナデ。接合部粘土つなぎ痕有り。胴部上半ナデ。下半強いナデ、指頭圧痕が残る。	密(砂粒を含む、カクセン石を多量に含む)	良好	暗青灰色	にぶい黄色~暗青灰色	内面赤色塗彩痕有り。	山本く223
S I 07	Po68	207	埋土下層	須恵器	甗		△7.7	12.6		外面肩部ナデ。波状文を施文。胴部上位二条の凹線をめぐらし、そのあいだに波状文を施文。胴部下半回転ケズリ後ナデ。底部ナデ。内面ナデ。底部指頭圧痕がみられる。	密	良好	浅黄褐色~灰色	灰色~灰オリーブ色	外面肩部~胴部上位自然釉。	野崎233
S I 08	Po69	164 175 202 323	埋土上層	土師器	高坏		△3.2		※15.5	外面ナデ。内面ハケ目。	密(1~2mm程度の石英を含む)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面赤色塗彩。	南條176
S I 09	Po70	288	床面	土師器	壺	※15.2	△4.8			内外面ともに口縁部ナデ。	密(1~2mm程度の石英・砂粒を含む)	良好	褐色	褐色	外面口縁部スス付着。	山本く218
S I 09	Po71	292 313	床面	土師器	甗	※17.4	△11.8			外面口縁部~肩部ヨコナデ。胴部斜め方向の細かいハケ目。工具痕有り。内面ヨコナデ。肩部ナデ、成型時の指頭圧痕。胴部左斜め上方向ケズリ。	密(3mm程度の石英をわずかに、2mm以下のカクセン石を多く含む)	良	明黄褐色	浅黄褐色	外面スス付着。	松本152
S I 09	Po72	314	S K 1 埋土下層	土師器	短頸壺	※11.3	△4.6			内外面横方向細かいミガキ。	密(1mm大の砂粒を含む)	良好	褐色	褐色		南條192
S I 09	Po73	221	埋土中	須恵器	甗		△3.5			外面回転ナデ。一条の凸帯。内面ナデ。	密	良好	灰色~黄褐色	黒	内面一部自然釉。	山本く228
S I 09	Po74	292	埋土上層	須恵器	甗		△3.5			外面口縁部ナデ。頸部波状文。内面ナデ。	密	良好	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		野崎226
S I 09	Po75	221 295 318	S K 1 内	縄文土器	深鉢	※26.4	△8.4			外面L R 縄文。内面丁寧なナデ。	やや粗(1~3mm大の砂粒を多量に含む)	やや不良	褐色	にぶい黄褐色	外面スス付着	山本く234
S K 05	Po76	197	埋土中	縄文土器	浅鉢	※20.4	△3.5			内外面ともに口縁部ナデ。	密(微砂粒・石英を含む)	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口縁部内外面に薄くスス付着。	野崎235
S K 05	Po77	197	埋土中	縄文土器	深鉢		△5.1			外面口縁部L R 縄文。頸部以下ナデ。内面横方向ミガキ。	密(1mm大の石英・砂粒あり)	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	外面スス付着。	野崎110
S K 05	Po78	196	埋土中	縄文土器	鉢		△1.4			外面口縁部縄文後凹線。内面ナデ。	密	良	暗灰黄色	灰黄褐色・明黄褐色	野崎108と同一か。	山本く233
S K 05	Po79	192	埋土中	縄文土器			△4.3			外面L R 縄文後沈線。内面ナデ。	密(1mm以下の金雲母・砂粒あり)	良	にぶい褐色	褐色		山本く230
S S 01	Po80	327	埋土中	土師器	壺		△5.3	※13.0		外面胴部縦方向ハケ目。内面胴部右方向ケズリ。	密(1mm大の石英・砂粒あり)	良	オリーブ黒色	オリーブ黒色		南條174
自然流路 S D 01	Po81	160	埋土中	縄文土器	鉢	※21.9	△4.0			外面口縁部縄文後凹線。内面ナデ。	密(1mm以下の石英・砂粒を多く含む)	良	暗灰黄色	灰黄褐色・明黄褐色	山本く233と同一か。	野崎108
自然流路 S D 01	Po82	184	埋土中	縄文土器	鉢		△4.2			外面斜め方向の条痕。内面ナデ。	密(1mm以下の石英・砂粒を多く含む)	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		野崎236
自然流路 S D 01	Po83	184	埋土中	土師器	甗	※12.4	△4.9			外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。屈曲部以下ケズリ。指頭圧痕。	やや粗(微砂粒を多く含む)	良	明赤褐色	明赤褐色		山本く222
自然流路 S D 01	Po84	182	埋土上層	須恵器	坏身	※12.0	△1.4			外面回転ナデ。内面回転ナデ。たちあがり端部下側に沈線。	密	良好	青灰色	青灰色		野崎213
自然流路 S D 01	Po85	161	埋土中	須恵器	坏身	※11.9	△3.5		※6	外面回転ナデ。底面回転ケズリ後ナデ。内面回転ナデ。底面不定方向ナデ。	密	良好	灰色	灰色・青灰色		野崎214
自然流路 S D 01	Po86	162	埋土中	白磁	小皿	※8.5	2.5		※4.3	外面回転ナデ。底面回転糸切り。内面回転ナデ。	密	良好	灰黄色~灰白色	灰黄色~灰白色	外面口縁部、内面に施釉。	野崎217
自然流路 S D 01	Po87	162	埋土中	瀬戸			△1.4		※5	外面底部付近回転ナデ。削り出し高台。高台付近工具による押しえ痕。内面回転ナデ。底面環状の工具痕。	密	良好	灰黄色~緑灰色	灰黄色	内面施釉。底面蛇目釉剥き。	野崎218
遺構外	Po88	34	E 3	縄文土器	深鉢	※22.6	△5.1			外面条痕。内面ナデ。	密(1mm以下の石英・砂粒を含む)	良好	にぶい黄褐色	明黄褐色		山本く232
遺構外	Po89	70 192		縄文土器			△8.0			外面粗いナデ。内面粗い条痕。	密(1~2mm大の黒雲母、1mm以下の石英を含む)	良	浅黄褐色	暗灰黄色		南條177
遺構外	Po90	2	B 2	縄文土器	鉢	※18	△4.4			外面横方向の細かいハケ目。端部ナデ。内面横方向の細かいハケ目。	密(3~4mm大の石英砂粒あり)	良	灰黄色	灰黄色		野崎234
遺構外	Po91	70	F 3	縄文土器			△3.6			外面楕円形の押型文。内面ナデ。	密(1mm以下の石英・砂粒を含む)	良好	にぶい黄褐色	褐色		山本く231
遺構外	Po92	179	F 5	土師器	高坏		△6.2		8.8	外面筒部縦方向ミガキ。裾部ナデ。内面筒部シボリ目。裾部横方向ハケ目。指頭圧痕。	密(1mm以下の石英・砂粒を含む)	良好	明黄褐色	明赤褐色	外面脚部に赤彩。裾部内外面にスス付着。	南條165
遺構外	Po93	11 41 323	G 4・G 5	土師器	高坏		△7.3		※9.2	外面筒部縦方向ミガキ。接合部付近剝離。裾部ナデ。内面筒部シボリ目。裾部横方向ハケ目。屈曲部付近ケズリ。	密(1mm以下の石英・砂粒あり)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面脚部に赤彩痕。	南條167
遺構外	Po94	99	F 3	須恵器	坏身	※13.8	△3			内外面ともに回転ナデ。	密	良好	青灰色	青灰色		野崎215

挿表 8 小浜ワラ畑遺跡出土土器観察表(3)

遺構名	遺物番号	取上号	出土位置	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	形態上の特徴	備考	実測者番号	
S I 07	S1	219			砥石	流紋岩	15.0	7.1	5.3	950	断面六角形状を呈す。主な砥面は6面有り、よく使われてい込まれている。	火をうけて赤変している。	野崎221
S I 07	S2	170			敲石	角閃石安山岩	8.4	6.2	4.6	360	楕円形を呈す。平面部に敲打痕あり。		野崎220
S I 07	S3	326	床面		石皿	輝石安山岩	35.2	34.9	8.2		扁平な不整楕円形を呈す。中央部に敲打面がある。		岩崎6
自然流路 S D 01	S4	145			砥石	流紋岩	7.3	5.5	4.5	250	断面方形を呈す。砥面は3面有り、よく使われてい込まれている。		野崎219
遺構外	S5	270	G 3		磨製石斧	安山岩	8.4	5.3	3.0	190	刃部を欠く。断面楕円形を呈す。		野崎227

挿表 9 小浜ワラ畑遺跡出土石器観察表

遺構名	遺物番号	取番上号	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	底部径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調内面	色調外面	備考	実測者番号
SS01	Po1	15 17 20 26 28 34 36 39	埋土下層	土師器	甕	24.9	△14.8	※25.8		外面口縁部ナデ。胴部縦方向ハケ目。内面口縁部ナデ。屈曲部以下右方向ケズリ。	密(2mm大の石英・長石・砂粒を多く含む。)	良好	にぶい黄橙色～橙色	にぶい黄橙色	外面胴部・口縁部にスス付着。	松本162
SS01	Po2	12 13	埋土中	土師器	甕	※27.6	△14.3			外面口縁部ナデ。胴部粗い縦方向ハケ目。内面口縁部ナデ。屈曲部以下左方向ケズリ。	密(1～3mm大の砂粒を多く含む。4mm大の礫有り。)	良好	赤褐色	明赤褐色	内面胴部に炭化物付着。	山本く237
SS01	Po3	10	埋土中	土師器	甕	※32	△4.9			外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。屈曲部以下右方向ケズリ。	密(1～2mm大の石英あり。)	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		南條180
SS01	Po4	41	埋土下層	須恵器	環蓋	※12.1	3.9			外面口縁部付近回転ナデ。体部一部平行叩き認められる。底部回転ヘラケズリ。内面口縁部回転ナデ。底部不整方向ナデ。	密(1mm大の石英あり。)	良	黄灰色	黄灰色		南條178
SS01	Po5	41	埋土上層	須恵器	環身	※14.3	△3.1			内外面ともに風化により調整不明瞭。回転ナデ。	密(1～3mm大の石英有り。)	不良	灰オリーブ色	灰オリーブ色		南條179
SS01	Po6	25 28 35 38	埋土中	須恵器	甕	※11.6	△4.1			内外面ともに口縁部回転ナデ。	密(1mm大の砂粒を多く含む。)	良好	青灰色～黄褐色	青灰色～黄褐色	外面口縁部に自然釉付着。	山本く236
SS01	Po7	11	埋土中	土師器	甕					外面底部ナデ。内面ケズリ。	密(1～4mm大の石英を多く含む。)	良好	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		南條181
SK04	Po8	29	埋土中	須恵器	環蓋	14.4	2.8		つまみ径 2.3	外面口縁部回転ナデ。天井部付近回転ケズリ後ナデ。つまみ部ナデ。内面回転ナデ。天井部不定方向ナデ。	密(4mm大の砂礫有り。1mm大以下の長石・黒雲母を含む。)	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		松本163
SK04	Po9	30	埋土中	須恵器	環蓋	16.5	3.1		つまみ径 2.7	外面口縁部回転ナデ。天井部・つまみ部回転ナデ。内面回転ナデ。天井部後ナデ。	密(2～3mm大の砂粒を多く含む。)	良好	青灰色	青灰色		厨子113
SK04	Po10	31	埋土中	須恵器	環身	11.7	4.4		6.8	外面口縁部回転ナデ。底部付近右方向ケズリ。底面回転糸切り。内面回転ナデ。底面回転ナデ後不整方向ナデ。	密(1～2mm大の砂粒を含む。)	良好	暗青灰色	暗青灰色		山本く235
SK04	Po11	32	埋土中	須恵器	環身	12.3	4		7.7	外面口縁部回転ナデ。底部付近右方向ケズリ。底面回転糸切り。内面回転ナデ。底面回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒を多く含む。)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色～にぶい黄褐色		厨子112

挿表10 小浜小谷遺跡出土土器観察表

遺構名	遺物番号	取番上号	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	底部径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調内面	色調外面	備考	実測者番号
SK02	Po1	22 26	埋土中	土師器	甕	※13.6	△2.9			内外面とも口縁部ヨコナデ。	密(1～2mm大の石英を含む。)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		南條182
SK04	Po2	33	埋土中	土師器	甕	※16.3	△5.9			外面口縁部ヨコナデ。胴部指頭圧痕・縦方向ハケ目。内面口縁部ナデ。屈曲部以下右方向ケズリ。	密(1～2mm大の石英を含む。)	良好	にぶい黄褐色～暗灰色	にぶい黄褐色～暗灰色	外面黒斑あり。	松本164
SK04	Po3	33	埋土中	土師器	高環					内外面ともにナデ。	密	良好	橙色	橙色	外面赤色塗彩。	南條186
遺構外	Po4	16	x グリッド	土師器	甕	※12.8	△2.6			内外面ともに口縁部ヨコナデ。	密(1～2mm大の石英を含む。)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		南條183
遺構外	Po5	16	x グリッド	土師器	甕		△7.2			外面肩部横方向ハケ目。内面ケズリ。	密(2mm以下の石英を含む。)	良好	にぶい黄褐色	浅黄褐色		松本165
遺構外	Po6	8		土師器	直口壺	※10.4	△3.5			内外面ともに口縁部ヨコナデ。	密(1mm大の石英あり。)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		南條184
遺構外	Po7	35	D11	土師器	高環 襷部		△2.9		※14.8	外面ヨコナデ。内面ハケ目。	密(1mm大の石英有り。)	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面赤色塗彩。	南條185
遺構外	Po8	46	I 3	染め付け	小皿	※9.4	2.05		※5.2	内外面ともに施釉。内面染め付け。	密	良好	灰白色	灰白色		南條190
遺構外	Po9	42		縄文土器			△3.9			外面粗い糸痕。内面ナデ。	やや粗(2mm以下の石英・長石を含む。)	良好	にぶい黄褐色	明褐色		松本166
遺構外	Po10	43	C5	縄文土器			△2.4			外面撚り糸文。内面剝離著しい。ナデか。	密	良好	明黄褐色	明黄褐色		松本167

挿表11 池ノ谷第2遺跡出土土器観察表

遺構名	遺物番号	取番上号	出土位置	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	形態上の特徴	備考	実測者番号
SK02	S 1	20	埋土中	磨石	角閃石安山岩	12.45	9.65	5.8	1100	楕円形を呈す。		山本く238
遺構外	S 2	45	B 5	石鏟	安山岩	6.65	7.1	1.4	100	扁平な不整楕円形を呈す。両端部を打ち欠く。		南條187
遺構外	S 3	39		磨石	黒雲母花崗岩	9.35	7.8	5.5	540	楕円形を呈する。よく磨かれている。		松本169

挿表12 池ノ谷第2遺跡出土石器観察表

遺構名	遺物番号	取番上号	出土位置	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	形態上の特徴	備考	実測者番号
SK07	F 1	47	底面	刀子	5.4	1.9	1.1		基部片。刀身を欠く。基部断面長方形を呈す。	基部木質遺存。	山本く239
遺構外	B 1	18	D9	煙管吸口	6.55	1.0	1.0		円錐状を呈す。		山本く240

挿表13 池ノ谷第2遺跡出土金属器観察表